

54ら読書会報告

2019.1025～

第 1 回 2019.1025
第 2 回 2020.0824
第 3 回 2020.1030
第 4 回 2021.0226
第 5 回 2021.0528
第 6 回 2021.0827
第 7 回 2021.1126
第 8 回 2022.0225
第 9 回 2022.0527
第 10 回 2022.0826
第 11 回 2022.1125
第 12 回 2023.0224
第 13 回 2023.0526
第 14 回 2023.0825
第 15 回 2023.1117
第 16 回 2024.0216
第 17 回 2024.0524
第 18 回 2024.0823
第 19 回 2024.1122
第 20 回 2025.0228
第 21 回 2025.0523
第 22 回 2025.08.22
第 23 回 2025.1128

第 23 回 秋 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会
2025. 11. 28

【参加者】

篠原泰司（一文）、福島碧（社学）、山口伸一（理工）、石河久美子（一文）、沖宏志（理工）、露木肇子（法）、鈴木伸治（商）、首藤典子（一文）、仁多玲子（商）、宮田晶子（政経）、

前田由紀（一文）
（以上 11 名、発表順、敬称略）

山本周五郎受賞作で、早大出身の堺雅人主演で最近映画化された作品から始まり、ロスチャイルド家の伝記、司馬遼太郎作品、哲学的陸上アニメ、早大出身三浦しをん作の辞書編纂物語、新技術マインドアップローディング、高市発言で物議となっている安保法制、ユダヤ人の歴史、ノーベル文学賞受賞の韓国作家作品、夏目漱石三作品、大人向けチェコ絵本、「ばけばけ」で話題の小泉八雲と岡倉天心の日本文化論と今回も多彩な本が揃い、興味が尽きない読書の秋にふさわしい一日となった。
(発表順、文体は常体に統一)

○篠原泰司（一文）

『平場の月』 朝倉かすみ 光文社文庫

作者は北海道出身の小説家。たまたま埼玉県朝霞市に住む機会があり、この小説を書いた。

2019 年の山本周五郎賞受賞。17 万部以上の売り上げがありベストセラーになった。内容は悲恋のストーリーなのだが、まず、描かれる相続、葬式、法事など年齢を重ねると経験せざるをえない各種の行事の実感あふれるリアルな描写には感心させられた。50 過ぎになって地元に帰ってきた二人の主人公の人生経路は普通の人間が経験しえないことなのだが、特に須藤葉子の場合はこれだけで別の小説が書けそうな話なのだが、そういう特別な事柄をも乗り越えて読む者にある種の悔恨の気持ちを共有させてしまう。過ぎ去ってしまった自分の過去への哀惜の念と取り返せない悔恨の情を読者に抱かせてしまう。これがこの小説の眼目なのと思った。小説の舞台は私が住む朝霞台の周辺であり実名ではありません出てこないが、居酒屋、花屋、スーパー、コンビニなどだが、まさにそのまで出てくる。

映画「平場の月」

封切りの 11 月 14 日に鑑賞した。小説を読んだ後で、正直、須藤葉子を映像で表現するのは難しいと思っていた。しかし、映画監督、脚本家のおかげで陳腐で説明不足になりそうな部分は何とか乗り越えられているし、堺雅人や井川遥の演技力と、その演技にかける

情熱

に感動する部分があった。小説に出てこない人物や設定がある。特に薬師丸ひろ子の唄と塩見三省に注目だ。というわけで、映画の方も小説とは違った味わいの深い良いものになっていると思った。なお、原作に出てくる朝霞台中央総合病院はT M Gという近代的な病院になっているので、ロケ地も朝霞台南口ではなく、北朝霞駅周辺になっている。ロケ地は90%が朝霞。残りが志木市と狭山市だろう。近いうちにもう一度鑑賞しに行く予定だ。

○福島碧（社学）

『赤い橋 ロスチャイルドの謎（I～4）』 広瀬隆、集英社文庫

今年の6月、家族で南仏のロスチャイルド邸を訪れることになり、その前にロスチャイル

ド家を知ろうと、読み始めた。この本を読むと、世界は、このようにできているのか・・・
目からウロコというか、考え方が180° 変わり、例えば海外のニュースの見方が変わる。
著者の広瀬隆氏は、早稲田大学卒の先輩である。

『花神（上中下）』 司馬遼太郎、新潮文庫

寡黙にして判断に狂いはない・・司馬遼太郎氏は、こういった主人公・軍神・大村益次郎

が好きなんだろうな、と思う。同じく氏の著書『鬼謀の人』、『王城の護衛者』は、この『花神』を書く前の下書きの短編かと思われる。『鬼謀の人』には、シーボルトの娘イネは、まだ出てこない。

8月54ら会で松山へ行った折り、少し足を伸ばして益次郎のいた宇和島城まで行った。宇和島の天守閣からは、益次郎が軍艦を設計して建造し、浮かべたという港がよく見えて、感激した。

○山口伸一（理工）

映画『ひやくえむ。』 魚豊 原作

今年、「国宝」よりも強く推すのがアニメ『ひやくえむ。』。「ち。」の作者、魚豊氏が21歳で描いた漫画が原作。100m走に人生を賭ける男たちを描きながら、問うのはただ一つ、「なぜ走るのか」。家族や恋愛、記録といった周辺要素を潔く削ぎ落とし、走る行為を掘り下げてゆく。主人公を取り巻くライバルたちの哲学的な台詞が要所を締め、とりわけ「現実を真正面で捉えないと現実逃避は出来ない」は、自己欺瞞を断つ至言として胸に残った。

○石河久美子（一文）

『舟を編む』 三浦しをん、光文社文庫

10年ほど前に本屋大賞を取ったベストセラー小説。最近この原作を土台にした令和版「舟を編む」がNHKドラマになり、それが大変面白かったので、改めて原作を読むことにした。

コミュニケーション能力に乏しいオタクの青年が、辞書を作ることに魅せられ 10 数年かけて辞書を完成させていく過程が、自身の成長とともに描かれる。軽いタッチの文体ではあるが、想像を絶するような労力と根気、言葉への感性が必要とされる辞書作りの背景、そのような作業を経て編纂される辞書の凄さが伝わってくる。普段何気なく使っている言葉について、改めて考えさせられる書。

ドラマ版「舟を編む」 NHK

ドラマでは、ファッション誌の担当だった言葉に無頓着な若い女性が主人公。最初はいやいやだが、辞書を作る過程で言葉の大切さに気付き、辞書作りに夢中になっていく。デジタル化が進む中、紙の辞書を作る意義は何か。言葉は定義の仕方によっては、偏見を助長するリスクもある、時代によって言葉の定義は変わっていく、言葉は使い方によって人を傷つけることもあるが、癒す力もあるといったことが、具体的なエピソードを通して示される。言葉にまつわる示唆に富んだ内容のドラマ。NHK オンデマンドで視聴可能。

○沖宏志（理工）

『意識はどこからやってくるのか』 信原幸弘、渡辺正峰、ハヤカワ新書

マインドアップローディングという新技術でバイオ的身体を仮想空間にアップロードして永遠に生きるということを現実化したいということに本気で取り組んでいる渡辺正峰さんという神経学者が実におもしろい。

意識の問題を考えるとき、今のところ哲学は圧倒的に科学より先行しているとか。

○露木肇子（法）

『検証 安保法制 10 年目の真実 「仙台高裁判決」の読み方』 長谷部恭男、棚橋桂介、豊秀一、朝日新書

2014 年 7 月、集団的自衛権を認める閣議決定が出て、これを違憲として全国で 25 件の訴訟が起こされた。2023 年 12 月 5 日、仙台高裁が初めて憲法判断をした。結果は合憲判決だったが、小林久起裁判長は、早大の長谷部恭男教授の 30 分以上の証人尋問を経てこの結論に至った。

裁判長は翌年 4 月 20 日致死性不整脈で急逝した。この裁判長は司法研修所同期の友人だった。彼の長谷部教授への問い合わせからは、彼の真意が伝わってきて、これが単なる合憲判決ではないことが明らかとなってくる。

この判決には、司法が示す「存立危機事態」とは何かが明記されているが、当事者双方から上告されることなく確定し、憲法判例 100 選に選ばれるに至っている。

『ユダヤ人の歴史 古代の興亡から離散、ホロコースト、シオニズムまで』 鶴見太郎、

中公新書

本著はユダヤ人 3000 年の歴史を新書 1 冊に詰め込んだ、深く重たい本である。

紀元前にはダビデやソロモンによる栄華を極めた王国もあったようだが、キリスト教が趨勢となる中、ユダヤ人は五大陸を流浪し、壮絶な迫害を受けながらも建国に至り、さらに拡大を謀る。なぜそこまで嫌われるのか、なぜここまで虐殺できるのか、なぜ性差別の慣習の中でギンズバーグのような革新的な女性裁判官が生まれたのか、数々の謎を解き明かしてくれる「目から鱗」本だ。

○鈴木伸治（商）

『菜食主義者 新しい韓国の文学 01』ハン・ガン（韓 江）、きむ ふな訳、クオン（2011）

2024 年のノーベル文学賞を受賞した韓国の作家ハン・ガンが、韓国で最も権威のある文学賞「文学賞」とアジア初のイギリスのマン・ブッカー国際賞を受賞した作品である。

これまでいわゆる純文学は、ノルウェー・ブック・クラブが 2002 年に選定した

「The top 100 books of all time」

<https://www.theguardian.com/world/2002/may/08/books.booksnews>

から概ね時代順に読んできており、近年、女性作家の『高慢と偏見』（ジェーン・オースティン）、『嵐が丘』（エミリ・ブロンテ）、『ミドルマーチ』（ジョージ・エリオット）は恋愛や女性の生き方など興味深く読むことができたのだが、『ダロウェイ夫人』（ヴァージニア・ウルフ）は女性の日常と戦争後遺症のある帰還兵の自殺で内容的に理解し難く戸惑うことに。

これは、女性作家の作品をほとんど読んでこなかったためかと思い、まずは近年話題になった年齢的にも近い女性作家の作品を探していたところ、たまたま本屋で見かけたことか

ら購入した。

一読してその内容は「極端・過激・奇抜」であり、かつて観た韓国映画「オールド・ボーイ」に近い印象で、最初に読む本としてはお勧めできない。続いて読んだ『すべての、白いものたちの』をまずは読むことをお勧めしたい。その上で本書を読むと戸惑いが軽減されて読めるのではないかと。

『すべての、白いものたちの』ハン・ガン、斎藤真理子訳、河出文庫（2023 年）

平野啓一郎が解説しているように「小説というより連作散文詩といった趣」が強く、私は詩人でもあるハン・ガンの詩集として読み進めた。内容は、表題のとおり白いものたちを題材に、自己と母、早世した姉、ソウルと執筆中に滞在したワルシャワでの出来事について、女性独自の視点で鋭敏な感受性で感じたままを繊細に掬い取って表現したものになっているように感じた。

○首藤典子（一文）

『こころ』 夏目漱石、新潮文庫

何気無く手に取った三冊が、いずれも男女の三角関係を綴った作品であったことに驚く。『こころ』では、主人公の書生が先生と慕う人物の遺書と思われる長い手紙を受け取り、読み終わるやいなや、危篤状態の父親を親族に託し、先生の元に急ぎ汽車に乗るといったドラマ仕立て。先生と縁談があった女性に親友から好意があると告げられ、その告白後に女性の母親と縁談を決めてしまった先生。それを知った親友は頸動脈を切り自殺する。女性はその事情を知らないまま、結婚生活は続いていくも、先生はその悔恨から逃れることができず、苦しい胸の内を吐露した文を書き綴り書生に送り、自殺すると告げる。汽車に乗った書生は、果たして先生の最後に間に合うのだろうか。

『それから』 夏目漱石、新潮文庫

親の支援を受け、働くことに進められる縁談をのらりくらりとやり過ごしながら暮らしている主人公。結婚した友人が失職し、生活費を借りに来たその細君を不憫に思い頻繁に会うようになる。会うにつれて親友の彼女に対する愛情が欠けていると思うようになり、代わって自分がその細君の面倒をみると親友に告げる。面子を潰された友人は、主人公の父親にその顛末を手紙で伝えたことから、怒った父親が支援を打ち切り、兄弟からも絶縁され、主人公は全てを失うという話。

『門』 夏目漱石、新潮文庫

親友の妻と駆け落ちをしたという過ちが、元夫の前途を傷つけたことに自分達も痛く応えており、人目を避けてひっそり暮らしている。文中では、「一生を暗く彩った関係は二人の影を薄くして、幽霊のような思いを抱かしめた。」とある。ある日、借家の大家の弟が蒙古で牧畜をしたり、冒険者のような暮らしをしていて、その弟に同行している者が妻の元夫と知る。大家の家に滞在するので一緒に食事でもと誘いを受け、会えるはずもない相手に鉢合わせすることに怯え始める。どうにかしてこの状況から逃れたいと、しばらく座禅を組んで頭を休めようと鎌倉の禅寺へ向かう。その不在の間に蒙古へ帰って行った大家の弟と元夫。「彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて、頭に触れずに過ぎたらしかった。けれども、これに似た不安はこれから先何度も、色々な程度において、繰り返さなければ済まないような虫の知らせがどこかにあった。」と今後を暗示する文が文豪漱石所以の表現だろうか。

○仁多玲子（商）

毎回、オンラインで実施される読書会。オンラインで実施するから、今のメンバーが集まるのではないかでしょうか。いろいろな地域の方が参加されています。それが、今の読書

会の特徴になっていると思います。私も、夜、対面で実施されるのなら、多分参加しないと思います。オンラインだからこそ、家でパソコンを開いて、ゆっくり、皆さんとの本の紹介を聞いています。それが、一つの楽しみになっています。これからも、ずっとこの会が存続することを願います。幹事の方、よろしくお願ひします。

○宮田晶子（政経）

『三つの金の鍵 魔法のプラハ』ピーター・シス、柴田元幸訳、BL出版

作者のピーター・シスはチェコ生まれで、ロス五輪に関連する仕事で渡米。しかしロス五

輪への東欧諸国のボイコットで帰国命令が出され、それに反発してアメリカに留まった。アメリカで結婚して生まれた子どものために、故郷のプラハを伝えるためにこの本を制作した。気球に運ばれて生まれ育った街に戻った「ぼく」は、生まれ育った家に入るためには三つの金の鍵を探さなければならない。黒猫に導かれて街を彷徨い、さまざまな場所で鍵と巻紙を受け取る。巻紙には、プラハにまつわる3つの伝説が書かれており「ぼく」は鍵を手に入れて無事に家に入ることができた。ピーター・シスの絵は幻想的で、魔法の街と言われるプラハの雰囲気を暗めのタッチで表現する。3つの伝説も興味深い。プラハを訪ねてみたくなる。

『ピーター・シスの闇と夢』ピーター・シス、柴田元幸、赤塚若樹ほか、国書刊行会

数年前にピーター・シスの「ピーター・シスの闇と夢」という展覧会が日本で開催され、それをきっかけに制作された本のようだ。ピーター・シスのイラストや絵本原画が解説とともに紹介されている。シスの幻想的な絵がたくさん見られるのも楽しいが、翻訳者の柴田さんとの対談も面白かった。シスの背景にある、抑圧された東欧での生活があったからこそその自由を守ることのメッセージなど興味深かった。

○前田由紀（一文）

『NHK「100分で名著」ブックス 小泉八雲 日本の面影』池田雅之、NHK出版

八雲の日本での初の著作が明治の日本を海外に紹介している『日本の面影』である。この解説書では、庶民の質素で清廉な生活、神社仏閣、伝承話、盆踊り、庭、自然に宿る神などの記述に聴覚の言語化の特徴があり、根底に日本文化に共鳴する深い思考と敬愛の念があると分析している。八雲は「日本人の精神には素晴らしい平静さが保たれている」と言及しているが、海外から見る視点から日本文化を重層的に顧みる機会としたいものだ。

『対訳ニッポン双書 茶の本 The Book of Tea』岡倉天心、IBCパブリッシング

八雲と同時代の天心は伝統日本美術の復興運動を起こしたが、当時西欧化に邁進してい

た日本では孤立し、ボストン美術館で職を得、NY で日露戦争直後に英語でこの本を出版している。東洋に無理解な西洋に憤り、富と権力を求める争いを嘆き、「おぞましい戦争の栄光が文明國の証なら、われわれは喜んで野蛮人のままでいよう。」武士道が「死の術」として話題となるが、茶道は、「生の術」であるとし、「夢を夢にみて、美しく、されど、取りとめのないことに時間をゆだねてみよう」とお茶に誘う。茶室（数寄屋）は余計な装飾を排した簡素な小屋であり、静謐な自然との穏やかな調和を重んじた心の平穡に日本の美を見出し紹介している。原文が英語のせいか率直に述べられているところに好感をもった。

* 次回は、宮田晶子さん（政経）の司会で、2月27日（金）冬の54 ら
読書会を予定しています。

【参加者】

篠原泰司（一文）、沖宏志（理工）、石河久美子（一文）、首藤典子（一文）、山口伸一（理工）、
露木肇子（法）、仁多玲子（商）、前田由紀（一文）、斎藤悟（社学）、宮田晶子（政経）
(以上 10 名、敬称略)

今回は、英國のダガー賞受賞が話題となった『パパガヤの夜』から始まり、世界的に注目を集めてい
るエマニュエル・トッドの『西洋の敗北』、しまなみ海道への旅を控えている方からは『村上海賊の娘』、
現在放映中の朝ドラ『あんぱん』にちなんだ本など、今回もバラエティに富んだ本が紹介された。映画
では、いま話題の『国宝』、そして前回の『教皇選挙』つながりでフランシスコ前教皇に関連した映画 2
本が取り上げられた。今年は戦後 80 年に当たるが、それに関わる本が紹介されたのも興味深かった。

(発表順、文体は常体に統一)

○篠原泰司（一文）**『パパヤガの夜』 王谷昌 、河出文庫**

前半部のバイオレンスアクション（けんか）の圧倒的な迫力と後半部の逃避行の辿った広大な時空の
広がりのコントラストが心に残る小説だ。読者を強く引き込むストーリー展開の途中に、次元が変わっ
てしまうような不思議な部分が現れて、まるで魔術をかけられたような気分になる。「パパヤガ」というの
はスラブ神話の魔女の名前らしいが、この小説自体がそもそも魔術を土台において書かれたのもかもしれない。
思えば謎に満ちた主人公（新道依子）の出生、つまり彼女の両親はパパヤガなのかもしれない。
そう考えれば大いに合点が行く。ぜひ映画なりドラマに仕立ててほしい作品だ。

映画『国宝』 李相日監督

2025 年 8 月 26 日現在、実写映画（アニメではなく）の興行記録を塗り替えそうな勢いである。ほぼ 3
時間の長編なので様々な要素が詰まっているが、私は事前に九鬼周造の「いきの構造」を読んで、それ
を基にした視点を用意して鑑賞した。視点の中心はまさに主人公 2 人、喜久雄（吉沢亮）と俊介（横浜
流星）の渾身の演技である。

九鬼周造曰く、「運命によって「諦め」を得た「媚態」が「意氣地」の自由に生きるのが「いき」である」。(P107) 九鬼の言う「媚態」と「意氣地」、そして「諦め」が映画の中で現れる場面があつて、充分
に納得した。とても面白く楽しめた映画だった。

『西洋の敗北』 エマニュエル・トッド、文藝春秋

西洋（アメリカ）に繁栄をもたらしたプロテスタンティズムはもはや破綻し、アメリカは国家ゼロの
ニヒリズム状態にある。ウクライナ侵攻も、ロシアよりもアメリカのせいでの、その背景には西洋の敗北
がある…というのがエマニュエル・トッドの意見。

個人的には、その意見には反対だが、その分析には見るべきものがある。

(個人的には、ロシアの一歩進んだ暴力性“道徳〈宗教〉ゼロ状態”のほうがより問題と感じる)

○石河久美子（一文）

『チア男子』朝井リョウ、集英社文庫

早稲田大学の男子チアリーディング部ショッカーズに着想を得た青春スポーツ小説。実際にショッカーズのパフォーマンスを観る機会があり、迫力のあるアクロバティックな演技と、さく裂する笑顔と若さに感銘を受け、この本も読んでみることにした。それぞれ家族との関係に悩んでいたり、コンプレックスや葛藤を抱えた部員たちがチアを通して、自分たちの課題に取り組み成長していく姿がいきいきと描かれる。チアリーディングのルールや、技のイラスト付き解説もあり、実際のパフォーマンスを観てから読むとさらにチアリーディングへの興味が湧く。

映画『ローマ法王になる日まで』ダニエル・ルケッティー監督（イタリア）

ロックスター教皇とまで言われ絶大な人気を誇ったフランシスコ教皇の伝記映画。アルゼンチンの軍事独裁政権下の神父や活動家へのすさまじい迫害が主に描かれる。軍に対して草の根的活動を行う神父たちを擁護する立場にあったフランシスコであるが、結果的に多くの仲間が殺害され自分が生き残ったことに苦悩する日々が続く。後年の教皇としての穏やかな佇まいの背景に想像を絶するアルゼンチンの軍事政権時代の経験があり、そのことが教皇としての平和への精力的な活動の原動力であったことがよく伝わってくる。

映画『アルゼンチン 1985－歴史を変えた裁判』サンティアゴ・ミトレ監督（アルゼンチン）

ゴールデングローブ賞、外国語映画賞受賞作品。民事政権移行後のアルゼンチンで、軍事政権の首謀者を裁判にかける事実に基づいたリーガルサスペンス。この裁判に挑む検事が若者とチームを組み、アルゼンチン全土の拷問の生存者と行方不明者の家族の証言を地道に集めていく。裁判で首謀者の責任を追及し、終身刑に追い込もうとする検事の論告は見ごたえがある。重い内容の映画であるが、家族とのやりとりなどユーモラスな部分もある佳作。Amazonプライムで視聴可能。

○首藤典子（一文）

『村上海賊の娘』（上下）和田竜、新潮社

7～8年前に読み、いまなお店頭に並ぶ話題作、この度旅行でしまなみ海道を渡ろうと思い、いま一度読んでみようと思った。

急流の瀬に囲まれている海城を構えた能島村上の長の娘、景。男武将以上の働き、剣捌き、海に潜り仕掛けられた網を切り離したり、次から次へと機転を効かしたりして動き回る姿は手下達の憧れであり、また戦意を高める存在であった。ただ、なりふり構わない為、嫁ぎ先が決まらないのがたまにきず。

ある時、急流で動きがとれなくなった一向宗の信徒が乗り合わせた船を海賊働きで乗っ取った景は、信徒が載せていた兵糧を運ぶという名目で大阪本願寺に続く川の砦に兵糧と信徒を送り届ける。そして、辺りを縄張りとする真鍋海賊と遭遇し、「べっぴんさん」などと言われたことがない褒め言葉に気をよくし、真鍋の城に立ち寄る。これを機に大阪本願寺、信長が西に勢力を拡大することを押さえたい為本願寺に兵糧を届ける毛利方と、海の戦支度が整っていない織田信長に加勢する大阪泉州侍との戦に関わる。どの国と国が戦になるかを知り、無益な争いに関わらないようにする判断をいつ下すか、国の存亡は長

の手の中にある。今日の味方は明日の敵、一瞬の判断で戦の行方が入れ替わる。最終刊ではそんな戦闘の真っ只中に読者を誘いもはやそのシーンの中で私も息を飲んでいた。戦に明け暮れていた戦闘時代、瀬戸内海で一睡を風靡していた村上一族も徳川の世になると呆気なく滅ぼされてしまったことがある。

○山口伸一（理工）

『ナイルパーティの女子会』 柚月麻子、文春文庫

一流商社勤務の美貌の栄利子は、人間関係が苦手でデジタルな距離を好む。憧れのブロガーと親しくなると試みるも失敗し、職場の派遣社員からは思いもよらぬ脅迫を受けて追い詰められていく。高校生が選ぶ賞の受賞作とは思えぬほど、題名に似合わぬおどろおどろしい物語であった。

○露木肇子（法）

『神の棘 I II』 須賀しのぶ 新潮文庫

1936年から1950年までのドイツを舞台に、修道士マティアスと、ナチス親衛隊のアルベルトの人生を軸として、史実を基に狂気の時代を克明に描いた小説。ナチスの宗教弾圧・障害者差別・ユダヤ人迫害、連合軍の捕虜虐待、宗教の腐敗等ありとあらゆる悪が詰まっている。正義は常に逆転し、信頼は裏切られる。残酷なシーンが多く読み続けるのがつらいほどだが、最後にすべての謎が解き明かされ、大きな感動が待っている。

2010年の単行本を全面改訂した2015年の文庫本がおすすめ。

『革命前夜』 須賀しのぶ 文春文庫

1989年、ピアノを学ぶ眞山柊史は音楽の都ドレスデンに留学し、ハンガリー、北朝鮮、ベトナム等からの留学生と共にピアニストを目指す。時はベルリンの壁崩壊直前、学生達は息のつまる監視社会の中、シュタージに脅えながら、自由と音楽を求めて活動していく。友情、恋愛、裏切り等に遭いながら、眞山は自分の音を追求する。音楽の高まりと共に自由を求める声も高まっていく。そしてついに壁は崩壊し、歓喜があふれる。読んでいる間音楽が聞こえてくるような美しい小説。冷戦下の芸術という点で映画「善き人のためのソナタ」を彷彿とさせる。

○仁多玲子（商）

『十二の真珠』 やなせたかし、復刊ドットコム

今回の読書会で紹介する本は、今、NHKの朝ドラで話題になっている「あんぱん」というドラマの主人公のモデルになった「やなせたかし」が書いた『十二の真珠』という本。本というよりは絵本。本の印刷でも、「ふしぎな絵本」と書かれている。これは、やなせたかしの初期の作品集。また、元祖「アンパンマン」を収録した本でもあると、宣伝している。

さて、どういう本かと言えば、短い短編が12個集められている。

一番初めの短編、「バラの花とジョー」。これは、美しいバラの花と、雑種犬のジョーの愛の物語。最後は、ジョーがバラをカラスから守るために盲目になり、その後死んでしまうのだが、それに合わせてバラの花も、大気汚染で、枯れてしまう。涙を誘うお話だ。そういう短編が12集入っている。私は、こ

ういう本が好きだ。

これからも、皆さんと一味違う本を紹介していきたいと思う。

○前田由紀（一文）

『へいわとせんそう』たにかわしゅんたろう・著、Noritake・絵、ブロンズ新社

戦後 80 年の夏に戦争に関する本を数冊読んでみた。最初に紹介するのは、谷川俊太郎の絵本。シンプルに平和と戦争の対照的な場面が続くが、最後には、敵と味方で変わらない場面が 3 場面連続して出てくる。この「変わらない」ことで、平和を切望する筆者の深い思いがひしひしと伝わってきた。

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』加藤陽子、新潮社（新潮文庫）

では、日本はなぜ戦争を始めてしまったのか。日清戦争から振り返る。筆者は、中高生を対象に講義形式の序論で戦争の定義をジャン＝ジャック・ルソーの言葉を引用して「敵対する国家の、憲法に対する攻撃」と語る。それから日清戦争から太平洋戦争へと時系列に多岐にわたる資料をもとに辿っていく。講義では、その都度筆者が問い合わせを投げ掛けて、それに答える生徒たちの発言も興味深い。日清戦争から線として太平洋戦争につながっていき、いろいろな要因が重なって戦争へと突き進んでいく過程がわかり、どこかで立ち止まれる局面があったのではないかと思わされた。

『昭和 16 年夏の敗戦 新版』猪瀬直樹、中央公論新社（中公文庫）

5 年前に出版社の企画で勤務校の中高生と一緒に読んだ本である。偶然にも今年 NHK でドラマ化され、当時のことを思い出した。まず、開戦直前の総力戦研究所の史実であり臨場感あふれる描写に引き込まれた。日本史の教科書や資料集と突き合わせて、読み進めた生徒もいた。悪役とされた東条首相の葛藤にも注目が集まつた。数字や空気の怖さ、コロナの現状と重ね合わせ、危機的状況での冷静かつ客観的な思考、判断、行動の大切さを痛感させられた。5 年前の夏、生徒たちと一緒に戦争開戦の内実を知ることができ感慨深い本となった。

○宮田晶子（政経）

『考える練習』保坂和志、大和書房

作家の保坂和志氏が大和書房の担当編集者の質問に答えながら、「考える」ということは何か、について語っていく。

「思考法」の本はたくさん出回っていて、多くはビジネスマン向けのものが多いのだけれど、これはまったく趣が異なる。私たちは考えることによって、物事を理解し、何らかの解答や解決策を見つけようとする。しかし、保坂さんは、わからないものはわからないままでもっておく、理解しようとしている、そういう姿勢が考え続けるという行為であると言う。編集者のやり取りは、政治、経済、小説など、さまざまなテーマに及ぶが、保坂さんのそれぞれの答えがこれを実践している。

コスパやタイパ、あらゆることに効率を求めがちな風潮で、私自身もそれに染まってしまっているが、考えるということの本質を考えさせられた。かなり急いで読んでしまったのだが、考え続けながらもう一度読んでみたい。

福島からいつも参加されている斎藤さんからいただいた、読書会への感想です。

○斎藤悟（社学）

いつも参加させて頂き有難うございます。

毎日介護の事で精一杯で読書の時間ないなか、レベルが高く内容が深い話を聴かせて頂き、話にも参加させて頂き感謝して居ります。発表の後パネルディスカッションのような流れになるのはさらにいいですが、気になる話も聞き逃す事もあり、その後の纏めも有難いです。

とにかく企画がいいです。読んだ本の内容を説明する→自然にパネルディスカッション→後評→発表内容を纏めて公表。

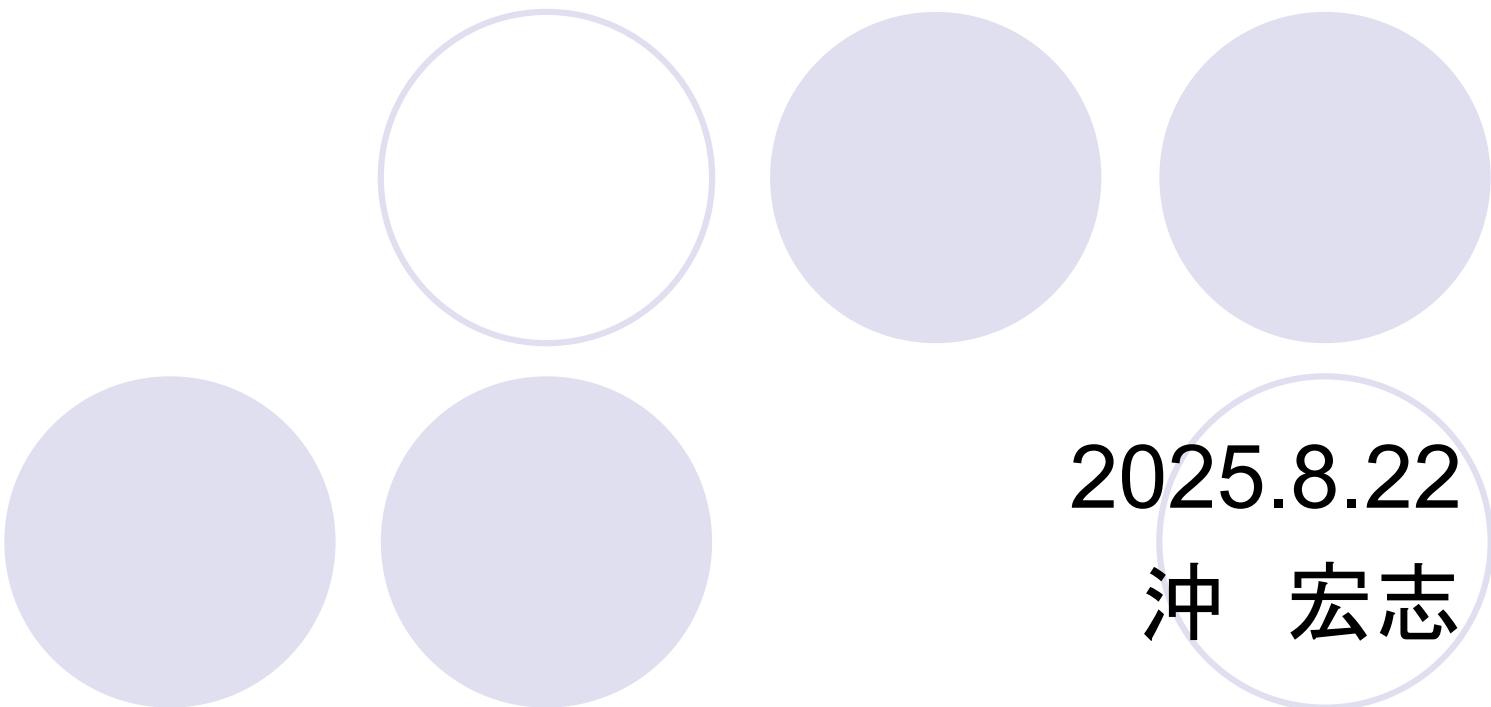
そして発表なしでも参加させて頂ける。

読書の時間が無い私には勉強になり、参加者と会い話も出来る。

皆様悩みもおありでしょうが、読書をしたり旅行に行ったり、羨ましく眺めています

* 次回は、前田由紀さん（一文）の司会で、11月28日（金）秋の54ら読書会を予定しています。

本紹介+ちょっとした言いたい事

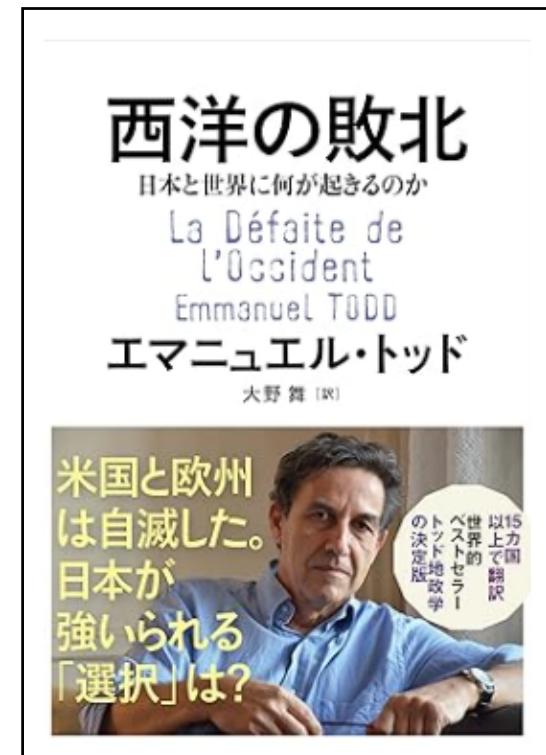


★第22回オンライン読書会

今回紹介する本

- エマニュエル・トッド「西洋の敗北」

人口動態から、ソ連の崩壊を予言したが。
ウクライナ戦争では、プーチンよりの意見でロシアの
勝利を予測。その背景に西洋の敗北があるとする。



- 意見は異なるが参考になる

エマニュエル・トッド

- 人口動態・家族形態からソ連の崩壊を予測

- ・乳幼児死亡率
- ・自殺率
- ・殺人率
- ・平均寿命
- ・汚職率

- ・外婚型共同体家族
- ・内婚型共同体家族
- ・非対称型共同体家族
- ・権威主義家族→直系家族
- ・平等主義家族
- ・絶対核家族

結構、おもしろい著作の数々

- ・「ドイツ帝国」が世界を破滅させる
- ・エマニュエル・トッドの冒険
- ・トッド自身を語る
- ・第三次世界大戦はもう始まっている
- ・2035年の世界地図
- ・トッド人類史入門
- ・老人支配国家日本の危機

- 結構、ユニークな分析

ウクライナ侵攻についての意見

- ・ロシアのプーチンはうまくやってきた。
- ・ウクライナは破綻国家である。
- ・そのウクライナをアメリカがたきつけた。
- ・プーチンの防衛は正当っぽい(死活問題)
- ・ロシアに取っては死活問題だからロシアが勝つ。
- ・アメリカをはじめとする西洋は、統合する力を失った。
(古代ローマ帝国のように)

● 責任（問題）はアメリカの側にある

アメリカ(西洋)についての意見

- ・プロテスタンティズムで統合された国。
- ・プロテstanティズムは西洋に経済力をもたらした重要な要素
- ・プロテstanティズムは識字化する
- ・プロテストントは選民の思想だから差別がある。
- ・差別こそが接着剤。
- ・黒人排除こそが、アメリカの自由民主主義を機能させていた

● しかし接着剤は失われた

今のアメリカの分析

2020年頃、アメリカの乳幼児死亡率は、新生児1000人あたり5.4人。対してロシアは4.4人、イギリスは3.6人、フランスは3.5人、ドイツは3.1人日本は1.8人だった。
しかも、2020年頃GDPに占める医療費の割合は、アメリカは18.8%，フランスは12.2%ドイツは12.8%，日本は8.0%だった。



アメリカでは死亡率が上昇したに止まらず、医療費が人々の破壊に使用されてきた。
e.x.:オビオイド・スキャンダル

- 国家ゼロのニヒリズム

今のアメリカの分析(その2)

アメリカのGDPには、効率性さらには有用性すら不確かな「対人サービス」が、その大半を占めている。医者、法外な高給取りの弁護士、略奪的な金融業者、刑務所の守衛、インテリジェンス関係者など。このような寄生集団の活動を取り除いた場合、RDP(国内実質生産)の順位は乳幼児死亡率の順位と一致する。



寄生的な支配階級によって破滅に突き進んでいった古代ローマ帝国と一緒に。

- アメリカにおける不正義の勝利

二つの西洋

広義の西洋:(権威主義的西洋も含む)
イギリス・アメリカ・フランス・イタリア・ドイツ・日本

狭義の西洋:自由主義的西洋のみ)
イギリス・アメリカ・フランス

広義の西洋がアメリカの霸権システムに対応する西洋
自由主義的西洋とともに権威主義的西洋がある

- ロシアを権威主義的西洋に入れ損ねた

&%

) (

&\$&) " " &

%\$

(*)

887,

B<?

B<?

+')

B<?

&&&(

3

*

https://www.library.city.hiroshima.jp/information/guide/images/index_dokushokai.pdf

URL)

<https://www.com-net2.city.hiroshima.jp/mitaki/file/48>

No

DX

1973

1980

No1

(614

<https://otepia.kochi.jp/library/holding04.html>

*

274

2

3

3

)

2

6I H9F

%' - %,) (*
&&% , \$

+\$

&\$%&
&\$%& %\$
\$(
&(C6 &\$% & (

B<?

&\$% *
*&

G=B79%, %
%, % &\$&

&\$*) *

E

% ?] bX Y
%
%*

(

I

(

HJ

HJ

I &

%\$%

\$

* 次回は、宮田晶子さん（政経）の司会で、8月22日（金）夏の54ら読書会を予定しています。

[目次に戻る](#)

第 20 回 冬 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会
2025. 2. 28

【参加者】

篠原泰司（一文）、鈴木伸治（商）、石河久美子（一文）、露木肇子（法）、首藤紀子（一文）、
山口伸一（理工）、仁多玲子（商）、前田由紀（一文）、斎藤悟（社学）、宮田晶子（政経）（以上 10 名、敬称略、順不同）

立春を過ぎて強力な寒波が襲来した 2 月でしたが、読書会当日は春を思わせる暖かな日でした。そんな夜に視聴のみの方を含め、10 人の方に参加いただき、今回もさまざまなジャンルの本を持ち寄って本への思いを語りあいました。

以下、皆様から寄せられた紹介文ですが、文体などは統一いたしました。

○篠原泰司（一文）

『昭和問答』 田中優子・松岡正剛、岩波新書

この「昭和問答」のあとがきが松岡正剛の絶筆になった。
あとがき 1 を田中優子が書いたあと、松岡正剛はあとがき 2 を書いた。そしてその原稿を脱稿したあとまもなく松岡は急逝したということだ。

昭和についてはいろいろと読んできた。それでもこの二人の挙げてくる視点や論点にはいままでにないものを感じた。とても面白く読んだ。

新書の帯に書かれた田中優子の松岡正剛に対する弔辞の言葉が印象的だ。「この本の刻まれた一つひとつの言葉の中に、私は次に行く光のかけらを、探し続けている。」

『青い壺』 有吉佐和子、文春文庫

「昭和問答」の中で田中優子が有吉佐和子をとても高く評価しているように感じたので読むことにした。まずは「青い壺」。

折しも NHK の「100 分で名著」で取り上げられたのがきっかけでベストセラーになってしまった。青い青磁の壺が幾人もの人物の所有を経ていく話なのだが、それぞれの人物にまつわる話がまさに昭和的な習俗や精神などの匂いを強く発散させていて、昭和を感じるならこの本しかないという感じの本だ。

『一の糸』 有吉佐和子、河出文庫

「昭和問答」の中で田中優子が一押しに推薦している有吉佐和子の小説。一人の文楽の天才的な三味線引きを支える女性の一代記である。古典芸能に対する深い造詣はさすがであるし、文体の堅牢さと構成力はさすがとしか言えない。それにストーリーのバランスをと

った展開の仕方には読者に安心感を与えてくれる。これが有吉佐和子がいまだに支持される理由の一つなのかも知れないと思った。

○鈴木伸治（商）

『半導体戦争—世界最重要テクノロジーをめぐる国家間の攻防』クリス・ミラー・千葉敏生（訳）、ダイヤモンド社

現在のデジタル世界を生み出してきた半導体産業のことが知りたくて良い本を探していたところ見つけたのがこの本。

本書は、アメリカ、ソ連、日本、東アジア（台湾・韓国）、中国などの歴史的文書の調査や、百人を超える科学者、技術者、CEO、政府官僚へのインタビューに基づき、軍事力のバランス、世界経済の構造、そして国際政治の形を決定づけ、私たちの暮らすデジタル世界を特徴づけてきたのが半導体であることを明らかにしている。

半導体の発展は、私が当初想定していた大企業や消費者（産業として）だけでなく、野心的な政府や戦争の要請によっても、というよりもより現代では後者の方によって形づくられてきていることが分かる。

その一例が、アメリカとの安全保障関係を強化するための戦略の一環として 1960 年代から意図的に半導体サプライ・チェーンの中に身を置き、世界で唯一シリコン上に 118 億個の微細なトランジスタを刻み込んだ iPhone12 の A14 プロセッサ・チップを製造することのできる台湾積体電路製造（TSMC）を育てた台湾である。

○石河久美子（一文）

『宙わたる教室』伊予原新、文芸春秋

定時制高校の科学部が、学会の高校生部門で入賞を続け JAXA の「はやぶさ」の開発にも貢献した実話に着想を得たフィクション。昨年秋 NHK ドラマ化され好評を博した。著者は、地球惑星科学の研究者から小説家に転じた経歴の持ち主。科学の知識を小説に取り入れた作風で今期の直木賞も受賞。

それぞれままならぬ人生を送り定時制にやってきた 10 代から 70 代までの生徒たちが、元研究者の教員と出会い、火星の重力下でクレーターを再現するという未知の研究に挑む。その過程で、自分たちの潜在能力に気づき、可能性を広げ自信を取り戻していく様子が生き生きと描かれる。研究の楽しさが伝わってくる清々しい小説。

○露木肇子（法）

『ハイジ神話』ジャン=ミシェル・ヴィスマール、晃洋書房

最近 B S でドキュメンタリー「スイスの象徴となった少女」を観て、「ハイジ」の変わらぬ人気と、作者シュピリ（1827～1907）がうつ病だったことを知り、「赤毛のアン」の作者モンゴメリと同じく、内なる情熱と社会的立場のギャップに苦しんでいたのではな

いかと考えた。その後見つけた本著によると、シュピリの父は病院経営者、母は宗教詩人、夫は政治家で忙しく、シュピリは幼少時より孤独で、創作に救いを求めるようだ。

本著読了後「ハイジ」のほぼ完訳版（結構長い）を読んでみたところ、自然描写や詩の美しさ、ハイジのキャラクターや愉快なエピソードに魅せられた。

なるほど絵本にも映画にも、アニメにもなるわけだ。

これらの魅力は「赤毛のアン」にもみられるもので、シュピリの約50年後に生まれたモンゴメリも、「ハイジ」を読んでいたことが窺える。

ジェンダーに苦しむかつての女性作家達が生み出した物語は、世紀を越えて女性をジェンダーから解き放つ。

○首藤典子（一文）

『花散る里の病棟』 布木蓬生、新潮文庫

四代続いた医者の家の物語。初代の野北保造は明治時代の終わり、九州帝国大学医科大学を卒業後公立病院副医院長につき、35歳で開業医となる。当時多かった回虫の治療で虫医者と呼ばれていたが、50歳の時胃潰瘍で死去。

その息子の野北宏一は、中学生の時に父が亡くなった為、苦学の末、九州医専に入学。短期現役軍医候補生に応募し、1943年にマニラの兵站病院で任務に就く。ジャングル内を逃げ惑いながら米軍の捕虜となる。手帳に克明に年月日と戦況を記載する。終戦直後、上官が高熱の為死去。遺品を手渡すように頼まれ、復員後、上官の妻の元を訪れる。尊敬していた上官のようになろうとその妻と翌年結婚する。戦地では栄養失調やマラリア等による病死が戦死者よりも多かったということに驚き、終戦直後、あと少しでの帰還を目前に果てた方達の無念を思うと心が痛む。

三代目は市立病院勤務の内科医だが、元従軍看護婦だった患者から終戦前後の朝鮮での話を診察の度に聞き、当時の様子に思いを巡らせていたが、終戦直後に厚生省引揚援護局直轄下で、引揚途中心ならずも妊娠させられた女性達の墮胎処置を隠密裡に行い郷里に帰したと聞き、その患者と共に水子の供養祭に行くことにする。

四代目は米国で腹腔鏡肥満減量手術を学んだ外科医だが、コロナパンデミックの中、習得したスキルを生かすことなく、逼迫した医療現場でコロナ感染患者の対応に明け暮れる様子が描かれ、ついこの間のことだが、改めて大変な時代だったと思い返してみる。

医師により描かれた作品に引き込まれるのは、命のやり取りの現場が実体験にしろ、聞いたことにしろ、切羽詰まった現場の様子が生々しく伝わってくるからであると思う。

医師を代々継がせ続ける家系の大変さを知る俳優の医家五代目の佐野史郎氏の説得力ある解説文も然り、著者の綿密な取材に感服する。

○山口伸一（理工）

『檜垣澤家の炎上』 永嶋恵美、新潮文庫

1964 生まれの永嶋恵美氏の初長編。横濱で回船業を営む檜垣澤家の主人が亡くなり、幼くして引き取られた妾の子が、歳の離れた親族や姪、使用人などの人間関係の中で権力を手に入れる物語。大正の回船問屋の商売や関東大震災の悲惨な状況が詳しく描かれ、犯人の動機も謎解きも十分に納得できる**2024**年を代表する佳作。

○仁多玲子（商）

『あしたはきっと大丈夫』高尾美穂、コスマック出版

今回の読書会で、私は、産婦人科医である高尾美穂さんが書かれた「あしたはきっと大丈夫」という本を紹介した。高尾美穂さんは、NHKの朝イチによく出演されて、ヨガを披露したりする産婦人科医です。とんがり頭で、名前は知らないても、見たことはある方は多いと思う。高尾先生が、女性、特に若いこれから女性に、これから生き方をアドバイスする本で、一つひとつ解説しているので、とても読みやすい。例えば、「なりたい自分をイメージしたら行動に移す」という項目で、自分はこうなると強く思い、そんな自分に近づいていくために具体的な行動や努力を積み重ねていくことで、理想を現実にしていくと語っている。若い女性だけでなく、今の年齢の私でも、あてはまるのではないかと思う。

○前田由紀（一文）

『旅人 ある物理学者の回想』湯川秀樹、KADOKAWA

「ただ、私は学者として生きている限り、見知らぬ土地の遍歴者であり、荒野の開拓者でありたいという希望は、昔も今も持っている。」この自伝は、有名になるまでの20代で終わる。悩める若き研究者の心の軌跡が描かれ、内向的な性格や父親との確執等親近感がある。戦後まもなく彼がなぜ日本人初のノーベル賞受賞したのか、その謎に迫ることができる。

『河合隼雄 物語とたましい』河合隼雄、平凡社

河合隼雄は、日本におけるユング心理学を代表する学者である。物語に注目し、日本神話では対立する神が適当なバランスをもって共存している中空構造と位置づけ、西洋の中心統合型と対比させている。イスラのユング分析家資格試験において、指導教官と筆者が対立するところが、特に興味深い。

「花嫁はどこへ？」監督キラン・ラオ、インド映画

二人の花嫁が満員電車で同じ赤いベールを被っていたことから取り間違えられ、離れ離れとなってしまう新婚夫婦のドタバタ喜劇。従順で健気な花嫁と自立を願うもう一人の花嫁が対照的に描かれる。インドの社会背景が良く理解でき、英米以外の映画をもっと観たいと思えた。

○宮田晶子（政経）

『日本語が滅びるということ』 水村美苗、筑摩書房

米国発のマネジメント誌の編集・出版という仕事に携わっている私からすると、カタカナという便利な文字があるがために、私たちの取り巻く言葉がどんどん英語に侵食されているように思われてならない。ここは日本語にしたい、と思っても、カタカナにしないと「界限」の方には「わかってない」と言われてしまう。明治維新の開国で「西洋の衝撃」を浴び、豊かな近代文学を生み出した日本語だが、インターネットの登場とグローバル化の進展のなかで、その未来が危うくなっている。2008年に刊行された本だが、人工知能の急速な発達もあり、本書で提起された問題がますます差し迫っているように思われた。

* 次回は、前田由紀さん（一文）の司会で、2025年5月23日（金）第21回冬の54ら読書会を予定しています。

[目次へ戻る](#)

第 19 回 秋 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会
2024. 11. 22

【参加者】

篠原泰司（一文）、福島碧（社学）、沖宏志（理工）、露木肇子（法）、加藤透（理工）、

石河久美子（一文）、鈴木伸治（商）、首藤典子（一文）、山口伸一（理工）、斎藤悟（社学）、宮田晶子（政経）、前田由紀（一文）（以上 12 名、敬称略、発表順）

二十四節気によると、この季節は「小雪」。「冷ゆるが故に雨も雪と也てくだるが故也」の意とか。わずかながら雪が降り始める季節となった。今回も多様なラインナップとなつた。読書会を始めて丸 5 年。あつという間であり、毎回の新鮮さは、変わらない。（文体は常体に統一）

○篠原泰司（一文）

『板上に咲く MUNAKATA : Beyond Van Gogh』 原田マハ、幻冬舎

原田マハによる今年（2024 年）3 月に出版された小説。伝記ではなく小説なのだが、ほとんどすべてが事実どおりに書かれているようだ。私の好きな画家（版画家）なので、柳宗

悦や大原孫三郎などの名前が出てきたり棟方志功の母の話がでてきたりする部分などで、画家の全体像が把握できたのはとてもよかったです。大変感動的に読めた本だ。

『アマテラスの正体』 関裕二、新潮新書

突飛な空想や道具立てを持ち込んだ歴史本ではなく、日本書紀や万葉集などを丹念に読み込んだ上での「アマテラス」についての仮説が書かれている。「アマテラス」のことだけではなく「卑弥呼」の存在までに話が及ぶ。この辺りの日本歴史に興味がある方にはぜひ一読をしてほしい一冊である。

『遊郭と日本人』 田中優子、講談社現代新書

江戸時代の遊郭という存在を歴史的、文化史的に掘り下げた本。著者の見識にとても感動させられた。江戸時代の遊郭は日本文化をその一角に凝縮したワンダーランドだったのだ。来年の大河ドラマの主人公は江戸の遊郭である吉原の出身であり、吉原で活躍した人物である。2025 年 大河ドラマ「べらぼう～薦重栄華乃夢嘶～」の始まる前に読んでおいてはいかが？

○福島碧（社学）

『板上に咲く MUNAKATA : Beyond Van Gogh』 原田マハ、幻冬舎

今年の4月に、弘前城の花見に家族と行き、何か青森にちなんだ本を読もうと思い、この本を手にとりました。この本は、ゴッホの「ひまわり」に憧れて芸術の世界に入った棟方志功と、棟方を世に出した奥様の話。青森からの帰りの新幹線で、泣けました。

青森からは、今も世界中でファンの多い太宰治も出ていて、それは何故?・・青森には、本当に何もなくて、それこそ、何もないからこそ、彼らのように生まれるものがあるので?と思いました。

『功名が辻』(一) ~ (四) 司馬遼太郎、文藝春秋

わずか6万石の掛川城主だった山内一豊を、土佐24万石の大名にした、妻の話。女の生き方として、大いに参考になります(自分では、出来ないけど)。

この9月、掛川城へ行き、その豊かでおだやかな土地に癒されました。山内伊右衛門(山内一豊は、小さい頃から伊右衛門と呼ばれていた)のその誠実な人柄や、また、敵を作らない生き方に、惹かれました。ところで、お茶の「伊右衛門」というペットボトルの名前は、この山内一豊にあやかって付けたのかも?と思ったりしました。

『峠』(上)(中)(下) 司馬遼太郎、新潮社

人間の生き方についての本、と思いました。越後(長岡藩)の河井継之助の話。

河井継之助は、30才過ぎまで、世の中の真理を求め、何もしないでいた人。人間には、何もしないで考える時間が必要、と思いました。今の世の中では、不可能だけれど。また、越後の友人は、とても開明的で、何故か?と思っていましたが、この本を読んで、少し納得しました。

○沖宏志(理工)

『町内会』玉野和志、ちくま新書

富士通社友会の理事は断った。中国語コミュニティの理事も断った。しかし、広島のような地方都市では、なかなか町内会の理事を断るというわけにはいかず、町内会にかかわることになり、読んでみた本。町内会のメイン機能は共同防衛機能との事。町内会はいわば公共財のようなもので、あると助かるし、いざというときありがたいが日頃からそれを積極的にささえようとは誰も思わない。それは誰かがやってくれれば助かるが、できれば参加したくないもの。

○露木肇子(法)

『家族終了』酒井順子、集英社文庫

著者は2004年『負け犬の遠吠え』で注目を浴びた、我々より10年ほど年下のエッセイストである。小中高の後輩ということで、時折読んではいたが、ミッション系女子校

という温室で育ちながら、なぜ世間の矛盾を敏感にとらえ、辛口で、しかもユーモアたっぷりに切り込んでいく力を身につけたのかを長年不思議に思っていた。

その謎が本著によって明らかになった。著者は両親と兄を亡くし、家族が終了したことに伴い、家族の秘密を暴露し、その上であらゆる家族または家族的な関係について思いを巡らしている。

学問や理論にとらわれない自由でおおらかな発想が魅力だ。選択的夫婦別姓についても筆者は次のように述べている。「苗字は一緒でも家庭内では別居という夫婦と、苗字はバラバラだけれど仲の良いという事実婚カップルを比べると、前者の方がより国益にかなう、という判断を国はしているのでしょうか。」共感できることが多い、楽しく読むことができた。

○加藤透（理工）

『大地』パール・バッカ、河出書房 1967 （世界文学全集第34巻）

中国を舞台に、アヘン戦争の頃からスタートする家族3代にわたる大河小説。肥沃でない土地の貧農が主人公で、奴隸女を娶って、物語が始まる。死にもの狂いに働き、アヘンに耽溺する族長から土地を買い取り、しかし子供の世代から親の土地を売却する崩壊過程が始まり、結局無に帰していく。

○石河久美子（一文）

『堤未香のショック・ドクトリン－政府のやりたい放題から身を守る方法』堤未香、幻冬舎

ショック・ドクトリンとは、テロや災害などショッキングな事件が起きて国民が思考停止

している間に政府や巨大資本が過激な政策を推し進める手法。本書では、マイナンバーカード、コロナ、脱炭素が例として取り上げられている。

マイナンバーカードに関しては、一つに個人情報を集約する危険性を警鐘するとともに、諸外国のマイナンバー状況についても整理して情報提供している。それによると、名だたる諸外国で日本のような制度を取り入れている国はない。個人情報の取り扱いについて、各国との温度差を感じた。まもなく保険証が廃止になるので、今後を見据えるうえでも参考になる書。

○鈴木伸治（商）

『人類とイノベーション－世界は「自由」と「失敗」で進化する』マッド・リドレー 著 大田直子訳、NewsPicks パブリッシング（2021年3月3日）

著者は、事実と論理に基づいてポジティブな未来を構想する「合理的楽観主義」の提唱者として世界的に著名で、ビル・ゲイツやマーク・ザッカーバーグらの世界観に影響を与

えたビジョナリーとして知られる。本書は、米英でベストセラーを記録している。

イノベーションとは、元々は「技術革新」という意味で使われていたが、現在ではモノ、仕組み、サービス、組織、ビジネスモデルなどあらゆる領域において、従来の常識を覆し、今までにない革新的な考え方やアイデアによって、社会に大きな刷新、変革や新しい価値を生み出すことを意味している。そのため、先進的な企業や先進国で頻繁に使われ目標とされているが、それがどうして起こるのかについての体系的な概念は確立されていない。

本書は、その謎に具体的な事例をもとに、自分の（または他人の）発明を有益なイノベーションに変えたイノベーターたちの成功例や失敗例など、それが起きた経緯から探究している。事例は、蒸気機関や検索エンジン、ワクチンや電子タバコ、輸送用コンテナやシリコンチップ、キャスター付きスーツケースや遺伝子編集、数字やトイレなどである。

『草の花』福永武彦著、新潮社（福永武彦全集 第二巻 小説2）

研ぎ澄まされた理知ゆえに、青春の途上でめぐりあった藤木忍（同性）との純粋な愛に破れ、藤木の妹千枝子との恋にも挫折した汐見茂思。彼は、そのはかなく崩れ易い青春の墓標を、二冊のノートに記したまま、純白の雪が地上をおおった冬の日に、自殺行為にも似た手術を受けて、帰らぬ人となった。まだ熟れきらぬ孤独な魂の愛と死を、透明な時間の中に昇華させた、青春の鎮魂歌。福永の作品の中で最も読者、それも年若い読者に愛されたもの。

○首藤典子（一文）

『菜食主義者』ハン・ガン著、きむ ふな訳、クオン

ノーベル文学賞受賞作品。最初の章では、語り手が普通のサラリーマンで、特に目立つところもなく、平凡な女性と結婚し平穀に暮らしていたが、ある時妻がおかしな行動をとるようになり、肉を全く食べなくなる。そして夫用に買いためしていた肉をすべて捨ててしまい、食卓に肉料理が出なくなる。困った夫が妻の両親、姉に相談したこと、妻の父親が無理やり肉を食べさせようとした直後手首を切ってしまい、精神を病んでいるということで入院することになる。

章が変わると語り手が妻の姉の夫、妻の姉と代わっていき、それぞれの視点で語られるようになる。病状が進行していくにつれ、悩む周囲の人間を巻き込みながら、また女性により引き起こされる事象で周りの者たちの生活事態が思わぬ方向に変化していく様が克明に描かれ、家族、親族関係が崩壊していく。よくあるベジタリアンであると気軽に考えるなかれ、と警告を発しているようにも思われる作品。

『滅びの前のシャングリ・ラ』凪良ゆう、中央公論新社

前に取り上げた「菜食主義者」と前後して読んだ際、作品の構成が似ているので取り上げた。最初の章で登場した人達が、章が変わる度に語り手となって別の側面から登場する。

作品の内容自体は、若者主体で軽快に展開していく作品。

『流浪の月』 凪良ゆう、東京創元社

女児誘拐事件として報道された当時小学4年生の少女と、捕らえられて医療少年院に送られた、当時19歳の大学生の話。15年後に再会し、当時は説明することが出来なかつた少女時代の報道が誤っている、「事実と真実は違う」、誘拐ではなく少女自身がついて行きたかっただのだと悟る。大人になった彼女がそのように述べても、第三者は、特殊な状況下で長い時間を共に過ごすうちに、犯人に対して被害者が好意を持つストックホルム症候群であると指摘する。この話では、他人が何を言おうがずっと一緒にいたい、——そのような気持ちになるまでは他の男性と交際したり、また犯人とされた男性も他の女性と交際したり、それぞれの経験をした上でやはりこの人が一番とお互いに思っているが——周りが二人の関係性に気付き始めると「今度は何処に行こうか」とその場から離れ流れていくということを繰り返していくというエンディング。

「誘拐事件」として報道されたが為に本人達の気持ちとは裏腹のストーリーが展開しそれが事実として認められてしまい、女性が望まないことは何もしない人なのに社会的制裁まで受けてしまう男性。しかし、二人で自分達なりの幸せを求めていくことをあきらめではないことが救いであろうか。

○山口伸一（理工）

『鬼の筆』 春日太一、文藝春秋

脚本家、橋本忍は黒澤明の「羅生門」でデビューし、「生きる」、「七人の侍」、「八甲田山」、「八つ墓村」などのヒット作を手がける。ヒット映画の請負人で、「砂の器」では原作にはない日本縦断の旅を挿入、また、邦画では初の単館上映を実現し、大成功を収める。さらにプロダクションを作り、才能ある監督やスターを集め大作を制作し、映画の斜陽時代を支えた。しかし、晩年の「幻の湖」で失敗する。映画ファンでなくとも興味深い一冊。

○斎藤悟（社会学）

今回は思いも掛けなかつた町内会や故郷談義が楽しかつたです。町内会の存在や機能は地域に依つて異なると思いますし、何処を故郷と思っているのか、故郷とは何処を云うのかに付いて皆様にお聞かせ頂ければと思って居ります。長く考えさせられているとても興味のある問題です。ジェンダーの話も同様です。宜しくお願ひ致します。

○宮田晶子（政経）

『大阪』 岸政彦・柴崎友香、河出文庫

故郷を出て大阪に住み着いた社会学者の岸さんと、大阪を出て現在は東京に住む作家の柴崎さんのリレーエッセイ。生活史研究の岸さんに興味を惹かれて手に取つた本だつたが、

柴崎さんパートのほうが面白かった。大阪にいた頃は、家族との葛藤とか、友人関係の悩みとかいっぱいあったようなのに、それでも生まれ育った大阪という街に対する愛情が感じられた。私にはそのような感情を抱ける街がなく、そのことがとても羨ましく思われた。

○前田由紀（一文）

『異邦人』カミュ、新潮文庫

勤務校の高校生が企画した『異邦人』読書会に参加した。なぜ書き出しが「母さん」ではなく「マン」なのか、なぜ母親の死に冷淡な態度をとったのか、なぜ撃ったのか、タイトルは、なぜ異邦人なのか、なぜこんな判決になったのか、司祭をなぜ追い出したのかいろいろな疑問について話し合い、フランスの歴史も振り返った。予想をはるかに超えた充実した読書会となった。

『日本辺境論』内田樹、新潮新書

日本人論にかねてから興味があり、2009年に出版された本書も当時お気に入りの新書となった。今回、生徒に紹介するために再読し、新たな魅力を発見した。常にどこかに「世界の中心」を必要とする辺境の民であり、きょろきょろしてしまう日本人の情けない習性を思い知らされるが、そのことに気づき、そこを強みとすることもできるのではないか。既存の日本人論を総括して読者に明示する「お掃除本」であるという表現も見事だ。

映画「PERFECT DAYS」ヴィム・ヴェンダース監督（ドイツ）

役所広司が演じる一人暮らしの渋谷の公衆トイレ清掃員。ルーティンの日常が丁寧に描かれる。職人気質で、人知れず隅々まで磨き上げる。車中で聴く好きなCD。行きつけの飲み屋、銭湯、古本屋 100 円均一文庫の読書。最低限の質素な生活だからこそその豊かさがある。自由と寂寥が入り混じるが、「こもれび」という日本語を英語で紹介しているのは日本にしかない表現なのだろう。出てくるトイレがオシャレだったのも印象的だ。

* 次回は、宮田晶子さん（政経）の司会で、2025年2月28日（金）第20回冬の54 ら読書会を予定しています。

第18回夏のオンライン54ら読書会
8.23

2024.

【参加者】

篠原泰司（一文）、加藤透（理工）、山口伸一（理工）、福島碧（社学）、沖宏志（理工）、石河久美子（一文）、首藤典子（一文）、仁多玲子（商）、日比野悦久（理工）斎藤悟（社学）、宮田晶子（政経）

（以上11名、敬称略）

猛暑続きだった2024年の夏。当日の最高気温はそこまでではなかったものの、湿った空気に覆われ、蒸し暑い1日だった。しかしその鬱陶しさを吹き飛ばすかのように、いろいろなジャンルの本が紹介され、今回も楽しい時間を過ごすことができた。今回、文庫化されて異例のヒットとなっているガルシア・マルケスの『百年の孤独』を取り上げた方が複数いて、その壮大な物語を熱く語っていたのが印象的だった。（発表順、文体は常体に統一）。

○篠原泰司（一文）

『暁の宇品』堀川恵子、講談社 2021年

（『暁の宇品』堀川恵子、講談社文庫 2024年）

太平洋戦争において呉が海軍の乗船基地であったことは知っていたが、広島市の宇品に陸軍の乗船基地があったことは、この本を読むまで知らなかつた。宇品の存在が広島への原爆投下に至る最大の要因であるらしいのだが、しかし、その宇品の存在そのものが忘却の彼方に消え去りそうになっていたらしい。「本書は宇品に生きた三人の軍人が残した未公開資料などを発掘、分析し知られざる宇品五十余年の変遷をよみがえらせる」（文庫P11）ものである。太平洋戦争戦史という側面のみならず、戦後の日本のあり方にまで深い洞察の光を与えてくれる一冊だ。2021年に出版された本書は大佛次郎賞を獲得し、2024年の今年7月に文庫本になった。12月にはNHKのスペシャル番組も企画されている。

『決定版カフカ短編集』フランツ・カフカ／頭木弘樹編、新潮文庫

カフカの小説は私の高校生の時の愛読書だった。その小説のほとんどは読んでいた。その中でも短編小説は特に好きだった。しかし、それ以後今に至るまで読むこともなく遠ざかっていた。意図的に遠ざけていたわけではなくいつか再読してみたいと思っているうちに長い年月が過ぎてしまったのだ。それが没後100年の企画として新潮社から刊行された短編集を目にして再び読み始めるきっかけをつかんだような気になって、50年ぶりに読んでみた。読んでみて気が付いたことはその凄さだ。特に「流刑地にて」はこんな小説だったっけ？「断食芸人」にはこんなに凄みがあったっけ？という風に。とにかく驚いた。50年前、私は何を読んでいたのだろう。本当にカフカの短編には面白いものが沢山ある。

『百年の孤独』 ガブリエル・ガルシア・マルケス／鼓直 訳、新潮文庫

「百年の孤独」は10年前ぐらいに単行本（ハードカバー）で読んだのだが、今年の6月に文庫になったのを機に読み直した。初めて読んだ時よりも面白く引き込まれてしまったのは何故なのか？物語のスケールの大きさとその幻想性を称してマジックリアリズムと言うらしいが、そんな月並みな表現では表せないほど凄まじい小説だと思う。今まで4000円ぐらいの値段の本で手を出しにくかったのが、文庫になって1250円。よくぞやつてくれた。

○加藤 透（政経）

『百年の孤独』 ガブリエル・ガルシア・マルケス／鼓直 訳、新潮文庫

突如出版された百年の孤独。社会現象に近い売上げを継続している。是非お読みいただきたい。テーマはラテアメリカの一つの集落の変遷であり、小さな個人とマクロな歴史が往還して進んでいく。膨大なエピソードを内包しながら。しかし自然主義的な叙述ではなく、幻想と現実が混淆する、マジックリアリズムで描かれている。

○山口伸一（理工）

『オパールの炎』 桐野夏生、中央公論社

1967年、中絶とピル解禁を訴えた中ピ連創設の榎美沙子を描いた作品。彼女の過激な活動は面白かったが、標的となった男性や家族は悲惨であった。その後、選挙で落選してからは世間の耳目から遠ざかっていたが、その理由を桐野流の味つけて読ませる。

ピルは女性の社会進出の一助となったと言われている。榎の主張は早すぎたのかもしれない。

○福島 碧（社学）

『関ヶ原』（上中下） 司馬遼太郎、新潮文庫

家康のサクセスストーリーの検証が面白い。「人に働いてもらう」家康と「人に働いてもらえない」三成の比較。その原因を突き詰めていくと、その育った場所が農村部か商人の世界かも、少なからず関係しているのかもしれないと思ったりした。

40代で読んだ「項羽と劉邦」（司馬遼太郎著）以来の痛快小説だった。

『家康』（1～8巻） 阿部龍太郎、幻冬舎時代小説文庫

かつての部下であり、その後、秀吉方へ寝返った石川数正との再会の場面には、泣けてくる。

それにしても、家康の部下への報奨の額の大きさにはびっくり！ 著者は、常に報奨の金貨を現在の円に換算して記しているので、「そんなにあげるんだ！」と驚いた。

1955年生まれの阿部氏の今後の著作が楽しみだ。

○沖 宏志（理工）

『あの頃ぼくらはアホでした』 東野圭吾、集英社

ベストセラー作家東野圭吾の自叙伝的本。

同世代なので様々なアジェンダを共有できて、実におもしろい。

ゴジラ・ウルトラ Q・ウルトラマンといった怪獣物の話。

「燃えよドラゴン」や「ビートルズ」など、はまったものの話など。

しかし、私よりかなりワイルドな中学・高校時代を過ごしたようだ。

大学でのグループ実験の話もワイルドだった。

○石河久美子（一文）

『どうしても頑張れない人たち』 宮口幸治、新潮社

昨年の読書会で報告した「ケーキの切れない非行少年たち」の続編。著者は児童精神科医。

境界知能や軽度の知的障害がありながら見落とされ、はたから見ると怠けているように見える頑張れない人たちはどういう人たちか、どう支援したらいいかをわかりやすく説く。

頑張れない人たちは認知機能が低く見通しが弱いため目標が立てられないことが多い。

支援する上では、頑張れない行動の背景を考え、寄り添い、必要に応じてチャレンジできる機会を提供することが求められる。

著者も指摘しているように日本社会は、「頑張っている人を応援する」頑張ることが美德とされる社会、その在り方についても考えさせられた。

○首藤典子（法）

『ヒルビリー エレジー』 J. D. ヴァンス、光文社未来ライブラリー

トランプ氏が次期米副大統領候補として紹介したヴァンス氏がベストセラー作家ということだったので、アメリカではどのような本が人気なのか興味が湧いた。ヒルビリーとは元はアイルランドからアパラチア山脈周辺のケンタッキー・ウェストバージニア州に住み着いた移民であり、かつて製鉄業が盛んであった頃、ヴァンス氏の祖父が製鉄所に職を得たのをきっかけにオハイオ州に一家で移住する。このような人たちは中流の生活を会社が保証し社会福祉の充実した暮らしをしていたが、製鉄業の衰退と共に、人々の生活も廃れていく。この Rust Belt(錆びた地域) から抜け出てエール大学法科卒業後弁護士となった氏が議員事務所で働いた後議員になっていく。自身の生い立ちを忠実に描いたという作品、アメリカの繁栄から取り残された白人達が仕事もなく生活保護を受け、ドラッグ、アルコール漬けになる悪循環から脱け出せない、希望が持てないことへの怒りをツイッターに上げたことで、トランプ氏が着目、「アメリカを再び偉大にしよう」と呼び掛け支持層の基盤が造られた。成熟した資本主義、民主主義のもたらした光と影。大統領選の行方が気にな

るところである。

○仁多玲子（商）

『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 枕草子』清少納言／角川書店編、
KADOKAWA（角川ソフィア文庫）

現在、NHKで、紫式部のドラマ「光る君へ」をゴールデンタイムで放送している。

今まで、平安時代のドラマは、あまりなかったので、毎週楽しみに見ている。ところで、紫式部は「源氏物語」だが、ライバルの清少納言は「枕草子」。私は、今まで、「枕草子」を読んだことがなかったので、一度読んでみたくなった。ネットで探して、一番手頃な本を探したのが、今回紹介した本。

この本は、現代語訳・原文・解説が短編ごとに付いていて、初心者向け。値段も手頃で、手に取りやすい本ということで、今回紹介した。

○日比野悦久（理工）

読書会での皆さまから紹介される内容は興味深いし、それらの内容から皆さまが常日頃思索されているお話を伺うことができ、それだけで改めて視野を広げる貴重な機会を頂けてます。

○斎藤悟（社学）

本を読む時間ない状況でレベルの高い異次元空間に浸り、我に帰る貴重な時間になって居ります。皆様有難う御座居ます。

○宮田晶子（政経）

『基本季語 500 選』山本健吉、講談社学術文庫

俳句を細々と続けている私には、歳時記は必需品。しかし、歳時記における季語の説明は通り一遍で、それと例句が並んでいるだけ。季語の深い意味を知ってこそその俳句作りと思うので、物足りないところがあった。本書は、文芸評論家の山本健吉氏が 500 の季語を選んで、その古典をめぐる圧倒的な知識から解説し、例句を挙げている。500 というのは膨大な季語の数からすれば少ないかもしれない。しかし取り上げられている季語については、本当に深い知識を得られる。

* 次回は、前田由紀さん（一文）の司会で、11月22日（金）秋の 54 ら読書会を予定しております。

第17回春のオンライン54ら読書会
5.24

2024.

【参加者】

篠原泰司（一文）、宮田晶子（政経）、石河久美子（一文）、鈴木伸治（商）、首藤典子（一文）、沖宏志（理工）、露木肇子（法）、加藤透（理工）、斎藤悟（社学）、前田由紀（一文）（以上10名、敬称略）

二十四節気によると、この季節は「小満」。「草木が繁って天地に満ち始める」意とか。すがすがしい季節となった。しかし、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ侵攻が重なり、即時停戦が切に望まれる状況にある。戦没者を悼む「ゴジラ-1.0」、クラッシック・オペラ音楽、愛子さまブーム、米大統領選、新NISA、経済小説巨匠の自叙伝、失われた30年日本経済の低迷、「虎に翼」憲法24条秘話、7、80年代人気作品の再読、ヨーロッパにおける難民状況、「光る君へ」平安文学と今回も参加者の関心事がいろんな方角を向いていて、実に壮観であった。参加者からの紹介文を掲載する。（発表順、文体は常体に統一）

○篠原泰司（一文）

「デューン 砂の惑星 PART II」2024年3月劇場公開

待ちに待ったドゥニ・ヴィルヌーブ監督の手によるデューン砂の惑星の2作目。デヴィッド・リンチ監督の映像よりも心理劇や政治劇の方にバイアスがかかった印象がある。その分主人公たちの超人（超能力者）ぶりはかなり抑えられていて、特にアリア（主人公ポール・アトレイデスの妹）がはっきりと登場させられていなかつたのは残念だった。昔からの砂の惑星ファンとしては物足りなさが残る。しかし、このことは次回への伏線としては何か強烈な意味をもっているのかもしれない。次作PART IIIに期待。

「ソウルメイト」 2024年2月劇場公開

韓国の女優チョン・ソニをドラマ「ボーイフレンド」から注目していて、今回イ・ダミ（梨泰院クラスで有名）との共演ということで期待して見に行ったが、期待に違わず予想以上に良い映画だった。2021年の香港映画「ソウルメイト／七月（チーウエ）と安生（アンシェン）」のリメイクだが、小説家から画家へと設定が変更されており、また物語の舞台の中心になった濟州島の映像の美しさも特筆もの。鉛筆による極細密な巨大肖像画と濟州島の四季の映像に注目。

「ゴジラ-1.0」 2023年11月劇場公開

観てわかったことだが、この映画は1954年のゴジラ第一作目の正統なリメイク作品だ。

だから、ここに登場するゴジラは太平洋戦争で海に消えた戦死者の魂の集合体ということになる。主人公の名前を敷島にしたことは大和（日本）にかかる枕詞からであるはずであり、映画の最後の方で海中に没するゴジラに向かって総員で敬礼するシーンはゴジラ＝戦死者の主題を示していると考えるのは誤りではないはずだと思った。

『〈死〉からはじまるクラシック音楽入門』樫辺勘、日本実業出版社

書店で手にした瞬間「これは買いた」と思った本。「死」という角度から見たクラシック音楽が今まで知りえなかった情報につながっていく快楽。音楽史の本としても「死」の音楽のガイドブックとしても、たぶん生涯役に立つだろう。

○宮田晶子（政経）

『赤と青のガウン』彬子女王、PHP文庫

愛子さまが留学・進学せずに就職されたのは話題になったが、皇族の皆様の留学って単な

る箇付け？と思ったところで、この三笠宮家の彬子女王のオックスフォード留学記が目に留まった。女性皇族として初の博士号を取得された方だが、まずオックスフォードの大学院に入学許可を得るのも大変だし、研究でも色々な苦難があったようだ。滞在中、プリンセスとしてではなく、一大学院生として様々なことに取り組まれているのがとても好感が持てた。時系列ではなく、色々なエピソードごとの章立てになっているが、それぞれちゃんとオチもついていたりして面白い。またそれぞれの章のタイトルがマッチした四字熟語となっているのも洒落っ気が感じられた。

【まだ読んでないけど、興味を持っている本】

『人新世の「資本論」』斎藤幸平、集英社新書

21年の新書大賞を取り、話題の書であることは知っていたが、手に取る機会がなかった。注目したのは、Harvard Business Review のテーマ書評でその英訳書 Slow Down が取り上げていたこと。この欄で日本人著者の本が紹介されることはなかったので、ブームには乗り遅れたが、読んでみようと思う。

【まだ観てないけど、興味を持っている映画】

「関心領域」ジョナサン・グレイザー監督・脚本

ちょうど5月4日読書会の当日に封切られた映画。ホロコーストが行われていたアウシュビツ強制収容所の「隣」で平和に幸せに暮らす収容所所長一家の話。収容所の映像は一切

出てこないとのことだが、音や建物から上がる煙や気配からその存在は伝わってくるらしい。暇がなくて6月1日現在、まだ映画館に足を運んでいないが、評判は良いみたい。

○石河久美子（一文）

『壁の向こうの住人たちーアメリカの右派を覆う怒りと嘆き』*Strangers in their own land*

A. R. ホックシールド、岩波書店

トランプを支持する人たちはどういう人たちなのか。著者は、アメリカでも有数のリベラルで知的な地域バークレイのカリフォルニア大学の社会学者。真逆ともいえる共和党の牙城の南部ルイジアナ州で聞き取り調査を行う。明らかになってきたのは、古き良きアメリカの規範を重んじて、眞面目に生きてきたのにアメリカンドリームに到達できなかった白人中間層の実態。黒人、移民、LGBTなどマイノリティの人たちには優遇措置があるのに、自分たちは顧みられてないという不満を抱えている。そういう人たちの心情にぴったり寄り添ったトランプを、著者は「感情に訴える候補者」と表現している。11月の大統領選を注視する上でも参考になる書。

○鈴木伸治（商）

『2030年：すべてが「加速」する世界に備えよ』ピーター・ディアマンディス、ステーブン・コトラー共著、土方奈美訳、NewsPicks パブリッシング（2020年12月24日）

著者のピーター・ディアマンディスは、Xプライズ財団CEO。シンギュラリティ大学創設者、ベンチャーキャピタリスト。連續起業家としては寿命延長、宇宙、ベンチャーキャピタルおよびテクノロジー分野で22のスタートアップを設立。現在の主要なテクノロジーとして、量子コンピューティング、人工知能（AI）、ネットワーク、センサー、ロボティクス（ロボット工学）、仮想現実、拡張現実、3Dプリンティング、ブロックチェーン、「材料科学」とナノテクノロジー、バイオテクノロジーを紹介。それらのテクノロジーの「コンバージェンス」（融合）によりこの先10年で変化する、交通、小売、広告、エンターテイメント、教育、医療、長寿、保険・金融・不動産、食料、環境、統治、宇宙などの変貌を予測。

『LP300選』吉田秀和、新潮文庫（1981年2月絶版）

『名曲三〇〇選』吉田秀和、ちくま文庫（吉田秀和コレクション）（2009年2月）

著者は、クラシック音楽の豊富な体験・知識をもとに、音楽の持つ魅力や深い洞察を、すぐれた感覚的な言葉で表現し、日本の音楽評論において先導的役割を果たす。グレゴリオ聖歌やルネサンスの音楽から、ブルーーズやシュトックハウゼンらの現代音楽まで、音楽史の流れを解説しながら名曲300曲を選び、ベスト・レコード（ちくま文庫では未掲載）を紹介。

○首藤典子（一文）

『めぐみ園の夏』『破天荒』高杉良、新潮文庫

80冊もの経済・企業小説を書き上げた作家が書いたとは思えない、意表を突く穏やかなタイトルに引かれ手に取ってみた。

『めぐみ園の夏』では、作者が、両親が生きているにも関わらず、その不仲により、戦争

孤児となった者達と図らずも同じ施設で暮らすことになったという経緯から始まっている。施設内でのいじめや暴力、園長の理不尽な扱いにもめげず、それらに果敢に立ち向かってい

く少年時代の作者が描かれている。また、通っていた学校で飛び抜けて優秀な成績であった

が、総代への選出は担任他級友達からも認められているのに、施設に居たことを理由に学校

側から推薦を受けられなかったという、不当な扱いを受ける。しかし、そんなことをものと

もしない人生を送っていくことになる、施設を出た後の続編『破天荒』へと繋がっていく。その生き様がとても小気味良い。

『破天荒』は、児童養護施設を出た作者が、新聞記者として取材を重ね、経済界の著名人

とどのように関わりあい、付き合ってきたかの様子、日本が高度成長の波に乗っていたこともあり、華やいだ時代を思うがままに生き、自分の持つて生まれたものを使いきり、「筆一本で活躍する」というかねてからの願いを実現させたことに羨ましささえ感じる。

○沖宏志（理工）

『ザイム真理教』森永卓郎（フォレスト出版）

『日本経済は復活できるのか』野口悠紀雄（SBクリエイティブ）

失われた30年の原因について対称的な意見の2冊。

森永卓郎は、「消費税」という重税で需要をシュリンクさせた需要側の問題とし、野口悠紀雄は、円安政策によって、日本企業の経営者やエンジニアが油断して競争力が落ちたという供給側の問題としている。個人的には、需要側/供給側と明確に言えなくて、日本の強みが環境変化によって強みでなくなった位ではないかと言う意見。人口オーナスの影響もかなり大きいと思っている。

○露木肇子（法）

『1945年のクリスマスー日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝』ベアテ・シロタ・ゴートン、構成・文 平岡磨紀子、朝日文庫

朝ドラの「虎に翼」が始まって2ヶ月経過し、ついに日本国憲法が登場した。これから4ヶ月間、寅子は憲法という翼を得て、理想を求めて羽ばたいていく。寅子は家庭裁判所設立に関わっていくが、憲法24条の「家庭生活における個人の尊厳と両性の平等」の条文が家裁の基本理念となる。

この条文の草案を作ったのが、今回紹介する本の語り手、ベアテ・シロタである。ベアテは1923年生まれのロシア系ユダヤ人、父はキエフ生まれのピアニストのレオ・シロタで、ベアテが5歳の時、山田耕筰に請われて来日する。ベアテは日本で成長したので日本語が得意である。15歳からアメリカに留学したが、2年後日米開戦のため両親との連絡が途絶え、戦後両親に会いたい一心でGHQ民間人要員となって日本に戻ってくる。そして、22歳で憲法草案作成グループに抜擢され、女性の権利条項を任される。ベアテは法律については素人だが、戦前の日本の男尊女卑の社会を知っていたため、女性の幸せのためにベストを尽くすことを決意し、ソ連憲法やワイマール憲法を参考に、母性保護、平等教育、同一賃金等につき7つの条項を作成した。しかし、具体的な内容は大幅にカットされ、すべてを集約する内容にて憲法24条が生まれた。

是非「虎に翼」を観ながら、憲法24条の意義を考えてみてほしい。

○加藤透（理工）

『風の歌を聴け』村上春樹、講談社（2004年文庫初出）

50年の時の経過を当時、話題になった本を再読することで、振り返ってみた。何よりも村上春樹がここまで人気と評価が上がるとは思っていなかった。一番不思議な構成は、序文

と後書きなどで、繰り返し米国人作家の具体名を出して、謝意を語っていること。気づくの

が遅く恥ずかしいが、これが全て架空の作り話である事を知った。結果として、物語、エピ

ソード、主人公、登場人物のキャラクターはほとんど虚構のうえに存在している事を知った。

リアリズムの現代文学と対比して、ポスト・モダンの文学と評した女性がいた。なぜ、この

ような屈折した構造にしたのか。しかし、当時としては例がなく、斬新な企みといえる。し

かし、この「発明」で、何を表現したかったのかは、よく分からない。

『なんとなくクリスタル』田中康夫、河出書房新社（1983年）

著者は、当時無名の大学法学部5年生の、田中康夫の作品。ページを開くと、右ページに

ストーリーがあり、左ページはびっしりと注釈で埋め尽くされている。21歳の主人公の女子大生が身にまとっている衣装のブランド、お気に入りの店、好みの音楽、好んで散策する街並みなどが、田中の、時に素直な、時にシニカルな注釈が書き連ねてある。50年前にリアルタイムで読んだが、高等遊民達のこのような通俗的な物や事に対する賛美が、学校の授業とアルバイトを行き來した当時の自分の生活感覚と大きくかけ離れ、強い違和感を感じたが、今回読み直して、同じ違和感を抱いた。どこに、どうやって、これらの遊民達は成り立っているのか。しかし、この本は、そのリアリティを探るのではなく、散りばめられた当時の消費文化を回想するに留めるべきだ。僻まなければ、当時の文化的様相を回想する立派なテキストであり、軽薄ながら濃密な記録になっている。

『岬』 中上健次、文藝春秋（1976年）

注目すべきプロット（筋）は、以下の通り

- 1) 主人公は、土木建設の組の主任として働いている。日を浴びて、汗をかき、山裾の景色と一緒にとなり、その描写は官能的ですらある。都会を舞台とした都市的小説とは大きく異なる。このような描写が描かれたのは、希なことである。
- 2) 現在の義父とは別の、実父に対する憎しみが繰り返し独白され、全体のリズムを形成している。その心境は、エディプス・コンプレックス、「父殺し」の感情であり、第2部の「枯木灘」へと劇的に進んでいく。
- 3) 物語に緊張感を与えるのは、義理の兄の狂気と自死のプロットである。
- 4) 実父が娼婦に生ませて、娼婦として働く妹を主人公が買い、実父への復讐を果たすことでこの中編は終わるが、感情は妹への「愛しさ」へ転じる。

全体的に、短文の繰り返しや、同一事象の繰り返しの叙述など、実験性を兼ね備えている。これは、前衛ジャズの繰り返しのフレーズを参考にしたという。

○斎藤悟（社学）

いつもレベルが高く身が引き締まります。いつも和やかで楽しませて頂いて居ります。有難う御座居ました。次回も楽しみにして居ります。

○前田由紀（一文）

「RHEINGOLD ラインゴールド」 ファティ・アキン監督

ドイツの人気ラッパー、カター（ジワ・ハシャビ）の伝記映画。イランでジワの父親は有名な音楽家だったが、イスラム革命によりクルド系難民としてドイツに亡命し、貧困の中で育つ。やがて裏社会に足を踏み入れ、金塊強盗でつかまり、刑務所へ。そこで、鬱屈した自分の生き立ちをラップで歌い、ラッパーとしてブレイクする実話である。様々な言語が飛び交い、他国で何とか生き延びようともがく若者たちのエネルギーがみなぎる。クルド系のみならず、パレスチナ、トルコ、シリア等ドイツでの移民社会を垣間見ることが

できる。

『アフガンの息子たち』エーリン・ペーション、ヘレンハルメ美穂訳、小学館

スウェーデンの難民児童施設で働く若い女性レベッカは、アフガニスタンから逃れてきた三人の少年を担当することになる。家族と離れ一人で避難してきた少年たちは、この施設に辿り着くまでに過酷な体験をしており、心を閉ざし、18歳の成人になれば母国に強制送還されるかもしれない不安がよぎる。アフガンからの難民は、他の難民とはまた違う境遇の悲惨さが、ある程度の距離感をもって接するレベッカの静謐さにより更に際立って伝わってくる。

『ビギナーズクラシックス日本の古典 枕草子』角川書店編集、KADOKAWA（角川ソフィア文庫）

NHK 大河ドラマ「光る君へ」が放送されている。『枕草子』の背後にある、悲劇の中宮定子を敬慕し、定子の素晴らしさを称え、お仕えした日常を慈しむ清少納言に思いを馳せて読むと、より味わい深いものとなる。ドラマから平安時代の住まい、食事、装束、かな文字、暮らしぶりが想像できると、すうーっと平安文学へと自然と入っていくような気持ちがする。

* 次回は、宮田晶子さん（政経）の司会で、8月23日（金）夏の54ら読書会を予定しております。

【参加者】

篠原泰司（一文）、福島碧（社学）、加藤透（理工）、沖宏志（理工）、首藤典子（一文）、内田大雅（二文）、露木肇子（法）、仁多玲子（商）、石河久美子（一文）、斎藤悟（社学）、前田由紀（一文）、宮田晶子（政経）（以上12名、敬称略）

○篠原泰司（一文）**『源氏物語』①～④ 紫式部、角田光代訳 河出文庫 古典新訳コレクション**

以前、原文（古文）で源氏物語を読んでいたことがあって、途中で止めてしまったことがある。いつか再開しようと思っていたところ、今年（2024年）のNHK大河ドラマが紫式部をテーマにしているので、これを機に源氏物語への再挑戦を決意した。

いずれ原文（古文）で読むにせよ、先に大まかに物語の全体像を現代文でとらえておいた方がいいだろうと、再開してみて感じた、それで角田光代の現代語訳を読むことにした。

では、多くの女流作家の現代語訳があるなか、なぜ角田光代なのか？

第一にオリジナルにかなり忠実な訳であるという印象があること。第二に物語中の和歌の解釈が比較的しっかりしている感じがあること。そして、第三は現代の小説を読んでいる感じがして、楽しく読めるような気にさせてくれるところである。

今は文庫③の「少女（おとめ）」のところを読んでいる。

『世界はラテン語でできている』 ラテン語屋さん SB新書

私自身はラテン語にはもともと興味があるので、この本を読むことには全く抵抗がないのだが、なぜベストセラーになるくらいに買われて読まれているのかよくわからなかった。しかし、読んでみてその理由がわかったような気がする。あの「ハリー・ポッター」では多くのラテン語が登場するらしいのだ（私は「ハリー・ポッター」を読んだことがない）。また、この本は語学学習者だけに書かれたものではない。どちらかというと歴史や地理についての教養書という趣がある。これも売れる理由か？

実は我々の日常生活に入り込んでいるラテン語がとても多いことが、読んでよくわかった。語源的に考えれば、欧米系の言語としては英語の次くらいに日常生活に入り込んでいる。例えば、アリバイ（他の場所）はALIBIから。エトセトラ（他のものたち）はET CETERAというように。

この本を読めば、世界の歴史及び地理的なことがらが、今までよりも深く理解できるようになるだろう。

○福島碧（社学）**『天地明察 上下』 沖方丁 角川文庫**

以前、この読書会で、沖方丁の『光圀伝』を紹介され、その後、この「光圀伝」が非常に面白く読ませていただいたので、同じ著者の本を読んでみた。この「天地明察」は、暦を作った人の話。主人公の「とにかくじけない」姿勢に、深く感銘を受けた。

また、「カラン コロン」—これは、主人公が初心に返る時の心の音と思われるが、さらに進んで他の意味も含まれているのでは？天に向かって聴いているのでは？と思ったりした。

『虜人日記』 小松真一 ちくま学芸文庫

こちらも、以前この読書会で、「一下級将校の見た帝国陸軍」山本七平著を紹介いただき、読ませていただいたところ、その中でたびたびこの「虜人日記 小松真一著」が引用されていたので、読んでみた。

著者の小松氏は、戦時中、戦地でお酒を作るために東南アジアへ赴任した方。戦時中、出征した兵隊さんたちが、アジアでどんな暮らしを実際していたかがよくわかった「ひどいなあ」が感想。

著者は、帰還後、戦時中のことは一切語らず、この本も、出版を目的とせず、小松氏が亡くなった後、一周忌に記念として親しい方に渡したところ、評判となって出版された。著者は、戦地の記録として、すべてこの日記に書き残したものと思われる。

『理想はいつだって煌めいて、敗北はどこか懐かしい』 史明・田中淳（構成）、講談社

2カ月に1回、東京芸術劇場でプランチコンサートをマゴと楽しんだ後、決まって池袋西口の人気中華料理店「新珍味」（史明氏が作ったお店）で台湾ラーメンを食べるだが、そこにこの本のポスターが貼ってあり、取り寄せて読んでみた。この本は、台湾の前総統である蔡英文が推薦している。「史明おじさんは、誰よりも強い行動力を持つ人です。彼の物語は、台湾、日本、中国の激動の歴史そのものです」

中国大陸のスパイだった史明氏が、どこで何が原因で台湾独立派へ転換したのか、それを知りたくて読んだ。十分な答えを得ることができたように思う。

○加藤 透（理工）

Permaculture: A Designers' Manual, Bill Mollison, Tagari Publications Australia

『パーマカルチャー菜園入門』 設楽清和 家の光協会

パーマ・カルチャー農園の本について報告したが、何か、自分の趣味優先のようで、反省している。しかし、この「地上の楽園」とも例えられた、有機農園の最盛期に訪問することができたのは、幸運だったというしかない。みなさんも、このような農園があったことを覚えておいてほしい。

次回以降、美学、農学からは離れ、このお集まりを活用して、40年ぶりに小説を取り上げて、読んで感想を報告したい。よろしくお願ひします。

○沖 宏志（理工）

『こころを旅する数学』 ダヴィット・ベシス 晶文社

- ・数学においては脳内イメージの構築が重要。
- ・「天才数学者」と我々の違いは、「脳内に知覚イメージを構成する方法を知ってるか、知らないか」だけ。脳内イメージを自由に展開する訓練を通じて数学する能力は向上させられる。
- ・数学的アプローチは頭の中のヨガのようなもので、数学は脳に作用し、世界の見方を変える。数学は、指せないものに正確に話す試みのうち、人類唯一の成功例。
- ... というような事を言っていて実におもしろい。

○首藤典子（一文）

『80's エイティーズ ある 80年代の物語』 橋 玲 幻冬舎文庫

「マネーロンダリング」「タックスヘイブン」の著者が過ごした80年代を書いたもので、70年代後半に在籍した第一文学部で一部重なる世情、新宿、高田馬場界隈の当時の風景に頷きながら、著者の歩んできた出版業界での仕事、生活の様子、キャリアを重ねて彼自身が変わっていく姿、どのように成功を納めていったかを知り、濃い人生を歩んできた人だと、同郷の誼もあり嬉しくまた誇らしくも思える。

また、オウム真理教への潜入取材を試みたり、ドラッグに溺れていった同業者や、仕事の苦しさから仕事も家族も失い放浪していく編集仲間と関わったりしながら、それに感化されることなく、小説執筆の境地に至っていく、危ないながらも客観視できる強さがあればこそ、と思える作品。

○内田大雅（二文）

『「原因」と「結果」の法則』 ジェームズ・アレン 坂本貴一訳、サンマーク出版

デール・カーネギー、オグ・マンディーノなど、現代成功哲学の祖たちが、もっとも影響を受けた伝説のバイブル *As a Man Thinketh*。聖書に次いで一世紀以上もの間多くの人々に読まれ続けている、超ロング・ベストセラー、初の完訳。

この世は道理でできている。道理を無視して成功はありえない。

○露木肇子（法）

『家庭裁判所物語』清永 聰 日本評論社

『三淵嘉子と家庭裁判所』清永 聰 日本評論社

この4月からNHK朝ドラ「虎に翼」が始まる。ヒロインは、女性初の弁護士、判事、裁判所長となつた三淵嘉子さんがモデルである。

三淵さんは戦前法学部で唯一女性に門戸を開いた明治大学を卒業し、昭和13年に司法試験に女性として初めて合格し、昭和15年弁護士になる。昭和22年、まだ裁判官を男性に限る法律が改正される前に、彼女は裁判官採用の願いを出し、司法省は困って、とりあえず民法改正作業を手伝わせた。家制度をなくし、男女平等を基本理念とする現民法は、昭和22年に制定された。昭和24年にはGHQ提案の家庭裁判所が発足した。

三淵さんは同年から地裁判事補になり、昭和37年に家裁に異動になる。そして、早稲田出身の宇田川潤四郎裁判官のもと、アメリカの家裁をモデルにした、独立的・民主的・科学的・教育的・社会的家庭裁判所を実現すべく奮闘する。本書には、この経緯が資料に基づいて詳細に書かれている。

家庭裁判所には、今多様な問題が持ち込まれている。DV・モラハラ・虐待を理由とする離婚や親権争い、LGBTに関連する問題等である。これらは人の命や生き方に直接関わってくる。

今後親権等について民法改正となれば、ますます複雑化・深刻化することが予想される。およそ家裁の現体制で処理できるとは思えない。裁判官も調査官も研修も庁舎も明らかに不足している。

家裁の機能が大きな問題となっているいま、「虎に翼」が発足当時の理想に燃える家裁をどのように描くか、今からとても楽しみである。

○仁多玲子（商）

『終止符のない人生』反田恭平 幻冬舎

この本は、反田恭平の自伝のような本。小さい頃、ピアノを弾くようになった経緯から始まって、ショパンコンクールで2位入賞するまで、自分の観点から詳しく語られている。

子供の頃は、父親の影響が大きかったようだ。父親に反発しながら、ピアノの道に進むようになった。成長してからは、優秀な師につながり、いまの反田恭平が出来上がったと言える。

やはり、何かで名をたてる人は、才能も必要ですが、運も必要なんだということが、よくわかる。

そして、最後にショパンコンクールだが、やはり、外国人の審査員、聴衆に受けられるよう、日本人、「侍」を意識してピアノを弾いたようだ。そういう意味で、反田さんは、演出力もあったと思われる。

いろいろな意味で、反田恭平というピアニスト、彼は、これからは小さいころから夢だった指揮者になろうと努力しているようだが、彼を見守りたいと思う。

○石河久美子（文）

『最後の授業—心をみるひとたちへ』北山修 みすず書房

著者はフォーククルセダーズのミュージシャン、「帰ってきたヨッパライ」の作詞家であるが、その後、精神分析の専門家になり九州大学教授となる。本書は、九州大学での最終講義を中心に、学生たちに伝えたいことや彼の精神分析感をまとめたもの。作詞家は人の心を言葉でなぞる仕事だから、人の心を言葉で取り扱う臨床心理学の精神分析を選んだとの転身のいきさつに納得。

昔話や神話を精神分析に活用する方法を取っており「鶴の恩返し」に思い入れがあるようだ。異類婚姻説話は西洋にもあるが、正体がばれても去らずハッピーエンドになる話が多いといった物語の読み解き方も新鮮で面白かった。

(映画)『JFK 新証言 知られざる陰謀』オリバー・ストーン監督 (2021年)

ケネディ大統領暗殺にまつわるドキュメンタリー。同じくオリバーストーンにより1992年に作成された「JFK」は、豪華俳優をそろえ事実とフィクションを織り交ぜた社会派エンターテイメントであったが、こちらは新たに公開された文書や関係者へのインタビューを元にストーンの仮説を緻密に検証していく。情報量が多く当時のアメリカの立ち位置、世界情勢に関する知識不足のため、未消化に終わったが、底知れぬ闇の深さを感じた。頭をフル回転させて観るべき作品。

○前田由紀 (一文)

『百年の子』古内一絵 小学館

小学館は、今までこそ総合出版社だが、名前でも分かるように創業当初は、小学生用の学習雑誌学年誌から始まった出版社である。関東大震災前年に創刊された。私たち昭和世代では、おなじみの雑誌だと思うが、私も学年誌「小学〇年生」の毎月号の発売を楽しみにし、家族と一緒に付録を組み立てたことを思い出す。これは、創立百周年を迎えるにあたって、編集部が、小学館の歴史を振り返る小説となっている。特に戦時下での記述に重きがおかれて、著名な作家たちが執筆し、国策雑誌として志願兵を促すメディアとなっていたことにも気づかされた。メディアの罪深さも世相を反映したとはいえ事実として知っておくべきである。

(映画)『ゴジラー1.0』山崎貴 VFX・脚本・監督 東宝

ゴジラ生誕70周年記念作。前作『シンゴジラ』も面白かったが、今回欧米でもかなり人気があるということでお先月鑑賞し、その理由を実感した。VFXでは、職人技ともいえる丁寧な作りで、海の波形には、1年間費やしたという。スタジオの若手が精巧な作りに大きく貢献したことも知り、うれしくなった。『ゴジラ対モスラ』を子供時代に観て特に印象に残っていて、力強いテーマ曲が懐かしく、感動した作品となつた。54ら会の皆さん、必見！

○宮田晶子 (政経)

『鎌倉の名建築をめぐる旅』内田青蔵、中島京子 エクスナレッジ

私は建築が好き。専門的な知識はほとんどないが、古い建物に入ると、そこに生きた人々の暮らしや思いが垣間見られるような気がして、興味深い。この本は私が住む鎌倉にある名建築を近代建築史が専門の内田氏と『小さなおうち』で直木賞を受賞した中島氏が巡り、建築的な解説を内田氏が担当、中島氏は鎌倉と建築をめぐるエッセイを寄せるというスタイルになっている。本を手に取った時は、鎌倉の古い洋館の紹介本かと思ったが、建長寺や鶴岡八幡宮などの寺社、近代美術館などの新しい建築についての解説もある。写真が多く、見てるだけで楽しいが、中島氏のエッセイや両者による対談も面白い。最近のタワマンなどは和室がない物件も多く、「6畳」と言っておおよその大きさが共有できる日本人の感覚が失われるのは勿体無い、という指摘が興味深かった。

第 15 回 秋 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会
2023. 11. 17

【参加者】

尾崎健夫（理工）、篠原泰司（一文）、首藤典子（一文）、山口伸一（理工）、仁多玲子（商）、鈴木伸治（商）、石河久美子（一文）、宮田晶子（政経）、斎藤悟（社学）、前田由紀（一文）
(以上 10 名、敬称略)

最近まで 20 度を超える日々が続いたと思えば、急に 10 度未満の極寒になり、温度の変化に体が追いつかないこの頃。紅葉もやっと見ごろとなった。第 15 回となった 54 ら読書会は、建築学科出身の尾崎さんを新たにお迎えし、読書の秋を満喫した。

多岐にわたる本に関する参加者からの紹介文を掲載する。（発表順、文体は常体に統一）

○尾崎健夫（理工）

『大図説 世界の建築』ジョン・ジューリアス・ノリッジ編/堀内清治他監修、小学館

（昭和 52 年初版 日本語版編集制作（株）一ツ橋美術センター）

世界における歴史上の名建築を約 800 の図版、写真とテキストで紹介した事典的読み物。アジアと中南米、古代、中世、ルネサンス、近代から現代へという大胆な章立てで、解説が展開する。今の我々には、ややヨーロッパに比重がかけられている感もあるが、それだけ歐州の建築文化が世界に与えた影響が小さくなかった証左とも言えるかもしれない。

○篠原泰司（一文）

『「人口ゼロ」の資本論 接続不可能になった資本主義』大西広、講談社 + α 新書

SDGs と資本主義の問題よりも少子化（人口問題）と資本主義の問題の方が日本人にとっては、より深刻ではないか？危機から目を逸らしたほとんど効果のないような「異次元の

少子化対策」では確実に日本は消滅していくだろう。統計資料を駆使した説得力のある本だ。

『キリスト教の本質 「不在の神」はいかにして生まれたか』加藤隆、NHK 出版新書

信仰という立場からは距離をとり、客観的にキリスト教の本質を述べている。ユダヤ教とキリスト教の接続や四つの福音書の成立事情など、私にとっては、意外なところで、新し

い知識を見つけるような驚きを感じさせる本だった。以前からキリスト教関係の本は多く

読んできたつもりだが、この本には独特の説得力を感じた。とにかく、考察の深みを感じさせられる本だと思う。

○首藤典子（一文）

『トリニティ』 窪美澄、新潮文庫

「三組」を意とするタイトル。それぞれ違う環境で育った3人の女性が、出版業界で出会い、「新しい女性」として成功し脚光を浴び、学生運動の混乱時には共に争いの中に飛び込む。学生とともに社会に抗ったというきっかけが三人の結び付けを強める。そしてそれがそれぞれの仕事、生き方に強い影響を及ぼす。その後時代の流れにより、新しい世代に仕事を取って代わられ、老後は幸福とは言えないが、その三人のことをそのうちの一人の娘が記録し、本にすることで未来へ残す。かつてよく働く女性の先駆けとなった三人の話である。

『ゆりかごで眠れ』 垣根涼介、中公文庫

日本が移民政策をとっていた時代、南米に渡った日系二世が、10歳の時にゲリラに両親を殺害された後、現地の女性に引き取られる。孤児の賢さに気付いたその女性に上の学校にいくように勧められ、進学が決まった直後、その女性が、実の息子と共にマフィアに殺される。その憤りが彼を日本人マフィアにし、復讐をする。復讐は成功するが、その争いの時に見つけた女の孤児を自分の子供のように育てる。日本で麻薬の取引を企てたときに、警察に捕らえられた子分を救い出そうと周到な準備をするが、直前に仲間内の抗争で殺害したグループの生き残りの返り討ちに遭い倒れる。愛情を持ったことが彼を弱くしたのかというところで終わるハードボイルドタッチのストーリーであった。

○山口伸一（理工）

『月』 石井裕也監督 辺見庸原作（角川文庫）

書けなくなった小説家（宮沢りえ）が重度障害者の施設に勤務し、介護職員のさとくんが、障害者を次々と殺戮する事件を起こすまでを描いた作品。さとくんは、障害者を邪魔者、汚物だと主張する。違和感を覚えるが、100%間違っているとは反論出来ない。

観たくない映画もあるが、観なくてはいけない佳作。

『愛にイナズマ』 石井裕也監督

これは「月」と同時期に寡作の石井裕也監督が制作した作品。佐藤浩市、松岡菜優、池松壮亮の演技派に混ざっての窪田正孝の演技がひときわ光る。家族の意味を知らない窪田が、崩壊した松岡ファミリーの再構築を目撃して、ハグしあうシーンには感動。ハグの意味と効果を再認識した。

○仁多玲子（商）

『人生たいていのことはどうにかなる』高尾美穂、扶桑社

皆さん、ご存じかどうかわかりませんが、著者は、産婦人科医の高尾美穂先生である。最近、出された本だ。高尾美穂先生は、よく、朝NHKで放送している「朝イチ」にゲスト出演されていて、産婦人科医の目から女性にいろいろアドバイスされている。

彼女の人生観や、いろいろな物の見方、考え方が、この本を読むとよくわかる。私は、すごく共鳴した。皆さんは、どうですか。一度手にとって読まれると面白いと思う。

○鈴木伸治（商）

『2050年の世界 見えない未来の考え方』ヘイミッシュ・マクレイ著、遠藤真美訳　日本経済新聞出版社 2023/7/10

著者は、英インディペンデント紙経済コメンテーター。1990年代に出版した『2020年地球規模経済の時代』での将来予測と現実での学びから、更に一世代（30年）後の世界経済がどうなっているかを、最新の経済モデルや過去2000年以上の各国内総生産（GDP）の長期推計などを参考に、概ね前向きな展望として素描した本である。

アメリカ大陸、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、オセアニアの主要国の現状を示した上で、今後の変化をもたらす「人口動態」、「資源と環境」、「貿易と金融」、「テクノロジー」、「政府と統治」の5つの観点を説明し、その結果として前述の主要国がどうなっていくかを予測している。世界各国の現状と30年後の姿についての一つの考え方を知ることができる。

○石河久美子（一文）

『サーカスの子』稻泉連、講談社

著者は早稲田の卒業生。大宅壮一ノンフィクション賞も受賞している。著者は幼少の一時期を母親と共にサーカス団に参加し、全国を旅するという稀有な経験を持つ。その子ども時代の夢のような時間を、40年後、当時のサーカス団員を訪ねて話を聞きながら再体験していく。テント生活で旅から旅を繰り返す団員たちの仲睦まじい日常、100回以上の転校を繰り返すサーカスの子、退団後の通常の暮らしに適応することの困難さ、時代と共にサーカスが衰退し廃業していく様子などが浮き彫りになる。夢か幻かと思われる非日常の世界を繰り広げ、跡形もなく去っていくサーカスは、どこかあやしくもの悲しい。サーカスの追体験とともにサーカスの裏側も知ることができる貴重な書。

○宮田晶子（政経）

『春にして君を離れ』 アガサ・クリスティー（ハヤカワ文庫）

クリスティーだが推理小説ではない。しかしミステリ的な要素もある作品。あるイギリス人女性が主人公。弁護士の夫を持ち、三人の子どもを育て上げ、家を守り、裕福で円満

な幸せな家庭を築いている。本人も自分がやってきたことに自信を持ち、満足している。しかし、実はそうではない。この主人公は表面にばかり囚われて、物事の本質を見られず、人の本当の気持ちが理解できないために周りの人々を不幸にしてきた。娘の病気見舞いに訪れたバグダッドからの帰路、彼女は過去を思い出しながら、そうした自分に少しづつ気づいていくのだが…イギリスに戻ると「やはり自分は元のままで良いのだ」と戻ってしまう。極端な描写はあるけれど、こういう女性は世間にいっぱいいるような気がする。また結局改心できないままという結末は残酷だけど、クリスティーらしい。

○前田由紀（一文）

『相思樹の歌』西園徹彦、左右社

ひめゆり学徒隊となる第一高女の卒業式のために、青年少尉太田博が作詞、第一高女の音楽教師東風平恵位が作曲した「相思樹の歌」の実話を元に創作された小説。二人とも戦死したが、この曲の生まれた奇跡に驚く。戦争の本土最前線として多くの若者が犠牲となった沖縄を舞台に、戦争末期の悲惨さと理不尽さの中、女生徒の美しい歌声が聞こえるような心持ちになる。戦後の沖縄も描かれ、沖縄の歴史を顧みた。「相思樹の歌」も聴いてほしい。

『福田村事件』森達也監督、辻野弥生原作（五月書房新社）

関東大震災から今年で 100 年になった。その直後、朝鮮の人たちに関わる流言飛語が飛び交い、自警団と称して朝鮮人を襲撃する事件が各地で起きた。千葉の旧福田村でも、香川からまたま来ていた薬売り行商団が朝鮮人に間違われ、地元の人たちに、妊婦、幼児を含め 9 名が惨殺された事件があった。この映画をきっかけにこの事件を知ったが、デマ・流言を信じてしまう人々の狂気の沙汰に戦慄した。記憶にとどめておきたい。

★次回の第 16 回冬のオンライン 54 ら読書会は、2 月 16 日（金）19:30 ~21:00 に予定しております。司会は、宮田晶子さん（政経）。是非、ご参加ください。

【参加者】

篠原泰司（一文）、村山豊（法）、鈴木伸治（商）、内田大雅（二文）、石河久美子（一文）、沖宏志（理工）、
露木肇子（法）、山口伸一（理工）、前田由紀（一文）、斎藤悟（商）、仁多玲子（商）宮田晶子（政経）
(以上 12 名、敬称略)

54 ら会のオンライン読書会、3ヶ月ごとの開催で 14 回目を迎えました。今回は常連の皆様に加え、初参加の方がお一人いらっしゃいました。読書会の仲間が増えるのは嬉しいことです。

以下は当日、挙げていただいた本を発表者のお名前とともに紹介いたします。推しの本について、それぞれ長いコメントをいただいており、それをそのまま（文体は常体に統一しました）掲載しております（順不同）。

1 篠原泰司さん（一文）

『一下級将校の見た帝国陸軍』 山本七平（文春文庫）

1980 年に出版された本ではあるが、現在も愛読者が多くぜひ読んでみたいと思っていた本。
一下級将校としての自己の従軍経験をとおして見た日本人の心性や日本の組織への洞察が素晴らしい。
戦後 78 年を経過しても日本人と日本社会は、悪い意味でその本質を変化させずにいるのだと感じさせられた。

『マイ・ブローケン・マリコ』 平庫ワカ（KADOKAWA）

昨年（2022 年 9 月）に映画化され、2023 年 8 月 29 日現在 Amazon Prime で無料視聴が可能。
「布団の中から蜂起せよ」という本で取り上げられていて興味を惹かれてコミック本を購入したのが数
か月前。最近 Amazon Prime で映画も視聴。なかなかの出来だと思った。

主人公シノイトモヨが、父親からの DV の末に自殺した友人のマリコの骨壺を強奪して、東北地方にある
「まりがおか岬」まで行って散骨するまでの話。ロードムービーである。シスターフッド（女性同士
の連帯）の文脈に DV を置くことで新しい視界（希望？）が開かれたような気がした。「布団の中から蜂
起せよ」 p.83 で高島玲が「物語が必要だ」と述べていることの意味はこういうことなのかもしれない。

2 村山豊さん（法）

『風と共に去りぬ』 マーガレット・ミッケル（新潮文庫）

NYMC 男声合唱団の演奏会準備で南北戦争に興味を持ち、「風と共に去りぬ」を初めて「いまさら」
読んだ。南北戦争が太平洋戦争と酷似していると感じる一方、女性視点（妻、義妹）とのギャップが興
味深い。レット・バトラーは素敵だがありふれたタイプ、スカーレットは可愛いが性格的に私には耐え
られないと感じた。多面的なテーマ（恋愛、南北問題、黒人問題）と強烈な南部英語の表現が印象的で、
原文も確認してみたいと思う。 例えば「命令形+さもないと『生皮を剥がしてやる』『尻を蹴っ飛ばして
やる』等々

3 鈴木伸治さん（商）

『農業問題-TPP 後、農政はこう変わる』 本間正義（ちくま新書）

相続した農地は、農地としてしか利用できず、賃貸・譲渡も農業者にしか認められていないと聞いていたので、農地に係る規制の内容について、市役所の農業委員会に聞きに行ったところ、「農地に係る規制を取りまとめた資料はなく届出書があるだけで、根拠となるものは法令で法令にあたってほしい」との回答であった。そのため、農地規制の解説書を探したが見当たらなかったことから、まずは日本の農業に関する本として読んだもの。

日本の農業は、戦後の農地改革によって農地を小作農に解放したため小規模家族経営の農家を増大させ、それを保護するため現状でも農地の所有は農業者に限られ、法人は農業者が決定権を掌握する農業生産法人にのみ認める制度になっている。このため、農地が英國の 1/40、フランスの 1/20 程度と小規模な農家がほとんどであるという日本農業の問題解決を阻害している。

ただし、日本の農家は兼業農家が大層を占めて貧しくはないことから小規模優遇政策を支持しており、さらに農業協同組合は組合員や取扱高、政治家は農村票、農水省は予算の維持のため小規模優遇策を推進することになる。

『高慢と偏見』 ジェイン・オースティン著 大島一彦訳（中公文庫）

14 年前に「自負と偏見」 中野好夫訳を読んで高評価の記録を残しているものの記憶に残っていないことから、再読するために最近の訳本を比較して自分の世代に適っているのではないかと思い紹介したい。

（注）次の冒頭の訳はある Web に掲載されていたもの。

・中野康司訳、「高慢と偏見」ちくま文庫（2003 年）

金持ちの独身男性はみんな花嫁募集中にちがいない。これは世間一般に認められた真理である。

・小尾美佐訳、「高慢と偏見」光文社古典新訳文庫（2011 年）

独身の青年で莫大な財産があるといえば、これはもうぜひとも妻が必要だというのが、おしなべて世間の認める真実である。

・小山太一訳、「自負と偏見」新潮文庫（2014 年）

世の中の誰もが認める真理のひとつに、このようなものがある。たっぷり財産のある独身の男性なら、結婚相手が必要に違いないというのだ。

・大島一彦訳、「高慢と偏見」中公文庫（2017 年）

独身の男でかなりの財産の持ち主ならば、必ずや妻を必要としているにちがいない。これは世にあまねく認められた真実である。

4 内田大雅さん（二文）

『死の講義』 橋爪大三郎 ダイヤモンド社

この本のテーマは死である。著者曰く、「日本人は死ぬということがどういうことが分かってない人がほとんどだ。それは言い換えれば、生きるとはどういうことかということが分かっていないという可能性が高い。この機会に死を鏡にして、自分の生きていることを照らし直してみよう」 この本は僕が

僧侶を目指して修行を積んでいたときに読んで、とても勇気づけられた。

5 石河久美子さん（一文）

戦争花嫁に関する本を2冊紹介した。

『非色』有吉佐和子（河出文庫）

黒人兵と結婚した主人公が、混血児を日本で出産、その肌の色などで差別されることから、夫の住むニューヨークに移り住むが、そこはハーレム、稼ぎの悪い夫と次々生まれる子どもを抱えながら、貧困の中で生き抜く姿が描かれる。また、白人と結婚し裕福な生活をしていると思っていた戦争花嫁の知人が、アメリカ社会では、黒人より下に位置づけられるプエルトリコ人と結婚して自分よりさらにひどい生活をしていた顛末などが描かれる。アメリカの社会階層、人種問題の複雑さがストーリーを通して浮き彫りになっていくパワフルな作品。

『花嫁のアメリカ』成常夫（論創社）

写真と文章を組み合わせたフォトノンフィクション。1970年代後半、100名余りの戦争花嫁を撮影取材、さらに20年後、その後の花嫁たちの動向を追ってまとめたもの。文化や言語の違う異国で離婚しシングルマザーになったり、「非色」の主人公のように黒人と結婚して差別や偏見にさらされたりの過酷な人生が本人たちの言葉で淡々と語られる。戦争花嫁たちは生きていれば大半が90代、すでに鬼籍に入った人も多い。花嫁たちの実態を記した貴重な記録である。

6 沖 宏志さん（理工）

『老神介護』劉滋欣（角川書店）

5つの短編集。『地球大砲』は、主人公が「世界を破滅に導く男の子」で、野心と創造力をあわせ持つ。この男の子は中国、もしくは中国共産党を連想させた。「一党独裁全体主義」と「イノベーション」を今のところあわせ持つ中国が世界を破滅に導かないことを願う。

「扶養人類」は、貧富の格差がますます拡大して、地球がほとんど一人の金持ちの私有財産になってその金持ちが大衆に「地球から出ていってくれ」という話。ピケティの「テクノロジーの進化により、全人類の総需要が一人の人が半日働くだけでまかなえるようになった時、富の分配はどうするのか？」という問い合わせに思いをはせた。

7 露木肇子さん（法）

『「赤毛のアン」の秘密』小倉千加子（岩波現代文庫）

1908年、カナダで、L・M・モンゴメリ作「グリーンゲイブルスのアン」が出版された。日本では1952年に村岡花子訳「赤毛のアン」の初版が出た。

その後1979年にフジテレビがアニメを放映し、2014年にはNHKが朝ドラ「花子とアン」で村岡花子の生涯をとりあげ、2017年にはカナダで「アンという名の少女」というテレビドラマが始まり、現在もNHK BSで放映されているという人気ぶりだ。舞台となるカナダの片隅にあるプリンスエドワード島には、日本人観光客がひっきりなしに訪れ、日本で出版される写真集も多い。

私も小学生からのアン・フリークで、モンゴメリの全作品を読破し、プリンスエドワード島どころか、モンゴメリが結婚してから 15 年ほど住んだトロント郊外のリースクデールまで訪れている。

「赤毛のアン」にはいくつか謎があるが、最大の謎は、なぜ「赤毛のアン」は特に日本の少女に人気なのかである。

またモンゴメリは、晩年はうつ病にかかり、1942 年に 67 才で自殺したと言われているが、なぜモンゴメリは自殺に至ったのか、これが次の謎である。

著者は早大院卒の心理学者であり、本著においてモンゴメリを冷酷に分析してこれらの謎に迫っているが、それはアン・フリークには時に怒りを覚えさせるほどの内容である。しかし、一方で、自己の矛盾を気付かせてくれる、私にはどうにも無視し難い本である。

8 山口伸一さん（理工）

『地図と拳』 小川 哲（集英社）

第 168 回直木賞受賞作。命をかけて満州の測量を描いた親子二代の技師の物語。

ロシアの日本侵攻の恐怖にどう対抗するかで日本は満州の侵略を選択した。が、日清戦争で中国軍隊は恐れるに足りずと誤解した日本軍は、民衆の激しい憎悪からの抵抗に苦戦する。

歴史上、外国との戦争や交渉の経験が浅い日本人に海外の統治は可能なのか。日本人が他人を使って事をなすマネジメント能力の低さを痛切に感じた。

9 前田由紀さん（一文）

『牧野富太郎自叙伝』 牧野富太郎（講談社学術文庫）

NHK 朝の連続ドラマ「らんまん」のモデルとなった牧野富太郎の自伝である。日本植物分類学の草分けとして研究に邁進した軌跡は、実に面白い。土佐の旧家出身であるが、学問の盛んな土地柄で、十代前半で、福沢諭吉『世界国尽』、河元幸民『氣海觀瀾廣義』等の日進の学間に触れ、英学もかなり早くから専門書を読んでいた。独学で植物学に関する書物を読み尽くし、精細な図解の技量も会得する。突出する才能は、大学では妬みの対象となり、冷たい処遇を受け、経済的にも困窮するが、土佐の岩崎氏など様々な篤志家が現れ、支援を受ける。最後まで一書生然として嬉々として研究に励み、採集で野山を駆け巡る姿は、清々しい。軽妙な語り口は、ユーモアにあふれている。家族の手記もあり、昭和天皇へのご進講で、皇居の植物について天皇と語り合う幸福な場面が印象的だ。

読書会で、露木さんから、同じく牧野博士を主人公とした朝井まで著『ボタニカ』を紹介された。自伝では独りよがりの面もあり、より客観的な牧野像が描かれていることだろう。

10 宮田晶子（政経）

『マチスのみかた』 猪熊弦一郎（作品社）

2023 年 8 月 20 日まで開催されていたマティス展。それでマティスの弟子であった洋画家、猪熊弦一郎のこの本を手に取ってみた。画家の鑑賞の仕方というのが興味深かった。また、マティスはピカソのような天才というより努力の人なのだと感じた。単純化された簡単そうに見える線は何十枚ものデッサンから生み出されたもの。「マティスが好きと言い得るが、わかる事は難しい」という言葉に納得した。

本の紹介はされませんでしたが、ご参加下さった方から次のような感想をいただいています。

仁多玲子さん（商学部）

先日の読書会は、今回紹介したい本が見当たらなく、見学で参加させていただきました。

皆さんが紹介する本は、ユニークで聞かないと知らない本ばかりで、とても面白かったです。なかには、有名な本を、自分流に紹介された方もいますが、それはそれで興味深かったです。

幹事の皆さん、いつもありがとうございます。読書会の盛会を、これからもお祈りします。

目次にもどる

第 13 回 春の 54 ら読書会報告
日 (金)

2023 年 5 月 26

人類の起源から始まった今回の読書会。DNA 解析から新たな歴史が解明されるのだろう。山岡荘八の文庫全巻読破した発表者。一人の作家を読み通すとどんな景色が見えるのだろう。読書は、登山のようだ。社会福祉学の専門家から「境界知能」という言葉を知る。中国経済の台頭は目覚ましいが、グワンシ（関係）文化が富を生むメカニズムだという。紹介されたカズオイシグロの映画「生きる Living」は、当日観たばかりで偶然に驚いた。健康のための最強レシピもこれから欠かせない要素だ。54 ら句会幹事広渡詩乃さんの句が掲載された『俳壇』。俳句は、身近な言葉の芸術だ。旅行が楽しみな年代となつたが、沢木耕太郎の 9 年ぶり大作による稀有な旅人のお話。そして 3 月に逝去した坂本龍一の自伝。今回も全参加者が 5 分位ずつお薦めの本等を紹介し、多岐にわたる本の旅と一緒に満喫でき、新しい参加者もおられたので、改めて自己紹介し合う良き機会となった。（前田）

次回は、宮田晶子さん（政経）ホストで、8 月 25 日（金）19:30～21:00 の開催予定。

参加者の皆さんには、ご覧の通り。（発表順）

篠原泰司さん、福島碧さん、石河久美子さん、沖宏志さん、仁多玲子さん、鈴木伸治さん、宮田晶子さん、前田由紀の 8 名

1. 篠原泰司（一文）

『人類の起源 古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅』篠田 謙一、中公新書

PCR 法の使用で古代 DNA 研究の分野がめざましい成果をあげているらしい。この本は現時点でのその成果を著したものだ。2022 年 10 月にノーベル生理学・医学賞を受賞したスパンテ・ペーボ博士の研究分野がまさに古代 DNA 研究だった。ノーベル賞受賞後の 2022 年 10 月以降この本の売上も倍増し、2023 新書大賞の 2 位にもなった。

デニソワ人や出アフリカの新しいストーリーなど興味深い記述も多いのだが、世界各地での古代 DNA 解析がまだ途上にあり記述が中途半端になっている面も多いと感じられる。でも、古代 DNA 解析が進めば驚くような古代のストーリーが出現するかもしれない。何年後かの同分野の新しい本の登場が今から楽しみでもある。

『目的への抵抗 シリーズ哲学講話』國分功一朗、新潮新書

コロナ禍での二つの講義を本にしたもの。「目的に抗するところにこそ人間の自由

がある」(P3) というのが本書の主題である。人間の自由を奪うのは政治や国家という外部ではなく、実は自己の心なのではないか? 薄い本ではあるが、内容は濃く重厚だ。ぜひ読んでほしい一冊である。

『メディチ家』 森田義之、講談社現代新書

コロナ禍が終了し、海外旅行、特にヨーロッパ方面への旅行を計画している人も多くいると思われる。もしイタリア方面に行かれるなら、ぜひ一読してほしい本である。内容の濃さは群を抜いている。私もイタリアが好きで多くの本を読んできたが、最高の部類に入る一冊だと思う。フィレンツェの貴族メディチ家の歴史について書かれた本だが、フィレンツェだけではなくイタリアやヨーロッパ全体の歴史を理解する助けにもなるだろう。ルネサンス美術を鑑賞理解する際の強力な土台になる知識が網羅されている。

2. 福島 碧 (社学)

『小説 太平洋戦争』 1巻～9巻、山岡荘八、講談社

「これを国民のために書かないうちは、死ねないと思った」という著者山岡荘八（すごい！）。確かに、山岡（以下敬称略）は、この9冊を66才（なんと私達と同じ歳）で書き上げ、5年後の71歳で亡くなっています。

この中で、山岡は繰り返し述べていますが、この太平洋戦争は、アメリカ大統領（当時）ルーズベルトとイギリスのチャーチルの太平洋上のヨットでの密約から始まり、欧米人ではない“ジャップ（猿）”が東南アジアへ領土を拡大するのはけしからん、ましてやドイツ、イタリアと3国同盟など許せない、との理由だったとのこと。人種差別以外の何物でもないですね。これからすると、欧米人は、日本が世界のNo.1になるのは許さない、→従って、トヨタが世界1の売り上げとなるのは許さない、→電気自動車以外ゆるさない、となるのでは？と思ったりします。

また、今ウクライナでの核兵器の使用が危惧されていますが、広島・長崎への人類初の原子爆弾による人体実験（人類差別）という見方からすると、かつての同国人であるウクライナへの核使用は、ないと考えられます。

今まで、太平洋戦争について学校で教わることはなく、この本で初めて実態を知りました。山岡の強烈なメッセージを受け取りました。

（これで、文庫として発刊されている山岡荘八の全書籍100巻の読了となりました。あらためて、山岡氏の生き方に近づけたように思います。中でも、『徳川家康』、この『太平洋戦争』は、もう一度ゆっくり読み返してみたいと思っています。）

3. 石河 久美子（一文）

『ケーキの切れない非行少年たち』宮口幸治、新潮新書

少年院に居る少年たちの中には、発達障害や知的障害を持つ者が多く含まれる。ケーキを切ろうとするといびつになってしまふように、これらの少年たちは世の中が歪んで見えていたり、人とうまくコミュニケーションが取れなかったりする。そのことが家庭でも学校でも気づかれることなくやがて非行に手を染めることになる。

特定の読者に限定されがちな内容であるが、「ケーキが切れない」と「非行少年」を組み合わせたタイトルの妙と少年が切り分けたケーキの図を示すことで、一般読者も手に取りやすい本になっている。ベストセラー。アニメ版もある。

映画 「生きる Living」監督 オリヴァー・ハーマナス

カズオイシグロの脚本で話題になった黒澤明の名作「生きる」のイギリスリメイク版。黒澤版のストーリー展開をほぼ忠実に再現し、エピソードの数々も工夫して取り入れているが、趣はやや異なる。黒澤版の主人公は冴えない小役人風だが、イギリス版は偏屈ながらも品格のあるイギリス紳士。黒澤版はテーマがストレートで滑稽な部分もあつたりするが、イギリス版は、しみじみと余韻を残すような静けさが感じられる。2作品を見比べるのも楽しい。

4. 沖 宏志（理工）

『レッド・ルーレット』デズモンド・シャム（草思社）

現代中国の中で、富を生むメカニズムを実体験から暴露した本で、特にその負の側面に焦点をあてている。赤い貴族と言われる共産党の幹部と家族が、コネを存分に利用して、利権をむさぼる構造が描かれている。

しかし習近平が国を変えた。起業家や富裕層を弱体化させ、市民社会の芽を摘み取り、アリババのジャック・マーにも国のためにスパイ活動を強要できるようにした。この新中国でイノベーションが続くかどうかが注目される。

5. 仁多 玲子（商）

『「がん」を生き抜く最強のレシピ』森山晃嗣 森山瑠水、飯塚喬子、コスマトゥーワン

森山晃嗣先生は、NPO法人がんコントロール協会の理事長をやってらして、日々健康についてご尽力されています。森山瑠水さんは、森山先生の娘さんで、がんコントロール協会の理事になっています。飯塚喬子さんは、フードコーディネーターとして活躍されています。

本書は、3人の共著であり、がんという病気にとって、食事がいかに大切か教えています。食事によっては、がん細胞を抑制することも、逆に増殖させることにもなるのです。その

食事について、その理論と、食べた方がいい食事の献立まで、詳しく解説されています。

もし、がんになるのが怖い方は、一度読まれてはいかがでしょうか？

『俳壇』2023年6月号、本阿弥書店

先日、54ら句会でお世話になりました、幹事の広渡詩乃さんの俳句が、「特集 俳句の新しい風」というところで、8句紹介されています。

6. 宮田 晶子（政経）

『天路の旅人』沢木耕太郎 新潮社

日中戦争下に密偵として内モンゴルから河西回廊を経てチベットを行った日本人、西川一三の旅を辿った物語。ラマ僧に身をやつしての旅のすごさにも驚かされるが、戦後日本に戻って淡々と理容関係の卸業を続け、単調とも言える日々を送った西川の後半生も印象深かった。

7. 前田 由紀（一文）

『音楽は自由にする』坂本龍一、新潮文庫

今月3月、学生時代からずっと注目してきた坂本龍一がこの世を去った。YMOで世界を席巻し、戦メリやラストエンペラーなど多くの映画音楽で魅了し、環境、原発、非戦と社会問題でも積極的に発言した彼の軌跡を、この自伝を読み返すことで辿ることできた。読書家で、「本本堂」という自らの出版社を設立しているのも興味深かった。年齢を重ねながらも常に新しい音楽を追求し、世界の仲間と交流し、自然と対話する姿は、彼の音楽と共に心に染み入るものである。

【参加者】

篠原泰司（一文）、村山豊（一文）、仁多玲子（商）、沖宏志（理工）、石河久美子（一文）、露木肇子（法）、山口伸一（理工）、鈴木伸治（商）、前田由紀（一文）、伊藤聰（法）、斎藤悟（商）、宮田晶子（政経）
(以上 12 名、敬称略)

54 ら会のオンライン読書会、3ヶ月ごとの開催で 12 回目を迎えました。

常連の皆様に加え、初参加の方がお二人。

今回は、歌集が初めて取り上げられたり、常連の皆様もいつもと少し傾向の違った本を紹介されたりで、意外な発見のある面白い会となりました。

以下は当日、挙げていただいた本を発表者のお名前とともに紹介いたします。推しの本について、それぞれ長いコメントをいただきしており、それをそのまま（文体は常体に統一しました）掲載しております（順不同）。

1 篠原泰司さん（一文）**『彼は早稲田で死んだ——大学構内リンチ殺人事件の永遠』 樋田 穀（文藝春秋）**

1972 年 11 月 8 日、早稲田大学文学部キャンパスで川口大三郎君（その当時 20 歳）が革マル派によって殺害された。そして、その直後から革マル派に反対する一般学生の闘いが始まった。この本は川口君事件の真相と、事件後の一般学生たちの闘いの軌跡をたどった本である。

文学部キャンパスの 101 教室や 181 教室（大教室）、そして教わったことのある教授が登場するなど、一文出身の私にとっては本の中の記述はあまりにもリアルであった。在学中から今に至るまで、川口君事件については活動家の起こした事件だろうと思っていたが、事件に一般学生も多く関わっていたことはただ驚きだった。

考えてみれば、その当時親しく話をさせてもらった教授や先輩学生の口からは川口君事件のことを聞いた記憶がまったくない。もちろん事件への関わり合いの濃淡や距離感は様々であったろう。むしろ、関与などは皆無の人がほとんどだったかもしれない。それでも、その当時キャンパスにいた学生は、何らかのものを心に抱かざるをえなかつたはずだ。そして、それはなかなか言い表せることのできる性質のものではなかつたのだろう。

この本を読み終えて、私の学生時代の腑に落ちなかつた部分が鮮明になつたような気持ちになつてゐる。色々な意味で心に沁みる本だった。文学部出身者にはぜひ読んでいただきたい本だ。

2 村山豊さん（法）**① 『習近平独裁は欧米白人を本気で打ち倒す』 副島隆彦（ビジネス社）****② 『習近平独裁 3.0 中國地獄が世界を襲う』 宮崎正弘（徳間書店）**

中国の近未来に関して真っ向から対立する早大 OB 二名の著作を紹介。

副島氏は法学部昭和 52 年卒業。宮崎氏は教育学部昭和 40 年入学、中退。

- ① 副島先輩 経済を犠牲にしても、民主化を後退させても、習近平は西側先進国と闘う戦時体制を固めた。自国に大きな打撃が来ることも覚悟した。米国一強体制は終焉する。中国は勝利し世界の覇権を握るだろう。21世紀は少なくともアジアは中国の支配下に入る。日本はいつまで対米追従を続けるのか。覚醒して中国につけ。
- ② 宮崎先輩 習近平皇帝の独裁体制確立により、外国勢の脱出は加速、経済は衰退し、「中国の夢」などは悪夢で終わる。各国の嫌中意識は高まり、第二次大戦前夜の様にロシアと中国はかつての日独の様に世界から孤立する。一带一路など幻想であり廃墟が延々と続く。日本はいつまで中国幻想にとらわれるのか？覚醒して親中派を排除し、英米印豪とともに中国を包囲せよ。

法学部で学んだ「学説の対立から本質へアプローチする」「通説・判例と少数説・異端説のそれぞれの主張を認識整理することにより、問題点を立体的に理解することができる」。これは法学に限らず社会事象を把握する上でとても有益。

3 仁多玲子さん（商）

『足裏を鍛えれば死ぬまで歩ける』 松尾タカシ（池田書店）

著者の松尾タカシ氏で、ヒップアップ・アーティストで、もともと、お尻を鍛える方が専門だったのが、お尻の持つ「歩く力」を最大限に地面に伝えるためには、足裏の機能も必要と考え、この本を書いたとのこと。いま、私は足が悪く、この本を見て、家の中でできるトレーニングを実践しようと考えている。手軽に家の中でできる運動がいくつか紹介されている。

*皆さんも、もし本屋さんでこの本を見かけることがあれば、ぜひ軽く目をとおしてください。面白い本です。

4 沖 宏志（理工）

『定年オヤジ改造計画』 垣谷美雨（祥伝社）

定年オヤジのバイブルのような本。

日々の生活の中で「お茶を出すのはお前の方だ！」と自らのふるまいを戒めねば。
「配偶者は上司と思え」と肝にめいじるとともに、「一緒に旅行につきあってくれる。」などは、とんでもない天恵と感謝せねば。

また自治体図書館の読書会・読書アプリ・ビブリオバトル等の読書活動について紹介した。

e. x. 読書メーター <https://bookmeter.com/users/1376733>

5 石河久美子さん（一文）

『滑走路』 萩原慎一郎（角川文庫）

歌集としては、異例のベストセラー。「きみのため用意されたる滑走路きみは翼を手にすればいい」は代表的な歌の一つ。著者は早稲田の卒業生でもある。数々の受賞を重ね、期待されながらも夭折。非正

規雇用の日々、心の葛藤、恋や憧れ、未来への不安や希望などが295首に綴られている。学生時代の記憶や感情を呼び起こさせられるものも多く、心に響く歌が沢山あった。

6 露木肇子さん（法）

『すべてのことはメッセージ 小説ユーミン』 山内マリコ（マガジンハウス）

ユーミンは、1954年1月八王子で生まれ、中学から立教女学院に通学し、多摩美大入学後の73年11月にファーストアルバム「ひこうき雲」を出した。この本は、この約20年間を、取材と資料に基づいて綴った小説である。

私はユーミンから3年遅れて、同じ中高に通った。またユーミンの実家の荒井呉服店は、現在の私の生活圏にある。都心から離れたこの土地で育ち、聖歌を歌う学校で学んだユーミンが、なぜ多彩な歌を次々と生み出すことになったのか、この小説を読むとわかる。

特にユーミンが、学校では優等生を演じながら、夜な夜な家の外付けのらせん階段を使って抜け出し、グループサウンズを追っかけていた話は面白い！

読後は、「春よ来い」を口ずさむと浅川の雄大な自然が目に浮かび、「卒業写真」を聞くと、パイプオルガンのある教会での卒業式を思い出すようになった。

7 山口伸一さん（理工）

『われら闇より天を見る』 ク里斯・ウィタカー著、鈴木 恵訳（早川書房）

父親が違う13歳の少女ダッチャス・デイ・ラドリーと6歳の弟ロビンの姉弟。

30年前の不幸な事件により飲んだくれの母親や学校でのイジメや蔑視に耐え、自らを無法者と自覚し、独力で苦境を解決しようとする物語。祖父や警察署長ウォークなど温かな手を差し伸べられて……。第一級の作品。

ゴールドダガー賞受賞、週刊文春ミステリーベスト2022年海外部門第1位など、受賞多数。

8 鈴木伸治さん（商）

『黒石（ヘイシ） 新宿鮫 XII』 大沢在昌（光文社）

この本は、新宿鮫 XII とあるように、新宿鮫シリーズの12作目で昨年11月に出版され、書店で見かけたことから早速購入して読み終えたもの。新作が出るたびに読んでおり、今回も期待を裏切らないものだった。1作目の「新宿鮫」が1991年だから、約30年にわたって続いているシリーズ。

著者の大沢在昌は、1994年の「無間人形（むげんにんぎょう） 新宿鮫 IV」で直木賞を受けている。

主人公は、たった一人で犯罪者に食らいつくことから、「新宿鮫（しんじゅくざめ）」と呼ばれる新宿署の鮫島警部。元キャリアでありながら警察内部の抗争にまきこまれ、単独捜査を余儀なくされた孤高の刑事の闘いが描かれている。

その時々の時代を反映した犯罪が描かれており、今回は柏江市の強盗殺人事件のように、犯罪グループが相互に仲間を知らない、またそのようなことから一般人が仲間になっているというものである。

『ネット興亡記 ①開拓者たち』 杉本貴司（日経ビジネス人文庫）

『ネット興亡記 ②敗れざる者たち』 杉本貴司（日経ビジネス人文庫）

私的な金融商品取引法の勉強会で、ライブドアの風説の流布・偽計や粉飾決算を取り上げることから紹介されて読み始めた本だが、日本におけるインターネットの幕開けから勃興した著名なIT企業の盛衰が生々しく描かれており、大変興味深く読んでいるところ。

特に東証の上場審査においてソフトバンクやNTTドコモなどの上場に関わったことから、ソフトバンクがなぜコンピュータ見本市の会社ジフ・デービスを保有していたのか、NTTドコモがどうやってiモードという画期的なサービスを生み出すことができたのか、といった当時の疑問を解くことができた。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』マックス・ウェーバー著 大塚久雄訳（岩波文庫）

前回ご紹介した「社会思想史の歴史」を読んで、世評に高くいつかは読んでみたいと思っていたこの本を読み始めたことからご紹介したい。

率直に言ってまったく面白くない。論文なの致し方ないのですが、本文が難解な上に本文以上に注が続く。ただ、本の内容ではないが、注に記載されているヨーロッパにおけるキリスト教に関する膨大で多面的な論文や調査の蓄積に圧倒されるとともに、「社会思想史の歴史」やこれまでヨーロッパの本から受けていたヨーロッパにおけるキリスト教の圧倒的な影響を再認識した。

9 前田由紀さん（一文）

『逆ソクラテス』伊坂幸太郎（集英社）

主人公は、小学6年生。だが頗る賢い。大人の否定的な先入観、決めつけを打破するために取った作戦に唸らされる。同調圧力に効く言葉は、「僕は、そうは思わない。」この一言で、状況はガラッと変わる。闘争な議論をする場ができる。また教育期待効果。小学生の頃、「君には、才能がある」と「全然素質がない」と言われた場合との差は、その後とてもなく大きいような気がする。小さな芽吹きを大事に周りの大人们は、育てたい。

『明日の国』パム・ムニヨス・ライアン（静山社）

著者は、メキシコ系アメリカ人。架空の国の村のお話。祖父と父親と暮らし、サッカー選手を夢見る少年は、幼い頃母親がどこかへいなくなってしまう。またその国には、昔から他から戦争や人権侵害から逃ってきた人たちを密かに安全な場所へ案内する守り人伝説があった。その守り人の役割を突然果たすことになる少年は、母親の失踪の謎にも辿り着くことになる。現代でも多くの難民の人たちが存在し、なんとかその窮地を助けようと奔走する人たちもいる。黒人奴隸を助ける地下鉄道運動を思い出す。今、自分にできることは何か。

『有吉佐和子の本棚』有吉佐和子（河出書房新社）

昭和を代表する作家だが、人種差別の問題が広まった昨今著書『非色』が復刊され、時代を先取りして社会問題に鋭く警鐘を鳴らし、今なお色褪せない彼女の作品群が改めて注目されている。戦前小学生時代に外地南方で過ごし文豪の全集を読破し、高校では夏休み研究に100冊の本を読んで読後随筆を書くなど若き日の読書体験が興味深い。彼女の好奇心は、いつも尽きることがなかった。『恍惚の人』も最近再読したが、親の介護をしている身に響いた。

10 宮田晶子（政経）

『起業の天才』大西康之（東洋経済新報社）

リクルート創業者、江副浩正の伝記。

リクルート事件で社会の表舞台からは去り、創業者でありながらリクルートの社史にも登場しないという江副氏の起業家としての凄さをその生い立ちから追った評伝。その先進性、合理性、そしてある種のとんでもなさに驚かされる。著者は、情報を産業とし、Google やアマゾンに匹敵するような事業を構想していたこの稀代の起業家を社会が葬り去ってしまったことについて問うている。3月に映画 Winny が公開されたが共通する問題意識を感じた。

本の紹介はされませんでしたが、ご参加下さった方から次のような感想をいただいています。

伊藤聰さん（法学部）

皆様、ありがとうございました。とてもいい時間でした。

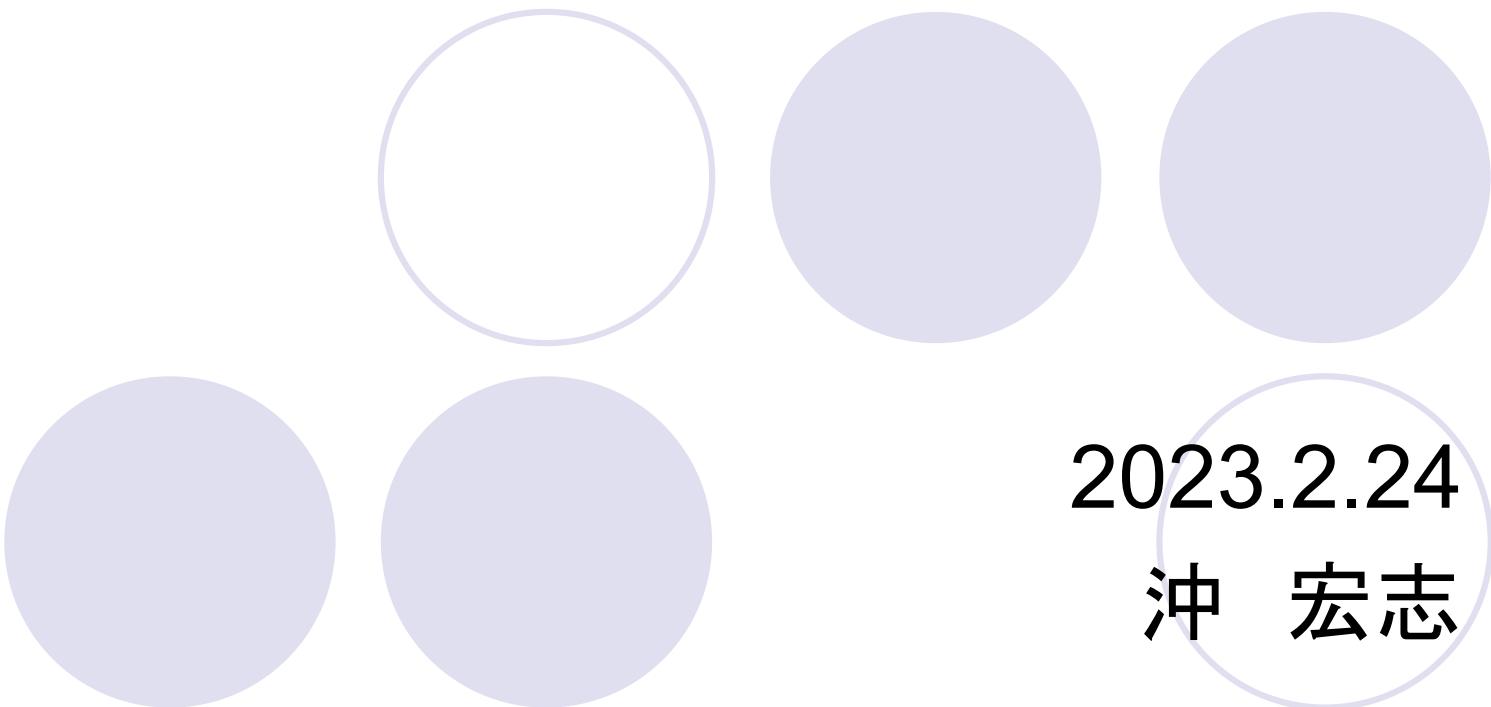
驚いたのは本もさることながら、皆さんの言語化能力（プレゼンテーション能力）のレベルが非常に高かったです。興味のない分野でも読もうかなあ～という気になります。

次回 第13回 54 らオンライン読書会

5月26日（金）19：30より／ホスト 前田由紀さん（一文）

※11月、2月、5月、8月の第4金曜日に開催しています。

本紹介+ちょっとした言いたい事



★第12回オンライン読書会

今回紹介する本

● 垣谷美雨「定年オヤジ改造計画」

妻に避けられ、娘に呆れられ、息子の嫁とはかみ合わず
……女が黙ったときは危険信号! 鈍感すぎる男たち、
変わらなきや長い老後に居場所なし!
定年世代の新バイブル。

大手石油会社を定年退職した庄司常雄。悠々自適の老後を
夢見ていたが、良妻賢母だった妻は「夫源病」を患い、
娘からは「アンタ」呼ばわり。気が付けば、暇と孤独だけが
友達に。そんなある日、共働きの息子夫婦から孫二人の
保育園のお迎えを頼まれ……。

崖っぷちオヤジ、人生初の子守を通じて離婚回避&家族再生に挑む
長寿時代を生き抜くヒントが詰まった「定年小説」の傑作。



● まさにバイブル。

リタイヤ時のパラダイムシフト(言いたい事1)

- パワー・バランスの逆転

- ブレッドウィナー の終焉

- コミュニケーション力/家事能力

お茶を出す
のはお前の
方だ。



- 配偶者は上司と思え！

言ってくれなきや問題(言いたい事2)

「母さんが体調悪いのに、よくも自分のためだけに夕飯を作らせて平気な顔してるなあって人格を疑うところだった。でも知らなかつたんなら許す。」

「母さんもそれならそうと言ってくれればいいじゃないか。」

「はあ。母さんが悪いってこと？」

「そうは言っていない。ただ男ってものは細かいことに気づかない動物だから言ってくれないとわからないんだ。」

「バッカみたい。」



「言ってくれなきや」は禁句。しかしお慈悲を。

感謝が大事(言いたい事3)

- 「一緒に旅行にってくれる。」は信じられないほどの幸運。



- 有り難い事

「読書」アクティビティ

- **読書会**

地域の読書会

**自治体が読書会用の本を用意。
同じ本を読んで意見交換。**

「みささ読書会」

率直な感想がいつも聞けて楽しい会です。
一度、のぞいてみませんか。

- 活動日時：第3月曜日 10:00～12:00
- 活動内容：図書館で借りた同じ本での読書会
- 会 費：300 円/月
- 対 象：読書が好きな方ならどなたでも
- 講 師：年に 1, 2 回講師を招きます。

- **読書アプリ**

読んだ本の整理。

書評の発信と受信。

読んだ本のクロスリファレンスも。

E.x. 読書メーター

- **ビブリオバトル**

本を紹介するコミュニケーション-ゲーム。 参加者がそれぞれ自分が読んで面白いと思った本について紹介し、参加者全員でディスカッションする。参加者全員の本の紹介とディスカッションが終わった後、一番読みたいと思った本(チャンプ本)を投票で決める。[2007年(平成19), 京都大学の研究室で谷口忠大によって考案された]

今回は、混迷を極める世相を反映して、主に全体主義や社会思想、安全保障の自衛大学校、ウクライナの歴史を振り返る社会科学系本が紹介された。他には、独学のススメ、アメリカの人気作品、沖縄レシピ本、芸術品のような絵本、時代小説と多彩な本について語られた。通常より少ない人数となったが、全員の参加者にゆったりお話をいただける読書会となった。

参加者の皆さんには、ご覧の通りです。（発表順）

沖宏志さん、篠原泰司さん、仁多玲子さん、鈴木伸治さん、高平潔さん、露木筆子さん、宮田晶子さん、前田由紀の8名

全体主義の受け入れてしまう大衆（沖）⇒独学のススメ・自然描写の美しいアメリカベストセラー（篠原）⇒沖縄料理の醍醐味（仁多）⇒社会思想の歴史を振り返る（鈴木）⇒初参加今回は視聴のみ。ラグビー部出身（高平）⇒絵本の色彩の素晴らしさ（露木）⇒国の安全保障を担うエリートたちの防衛大学校（宮田）⇒ウクライナ侵攻から露呈する様々な問題提起と高3生による京都文学賞受賞作品である瑞々しい時代小説（前田）

1. 沖 宏志（理工）

『悪と全体主義』 仲正昌樹（NHK出版新書）

主にナチスを題材として、全体主義がどのように育ち、どのように災いを人類にもたらしたかのハンナ・アーレントの主張を解説した本である。全体主義を受入れてしまう悪い意味での「大衆」を問題としている。最近、一連のトランプ本やプーチン本を読んでいて、全体主義は今、目の前のある脅威で他人事ではないと感じる今日この頃である。

悪い意味での「大衆」を説得するのは言わずもがな、自分自身が全体主義の手法にたぶらかされないのですら、おそらく思っている以上にずっと難しい。なんせ、こんな本を書いている人が統一教会に入っていたわけだから。

2. 篠原 泰司（一文）

『独学の教室』 読書猿、吉田武、ウスピ・サコ他、インターナショナル新書107、集英社

独学（独りで学ぶこと）の魅力、意義、そしてその方法を探った本。英語、美術、読書、ノート術、漫画、数学、物理学はては冒険まで、14人の独学者による多彩なジャンルに関する寄稿がまとめられている。それぞれの寄稿が15~18ページと短く、通勤電車の中で一つの寄稿を読み終えることも可能。興味のあるジャンルや気になる寄稿者の文章から読ん

でみれば、これから的人生を豊かにしてくれることは間違いないことだと思う。

『ザリガニの鳴くところ』ディーリア・オーエンズ、友廣純訳、早川書房

この読書会でも、すでに何名かの人が推薦していた「ザリガニの鳴くところ」だが、私自身興味を持ち本(原書も)も購入していたが、2年間読まずに積んでおく状態にしていた。ところが、2022年11月18日に映画が公開されるという情報を得て急遽読み始め、映画公開の日時に合わせて読み終えた次第だ。

11月24日には映画を鑑賞してきた。予想していたことだが、原作の内容を2時間の上映時間の枠に収めることには無理があり、内容的には物足りなさや消化不良の感は否めなかった。できれば一話が1時間の枠で10話ぐらいのテレビドラマシリーズにしてほしかった。それでも、さすがに映画であって、自然や人物の描写には大画面の映画ならではの深さや美しさを感じた。この「ザリガニの鳴くところ」という小説の本当の面白さを知るには、やはり小説を読むべきである。

3. 仁多 玲子(商)

『NHK連続テレビ小説 ちむどんどんレシピブック』オカズデザイン、NHK出版

今回、私は、NHKの朝ドラだった「ちむどんどん」のドラマの中で使われた沖縄料理の作り方を教えた本を皆さんに紹介した。ネットで見つけて、面白そうなので、1冊購入した。

有名な、ゴーヤチャンプルーはもちろんのこと、ラフテー、ゆし豆腐、にんじんしりしり一等、沖縄料理は、本当にヘルシーで、作り方も簡単。とりあえず、私は、ゴーヤを買ってきて、ゴーヤチャンプルーを作り、とても、美味しかったです。

皆さんも、沖縄料理にご興味のある方は、ぜひ一冊買って、ご家族に食べさせてください。

4. 鈴木 伸治(商)

『社会思想の歴史 マキアヴェリからロールズまで』坂本達哉、名古屋大学出版会

ソ連の崩壊からロシアのウクライナ侵攻、中国の社会主义市場経済の進展から米中対立、米国の経済成長の中でのトランプ旋風から国内の分断、EU拡大の一方でのブレグジットなど、最近の世界は、これまでになく政治や経済に不安定な状況が生まれつつある。

その背景を知る上での一助となる本がないかと探した結果、見つけて現在読んでいる本が今回ご紹介する本。本書は、ルネサンス、宗教改革からソ連・東欧の社会主义体制の崩壊まで、西欧近代500年間の社会思想の歩みが概観されている。そして、現代人の課題で

もある議会制民主主義と資本主義を基盤とする社会における諸問題を取り組んだ歴史が描かれている。

5. 高平 潔（法）視聴

本日は、初参加受入頂き有難うございました。本日は、視聴のみの参加となりましたが、大変な刺激となりました。皆様の興味の広さと博識の深さに触発されました。学生時代（ラグビー部在籍）に、ボールを蹴ったのと同じ位頭を蹴られているので正常な作動に自信がありませんが、皆様と読書を通した認識交換出来ればサンデー毎日となった私には最高の機会です。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

6. 露木 筆子（法）

絵本『スイッショねこ』文/大佛次郎 絵/朝倉摂 青幻社

絵本を収集して45年になる。集める基準は色の美しさである。その中で最近感動したのがこの絵本だ。朝倉さんは日本画家・舞台芸術家で1922年生まれ。今年は生誕100年なので、70年代発行されたこの絵本が復刊されたようだ。子猫の愛らしい童話は、鮮やかな色の魔力で、幻想物語に変わっていて、読む人を圧倒する。

絵本『カッコウが鳴く日』『わたしの好きな場所』『秋は林をぬけて』小泉るみ子作・絵
ポプラ社

作者は1950年北海道生まれ、早稲田の文学部を卒業してから絵本作家としてデビューした。たくさんの絵本を出しているが、紹介するのは、北海道の四季を、厳しさを含めた深味のある色彩で見事に表現した、画集のような絵本だ。その他民話を題材にした絵本も魅力的だ。

7. 宮田 晶子（政経）

『防衛大学校-知られざる学び舎の実像』國分良成（第9代防衛大学校長）、中央公論新社

世界情勢が不安定な中、防衛費増額が検討され、自衛隊への注目も高まっている昨今、自衛隊幹部を養成する防衛大学校に興味を持った。朝6時にラップで起床、勉学に加えて訓練に勤しみ、外出もなかなか自由にできないという防衛大学校生の生活は、現代の若

者のそれとはかけ離れている。ここに入学し、将来の自衛官を目指す方達（並びに送り出す親御さんも）の覚悟は大変なものだと思った。学校の歴史などの記述も興味深かった。

8. 前田 由紀（一文）

『中学生から知りたいウクライナのこと』 小山哲・藤原辰史、ミシマ社

京都大学のポーランド史と食と農の現代史が専門の歴史学者が、「中学生に立ち返って、大人の認識を鍛え直す」という意味を込めて執筆した書。歴史が繰り返されるのは、忘却にあり、歴史学者の資格は、「忘れない執念」であるという。ウクライナ侵攻による、①国際法違反での国連の限界、②ロシアの人々や文化の排除、差別の危険性、③NATO とロシアの善悪二元論の危うさ、④大国によって分裂と統合を繰り返してきたウクライナの歴史、⑤情報戦の国際報道の偏り、⑥日本の中立のあり方など多くのことを考える機会となった。

『ちとせ』 高野知宙、祥伝社

京都文学賞受賞作品。高3生による時代小説。時は、明治初期。幕末から変わりゆく京都を背景に、病により徐々に視力を失っていく孤高の少女が三味線を必死に修行し、周りの温かい人たちに支えられ成長していく青春小説。車屋の御曹司との淡い恋模様も切なく、瑞々しい。将来の不安、失望を抱える思春期から凜として自立して「闇に浮かぶ浄土」への境地に立つ過程の描写が同年代でもある著者と時代を超えてリンクして実にリアルである。

第 10 回 夏 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会
2022. 08. 26

【参加者】

篠原泰司（一文）、首藤典子（一文）、斎藤 悟（商）、鈴木伸治（商）、露木肇子（法）、中村敏昭（理工）、仁多玲子（商）、日比野悦久（理工）、福島 碧（社学）、前田由紀（一文）、宮田晶子（政経）
(以上 11 名、一部参加の方も含む)

54 ら会のオンライン読書会、回を重ねて 10 回目を迎えました。

常連の皆様に加え、初参加の方が 3 人いらっしゃいました。

今回は、本の紹介自体は少なめでしたが、イチエフ（福島第一原子力発電所）の視察に絡めた本の紹介などもあって、いつもと少し違った趣の会となりました。

以下は当日、挙げていただいた本を発表者のお名前とともに紹介いたします。推しの本について、それぞれ長いコメントをいただきしており、それをそのまま（文体は常体に統一しました）掲載しております（順不同）。

1 中村敏昭さん（理工）

2022 年 1 月 21 日に、イチエフ（福島第一原子力発電所）を視察する機会を得た。この視察をめぐって出会った 3 冊の映画と 1 本の映画を紹介する。

『Fukushima 50』

2021 年 3 月 6 日に公開された、福島第一原子力発電所事故発生時に発電所に留まって事故対応業務に従事した約 50 名の作業員（通称「フクシマ 50」）の闘いを描いた映画。主演は渡辺謙、佐藤浩市、監督は若松節朗。視察の準備として震災から 10 年後の 3 月 11 日に『Fukushima 50』を鑑賞していた。

『廃炉：「敗北の現場」で働く誇り』 稲泉 連（新潮社）

イチエフの案内役は、経産省資源エネルギー庁で廃炉汚染水対策を担う木野正登さん（木野さんとは会社の OB である M 氏との縁で知り合った）。昭和 54 年生まれで第二文学部卒業の飯泉連氏は、この本の第 1 章には「福島に留まり続けるある官僚の決意」として木野さんとの出会いやエピソードを記している。人事異動希望書には「一生、福島においてください」と書き、国側の広報的立場として、行政が開催する地元への説明役を引き受け、企業原発事故に関心を持つ人を対象に、原発構内や被災地を巡る活動をしている。「霞が関から絶対に見えないもの」をたくさん見ている人。

『福島のことなんて、誰もしらねえじゃねかよ』 カンニング竹山（ベストセラーズ）

M 氏は福島に本店を置く S 工業に出向したのだが、新幹線の駅で手にした同書に紹介されている「あねさの小法師」という飲み屋の常連となり、そこで木野氏と知り合ったのだそう。カンニング竹山氏は東日本大震災以降、プライベートで何度も福島に入り、たくさんの被災者とも話を交わしてきた。本書は彼の目を通した率直な福島について綴っている。視察後「あねさの小法師」に行ったら、なんと福島テ

レビのロケで当のカンニング竹山氏が来店。幹事長の名刺を渡し、54 ら会の活動紹介もしておいた。

『緊縛』 小川内初枝（筑摩書房）

何ともすごいタイトルだが、2002 年の太宰治賞受賞作。M 氏より、この小説のモデルが会社の元社員 O 氏（一時 PJ で私の下につく）であることを知り、図書館から借りて読む。彼の性癖を垣間見た。

* 本の紹介もさることながら、イチエフ視察の様子も詳細にお話しいただき、興味深かったです。

2 篠原泰司さん（文）

『美は乱調にあり—伊藤野枝と大杉栄』瀬戸内寂聴（岩波現代文庫）

瀬戸内寂聴 4 3 歳から 5 7 歳の間に書かれた作品で、アナキスト大杉栄と「青踏」の編集者伊東野枝を中心に描かれた群像劇的伝記小説。大杉栄が四角関係の末に神近市子に刺される（日陰茶屋事件）までが「美は乱調にあり」。そして、憲兵大尉の甘粕正彦によって大杉栄、伊藤野枝とその甥橘宗一が虐殺される（甘粕事件）までが「諧調は偽りなり」。「美は乱調にあり」と「諧調は偽りなり」の間には実際に 14 年のブランクがある。

97 歳の 2017 年に刊行された文庫版のまえがきに「自分の作品の中で若い人にもっとも読んでもらいたい作品だ」と寂聴は書き、また、その最後に「この小説を書いて、「青春は恋と革命だ」という考えが私の内にしっかりと根を下した。」と書いた。

結末に近づくにつれ後日談が知りたくなり、読み終えるのが惜しくなる小説だった。

3 露木肇子さん（法）

『紙の動物園』ケン・リュウ（ハヤカワ文庫）

中国出身でアメリカで活躍する S F 作家の短編集である。どの短編も読み応えがあるが、特に書名となった「紙の動物園」は感動せずにはいられない。

アメリカ人と結婚した中国人の母親は私達と同世代の 1957 年生まれ。息子に折り紙で動物を折り、息を吹き込むと動物は動き出す……。

短い展開の中で登場人物の思いが胸に刺さり、あまりの切なさで苦しくなる。

S F の世界的な賞 3 冠に輝く傑作である。

『円』劉慈欣（早川書房）

これも中国の S F 作家の短編集である。

その中の「栄光と夢」を是非読んでほしい。

アメリカとシア共和国は戦争中で、シアは経済制裁を受けて国民は飢えで苦しんでいる。そんな中戦争に決着をつけるため、北京オリンピックを変更し、アメリカとシアの 2ヶ国だけのオリンピックとして、勝った方を戦勝国とすることになった。負けても金メダルの数の分恩恵が与えられる。飢えでま

ともに練習もできなかったマラソン選手の少女シニは、アメリカの最強女性ランナーに戦いを挑む……。

他にも奇想天外かつ風刺的な短編がつまた才氣あふれる一冊である。

4 首藤典子さん（一文）

『長い道』柏原兵三（小学館）

1968年、『徳山道助の帰郷』で第58回芥川賞受賞、著者の祖父日中戦争時代の陸軍中将伊東政喜がモデルになっており、その伊東中将の妹の嫁ぎ先が首藤であるという縁繋がりの作家。『長い道』は後に『少年時代』の作品名で藤子不二雄A氏により漫画化、山田太一氏脚本で映画化されている。内容としては、主人公の少年が戦禍を逃れ疎開先で、地元の少年達の輪に入ることが出来ず、悩みもがく日々。唯一の味方と思っていた地元のリーダー格の少年が実は首謀者であったが、この悩める日々との決別は、終戦と共に東京へ戻ることによって訪れたところで終っている。小学校高学年の主人公が同じ通学路で登校する少年達の輪に入れず涙する様子、また疎開先の祖母の家の暮らしや学校の様子、東京に残った家族から送られてくる本、甘菓子、絵具を家に訪ねてくる少年に与えたりして何とかつながろうとする少年の姿がいじらしく描かれている。

『小説 8050』林真理子（新潮社）

引きこもり100万人の時代、避けては通れない事象の為読んでみたかった作品。引きこもってしまったらもう誰とも話をしようとはしないが、なんとかその原因を知らなければ解決の糸口がつかめない。色々と相談したり、実際に行動を起こしたりするのは引きこもった人間ではなく親であると示唆されている気がする。「8050」では父親が引きこもりの原因を、当時の息子の友人に会っていじめがあったことを聞き出し、母親は旧友に相談していたことから、この件で訴訟を請け負ってくれる弁護士を紹介してもらう。この弁護士との出会いが運をもたらすが、過去の息子の友人が実際にここまで協力してくれるかは難しいのでは。

5 鈴木伸治さん（商）

『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』新井潤美（白水社）

イギリスの小説を読んだり、映画やTVドラマを観たりしていると、爵位のある貴族や「ジェントリ」と呼ばれる地主を含む上流階級の人物が登場して独特の存在として描かれているが、その独自性の背景を理解することは難しいものである。

日経新聞の書評欄で、この本を「彼らは実際、その社会・文化の中でどのように形づくられ、語られてきただろう。私たちが抱く華やかなイメージのどこまでが真実だろう。そんな疑問が氷解する一冊である」と紹介していたことから読んだのだが、この本はそのような本。

『アメリカの病 パンデミックが暴く自由と連帯の危機』ティモシー・スナイダー／池田年穂訳（慶應義塾出版会）

前記の書評欄の同一紙面に、「世界一の超大国アメリカで、コロナウイルスの犠牲者が最も多いのはなぜか。医療ミスにより、生死の淵を彷徨う中で、コロナ禍に遭遇した著者による病床からの緊急レポート！」から興味を持って読んだ本。

アメリカの医療システムや公衆衛生の脆弱さ、人権問題、そして「自由」の真の意味での復活と個人の

健康とのかかわり、孤独と連帯の相補についての考察を深め、トランプを頂点とするアメリカの権威主義体制や医療の世界にも及んでいる経済寡占についての批判を展開している。

個人的には若い頃に読んで強い印象が残っている『自由からの逃走』(エーリッヒ・フロム著／日高六郎訳)に匹敵する本で、多くの方にも是非読んでいただきたい。

『決戦！株主総会 ドキュメント LIXIL 死闘の8ヶ月』秋葉大輔（文藝春秋）

日本の上場会社の中には、わずかばかりの株式しか保有していない創業家出身者などが圧倒的な力を握り、自分の思うままに経営するケースが少なからずある。

このため、そのような創業家出身者などがわざわざ外から招いたプロの経営者を追い出すという事例は散見され、これまでそのまま収まるのが普通だった。

この本では、追い出されたプロ経営者が泣き寝入りせずに戦いを挑み、勝つことはほとんど不可能といわれる株主総会で勝利を収めたことが記録されている。

この事例をもとに、コーポレートガバナンス（企業統治）の良し悪しを判断することは全くできないが、それが如何に難しいことであるかは窺い知ることができるのではないかと思う。

6 前田由紀さん（一文）

『教え学ぶ技術——問い合わせをいかに編集するか』 荻谷剛彦／石澤麻子（ちくま新書）

「高校の論文指導に携わっているが、生徒が自分の問い合わせに辿り着くまでが一番難しい。自分にとって切実な問題とは何か。この本は、オックスフォード大学でのチュートリアルという論文の個別指導について解説している。What do you study? の意味で What do you read? と問うオックスフォードの教育。常日頃から何か引っかかるなどを、すぐにメモ帳に書き留めておくと、日常が面白くなる気がしてきた。

7 宮田晶子（政経）

『映画を早送りで観る人たち』 稲田豊史（光文社新書）

映画や映像を早送りで観る人たちが増えているという。ネットには、ファスト映画やネタバレサイトが溢れ、少なくとも粗筋や内容は簡単に掴める時代だ。しかし、それで作品を味わうことになるのだろうか？こうした疑問から出発した本書は、現代社会が抱える問題にまで踏み込む。SNSの発達による同調圧力（みんなの話題にはとにかくついていかねばならない）、個性がもて囁かれる故に細かいことで取り敢えず知つておきたい、また回り道と失敗をとにかく避けたい、という気持ち。これらが（特に若い人たちを）倍速視聴に駆り立てている。便利になったけど、余裕がない世の中になっているのを実感（これは日本の国力とも関係あり？）映画や映像はもはや鑑賞されるものではなく、消費されるものようだ。

次回 第11回 54 らオンライン読書会

11月25日（金）19:30より／ホスト 前田由紀さん（一文）

※11月、2月、5月、8月の第4金曜日に開催しています。

今回も参加者の皆さんとの読書への情熱をひしひしと感じるひとときとなりました。

参加者の皆さん、ご覧の通りです。(発表順)

村山さん、仁多さん、沖さん、篠原さん、福島さん、山口伸一さん、露木さん、鈴木伸治さん、益田あけみさん(視聴)、宮田さん、前田 11名

世界の視点による明治維新(村山) ⇒ 養生訓・スパイス(仁多) ⇒ 極上スパイス(宮田)
 ⇒ イエール大学の死生觀講義(沖) ⇒ 全体主義の起源・養老孟司・メタ自己啓発(篠原)
 ⇒ フリーメーソン・お城めぐり(福島) ⇒ 水戸黄門の歴史的意義・Audio Book ⇒ 文化人類学者のファンタジー(露木) ⇒ 文学史における意識の流れ小説の意義(鈴木) ⇒ 須賀敦子作品(宮田) ⇒ バカラレアの哲学・不便宜のすすめ(前田)

1. 村山 豊 (法)

◎『官賊と幕臣たち』	原田 伊織
◎『明治維新の大嘘 司馬遼太郎の日本史の罫』	三橋 貴明
○『明治維新の光と影』	西原 春夫
△『逆説の日本史』 18-21 の 4巻	井沢 元彦
△『明治維新とは何だったのか 世界史から考える』	半藤 一利 出口 治明対談
△『書き換えられた明治維新の真実』	榎原 英輔
×『明治維新とは何だったのか』	一坂 太郎
×『明治維新という過ち』	原田 伊織
×『幕末の大誤解』	熊谷 充晃
×『微笑む慶喜』	戸張 裕子
×『嘘だらけの日英近現代史』	倉山 満

上記「明治維新」関連の全 14 冊を読了して○△×の評価を付けた。従来の「薩長史觀」すなわち明治政府の文部省が脈々と国民に伝えてきた「明治維新は薩摩藩長州藩を中心とする理想に燃えた下級武士の若者たちが近代国家を作り上げた物語」を脱却して、欧米列強とくに英國が薩長を、フランスが幕府をバックアップした内戦であったという視点がなければ理解できないということだ。

一級の一次資料が次々とみつかり日本史は古代史から近現代史に至るまで次々に書き換

えられている。考えてみれば、一定の職を持たず脱藩した若者（典型例「坂本竜馬」）が日本全国を飛び回り活動していた資金は一体だれが供給したのか。（答えは大英帝国スponサー）江戸を目前にした東征軍が総攻撃直前で突如停戦に応じた理由（英國パークス公使の恫喝的停戦斡旋 勝西郷会談など後付けの形式）は大英帝国の立場になれば簡単に理解推定が可能だが、エビデンスがないという理由で歴史学会は退讐していたというわけである。

2. 仁多 玲子（商）

『わがまま養生訓』 薬剤師・日本漢方養生学協会理事長 鈴木養平、薬日本堂 監修

貝原益軒は、江戸時代の儒学者で、また本草学者であるが、有名な著書に『養生訓』がある。『養生訓』は、日々の生活習慣を、健康法だけでなく、生き方まで言及しているというので、当時ベストセラーになった。今回紹介した『わがまま養生訓』は、忙しすぎて、自分を後回しにしている人に、著者の鈴木養平氏が、独自にポイントをピックアップして漢方の解説を交えながら伝えた本である。私は、この本に、とても感銘を受けた。自分のペースを大事にすることの大切さを感じた。皆さんにも、お勧めの本。

3. 沖 宏志（理工）

『死とは何か』 シェリー・ケイガン、文響社

「死」というものを宗教的にではなく、論理的に追求した本。「死」というものを語るには、「私」「同一性」「時間（今）」「神」「意識（言語）」「魂」といったものを確定しなければならないが、これらは簡単に確定できるようなものではない。そこで、様々な思考実験を展開して考えさせる。AI が出てきて、「私」「同一性」「意識（言語）」といったものも、より身近で具体的な問題になってきたような気がする。

4. 篠原 泰司（一文）

『ヒトの壁』 養老猛、新潮選書

猛さんの「壁」シリーズの最新刊。これまでの「壁」に負けず劣らずの味わいのある本である。初めは科学哲学的な内容に難解さを感じたが、途中からどんどん引き込まれた。多田道雄（免疫学者）、加藤典洋（文藝評論家）らとの交流。そしてご自身の母と兄のことなど。これらの部分は特に面白く読むことができた。心に染み込んでくるような内容の濃さと深さのある一冊である。

『なんでも見つかる夜にこころだけが見つからない』 東畑開人、新潮社

これまで出版されてきた自己啓発本や生き方エッセイなどとは一線を画する、まさに「メタ自己啓発本」（P276）に相応しい一冊。本書の狙いは、わかりやすい解決法をノウハウとして提示することよりも、病んだ自己の心の捉え方を今までにない手法で示すこと。その手法が、処方箋ではなく補助線。「シェアとナイショ」、「スッキリとモヤモヤ」、「ポジティ

ブとネガティブ」、「純粋と不純」の補助線の先に現れる患者たちの心の有り様は本当にリアリティーに溢れしており、資本主義の真っ只中を漂う私たちにとっても一読の価値のある本だと思う。

★難解なので正式には紹介しなかったのですが、ハンナ・アーレントの『人間の条件』(ちくま学芸文庫)と『全体主義の起源』(みすず書房 全三巻)も読書会のメンバーにはインパクトが強かつたようだ。

5. 福島 碧 (社学)

『フリーメーソン源流紀行-歴史の源流・古代地母神信仰』清川理一郎著

『キリストと黒いマリアの謎-異端・自由思想・ラテン系フリーメーソン』清川理一郎著

大学の先輩が著者。隠れた人気がある著者であり、書物である。過去に映画化された。丁度この2月にロシアのウクライナへの侵攻が始まった頃に読み始めたが、これを読むとプーチンは負けると確信した。林董(ただす)氏の名前も、久しぶりにこの本で拝見した。

『収容所から来た遺書』辺見じゅん著

以前読書会で紹介いただいた本。衝撃的だった。このところピアノソナタをよく聞くのだが、シューベルトのピアノソナタ D899&D935、ベートーヴェンのピアノソナタ 24-27、30-32を聴くと必ずこの本の山本幡男氏とシベリアの大地に思いを馳せてしまう。

『源頼朝』1-3巻 山岡荘八著

以前から好きな偉人の生家や住んでいた家をよく訪ねてきた。例えば、ショパンの生家、モネの住んでいた家等。最近は、読んだ歴史書の登場人物に共感すると、そのゆかりのお城を訪ねている。最近は、徳川家康の生まれたお城の岡崎城を訪ねた。次は、小田原城を訪ねたいと思い、この本を読んだ。源頼朝の生が、本当に奇跡のようなもので、また頼朝が20年も忍耐したことに感動を覚えた。

『織田信長』1-5巻 山岡荘八著

お城巡りで、いつか安土城跡を訪ねようかと思い、この本を読んだ。だが、信長の明智光秀へのパワハラがひどく、多分この本に書かれていないパワハラも沢山あるのではないかと想像され、結果安土城探訪は遠のいてしまった。

6. 山口 伸一（理工）

『光圀伝』 沖方 丁（うぶかた とう）早稲田大学第一文学部中退。

徳川家康の孫、光圀は水戸黄門として知られるが、彼は悪徳商人退治ではなく、大きく政治に関わっていた。水戸藩を納めるだけではなく、江戸を焼き尽くした大火や疫病への対応や、将軍の後継問題など幕政にも腐心していた姿を描く。「天地明察」をしのぐ傑作。

『国宝』 吉田修一 オーディブル 語り 尾上 菊之助

ヤクザの息子が歌舞伎の国宝まで上り詰める物語。フィクションだが昭和から平成までの梨園が舞台で、家柄や襲名問題、不倫、バブルの借金、ワイドショーの攻撃など、上下2

冊の長編とは感じない面白さ。菊之助の語りも歌舞伎の場面での迫力は流石。新たな読書の体験が楽しめた。

7. 露木 肇子（法）

『香君』 上下 上橋菜穂子、文藝春秋

作者は「精霊の守り人」等守り人シリーズで著名な児童文学者で、国際アンデルセン賞をはじめとする数々の賞を受賞している。文化人類学者でもあって、人類社会の専門知識が作品に活かされている。「精霊の守り人」はNHKでドラマ化され、「獣の奏者」は同じくNHKでアニメ化されていて、いずれも絶大な人気を誇っている。「香君」はその作者の最新作で、この3月に上下2巻同時発行された。

今回の作品も、今迄と共に特徴を有している。まず舞台は地球のどこかだが、大陸あり海あり島ありで、そこに住む人種は様々で、文化・言葉もいろいろである。時代は中世のようで、移動手段は馬や船である。帝国と属国があり、支配者の多くは男性である。その中で異才を有する女の子が人命を助ける活躍をしながら成長していく。また、ファンタジーながらの、この世ではない別の世界と接している場所があって、まれに行き来がある。物語のテーマは、権力とは、支配とは、正義とはというもので、必ず正義が勝つので胸がすく。お孫さんがいれば是非プレゼントしてほしいファンタジー作品である。

8. 鈴木 伸治（商）

『ダロウェイ夫人』 バージニア・ウルフ、土屋政雄訳、光文社古典新訳文庫

この小説は、保守党国會議員の中年の妻クラリッサ・ダロウェイ夫人が政治家を招くパーティを開催する1日を描いているが、そこでは大した事は起こらず、ダロウェイ夫人ともう一人の主人公であるセプティマスの現在と過去の思い（「意識」）を中心に、二人を取り巻く人々の同じく意識が時の流れに従って淡々と綴られている。このため、ダロウェイ夫人の過去の恋愛とセプティマスの第一次世界大戦の後遺症は分かるのだが、それ以上の

ことが分からぬというのが当時の印象だった。

『若い読者のための文学史』 ジョン・サザーランド、河合祥一郎訳、すばる舎

これまででしたら、そのままなのですが、今回は『ダロウェイ夫人』の何が評価されているのか理解するため、次の本を読んでみた。この本の中で、バージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』は「意識の流れ」という技法をウルフが最も巧みに用いた作品として紹介されている。そして、ジェイムズ・ジョイスの小説『ユリシーズ』の最終部分の「何ページにもわたって句読点のない」文章について、それが「一種の『意識の流れ』であり、私たちが本当に生きている場所とは、自分の心の中であると、ジョイスの小説は主張している」と指摘している。日々の自分を振り返ってみて、いかに多くの時間を「意識の流れ」の中で過ごしているか、『ダロウェイ夫人』は、そのようなことを強く認識させてくれた本である。

また、『若い読者のための文学史』は、そればかりか、カバーに記載されているように、「なぜ私たちはここにいて、どう生きればいいのか。あらゆる文学が、作家が見出した真実を答えとして提示する。本書では、社会に衝撃を与え、商業的に成功し、後世の書籍に残った魅力的な作品を、たっぷりの情報とともに面白く語り尽く」している本である。この本は、ウィリアム・H. マクニール著『世界史』を読んだ際の興奮に似たものを感じさせてくれた。

9. 宮田 晶子（政経）

『コルシア書店の仲間たち』 須賀敦子／白水Uブックス

『ミラノ 霧の風景』 須賀敦子／白水Uブックス

どちらも、1960年から十数年ミラノに住み、カトリック左派が拠点とする書店「コルシア・ディ・セルヴィ書店」と関わった須賀敦子さんのエッセイ集。ミラノをはじめ、各地で出会った多くの人々を通じてイタリアの思い出を綴っている。彼女の見る目の確かさと、とても練られた文章によって、どんな思い出が語られても、その光景やその人物の人となりが鮮やかに思い浮かぶ。

10. 前田 由紀（一文）

『バカラアの哲学 「思考の型」で自ら考え、書く』 坂本尚志、日本実業出版社

フランスの高校生は、哲学が必修で、卒業試験で一つの哲学的問いに対して答える4時間の筆記試験がある。抽象的な命題に対して、導入⇒展開⇒結論という流れの中に、抽象的な言葉の定義、自分の論の反対意見を尊重するなど書き方の実践を公開している。

『不便宜のススメ 新しいデザインを求めて』 川上浩司、岩波書店

技術は、生活をより便利にするために進歩してきた。しかしこれからの未来、この便利

さを追求するあまり失ってしまう価値もあるのではないか、あえて手間をかけることで、新しい価値、発想、アイデアが生まれることを示唆してくれる。不便さを自ら取捨選択し主体的に生きる。素数しか目盛りのないものさし、消えていくナビ、その店限定京土産など開発した京都大学情報学研究者からの新鮮かつ貴重な提案である。

「ヒトの壁」 養老猛 新潮選書

猛さんの「壁」シリーズの最新刊。これまでの「壁」に負けず劣らずの味わいのある本です。

初めは科学哲学的な内容に難解さを感じましたが、途中からどんどん引き込まれました。多田道雄（免疫学者）、加藤典洋（文藝評論家）らとの交流。そしてご自身の母と兄のことなど。これらの部分は特に面白く読むことができました。心に染み込んでくるような内容の濃さと深さのある一冊で、お勧めです。

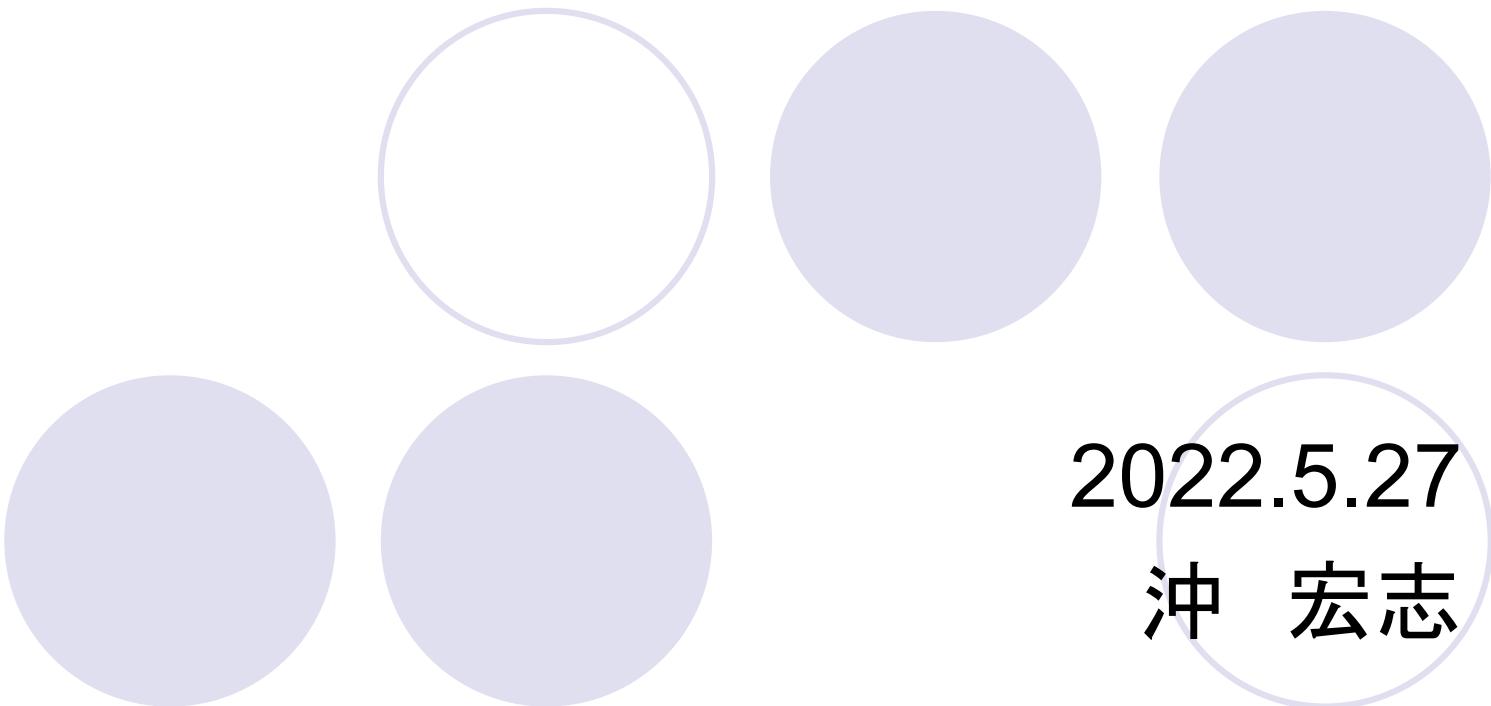
「なんでも見つかる夜にこころだけが見つからない」 東畑開人 新潮社

これまで出版してきた自己啓発本や生き方エッセイなどとは一線を画する、まさに「メタ自己啓発本」（P276）に相応しい一冊。

本書の狙いは、わかりやすい解決法をノウハウとして提示することよりも、病んだ自己の心の捉え方を今までにない手法で示すこと。その手法が、処方箋ではなく補助線。「シェアとナイショ」、「スッキリとモヤモヤ」、「ポジティブとネガティブ」、「純粹と不純」の補助線の先に現れる患者たちの心の有り様は本当にリアリティーに溢れしており、資本主義の真っ只中を漂う私たちにとっても一読の価値のある本だと思う。

★難解なので正式には紹介しなかったのですが、ハンナ・アーレントの「人間の条件」（ちくま学芸文庫）と「全体主義の起源」（みすず書房 全三巻）も読書会のメンバーにはインパクトが強かったようです。

本紹介+ちょっとした言いたい事



★第9回オンライン読書会

自己紹介

- 1975年4月早稲田大学理工学部機械工学科入学。
 - はじめて広島から東京に出てくる。(カープ初優勝の年)
- サークル
 - 剣道同好会
 - 理工テニス部(1年の時だけ)
 - 味覚嗜好研究会
- 当時の住まい:和敬塾
- 研究室:加藤一郎研究室(WABOT)
- 1979年4月富士通株式会社入社(川崎工場)
 - 通信部門/NiftyServeの部門/FMVの部門を渡り歩く
 - 早稲田HP(HomeParty)/Patioのようなネットライフも
- 2016年に定年再雇用で出身地の広島にUターン。(カープ25年ぶり優勝)
- 2021年12月に富士通の定年再雇用終了。
- 関東経済産業局のマネジメントセンターに登録。
- 現在、広島にて週2~3回テニス、週1~2回囲碁のコミュニティで活動中。
また毎週土曜日の夜、中国語翻訳家のコミュニティで中国語学習中

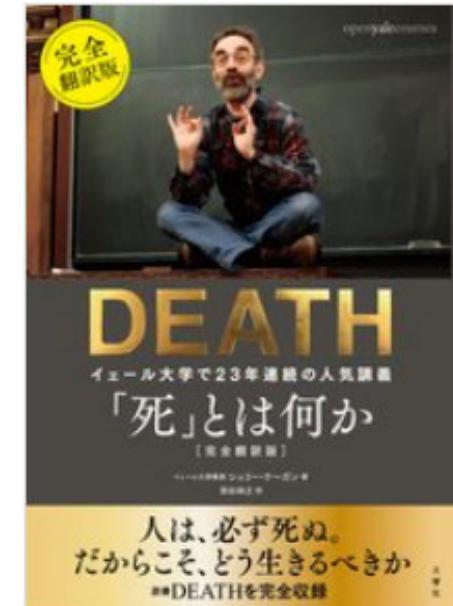


<http://okif.private.coocan.jp/family/HIROSHI.HTM>

今回紹介する本

- シェリー・ケイガン「死とは何か」

「死」というものを宗教的にではなく、論理的に追求した本。
「死」というものを語るには、「私」「同一性」「時間(今)」「神」「意識(言語)」「魂」といったものを確定しなければならない。が、これらは簡単に確定できるようなものではない。
そこで、様々な考えを展開していく。



*中学生の時に読んだ「化学のドレミファ」(米山正信著)のような感触

- 死ぬ主体である私とは何か？

「私」の不確定性(様々な思考実験)

ジョーンズさん



私



私は手術台に横たわり、肝臓が取り出され、ジョーンズさんの肝臓が移植された。
ジョーンズさんには私の肝臓が移植された。それでも私は私だ。
次に、心臓が取り出され、ジョーンズさんの心臓が移植された。
ジョーンズさんには私の心臓が移植された。それでも私は私だ。
最後に、脳が取り出され、ジョーンズさんの脳が移植された。
はて私は？
脳のメモリーモジュール(過去の記憶)だけが移植された場合は？

- 身体説・魂説・人格説または私などないという説

「魂説」(様々な思考実験)

レフティ



ライティ



シェリー・ケイガン



- 身体も記憶(メモリーモジュール)も分割でき、複製できることはわかった。しかし魂は分割も複製もできないのでは？
 - 神がレフティ・ライティというシェリー・ケイガンの複製をつくり、形而上学的な秘密、すなわち シェリー・ケイガンの魂をもっているのはレフティの方だと教えてくれたとしたら。
魂なしの人が生まれてしまうが。
- 魂の入れ替えは知りようがない。

「私の同一性」の不確定性(様々な思考実験)

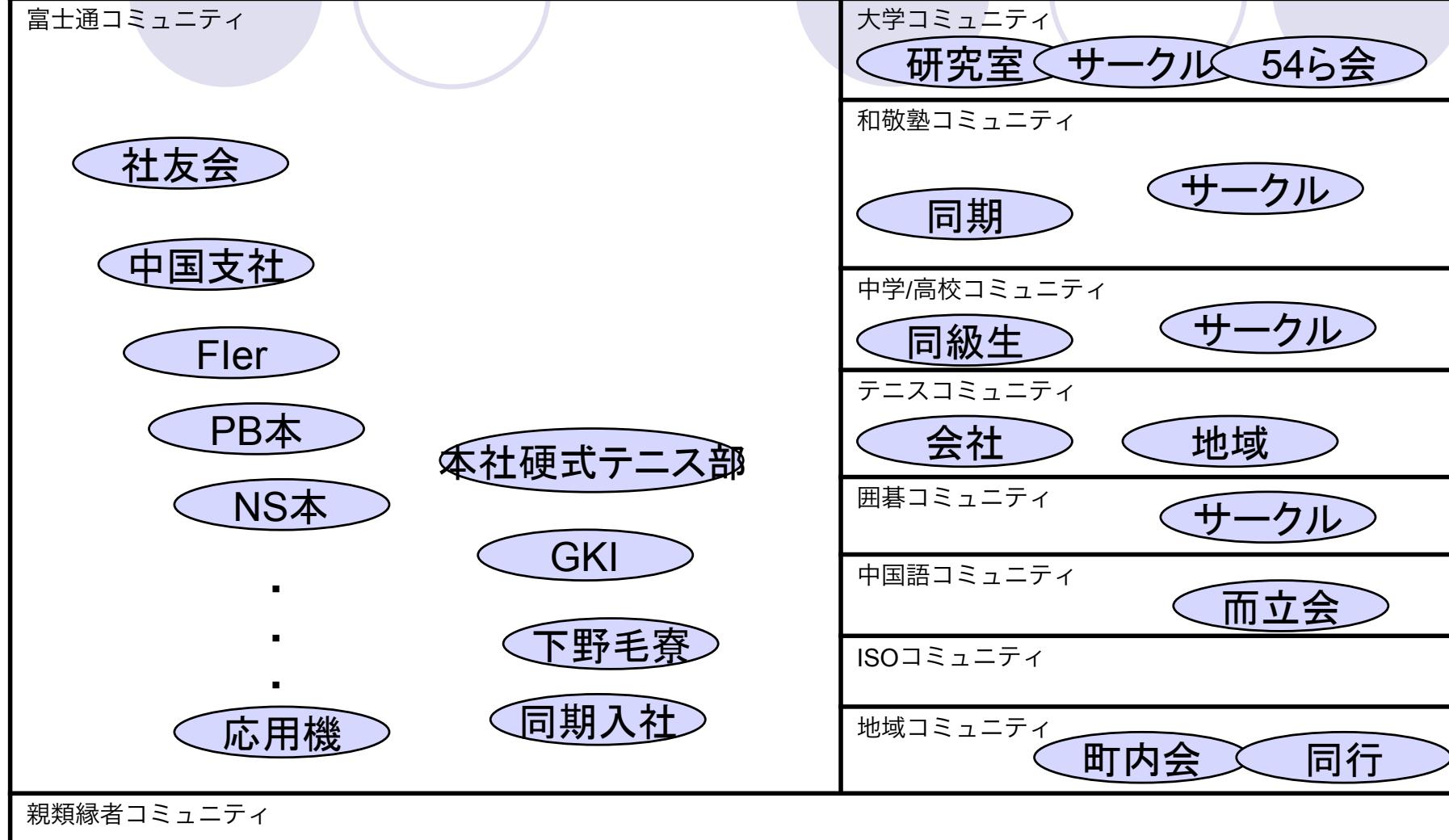
- 積み木の場合。
 - 息子が積み木で手のこんだ塔をつくった。私はうっかりしてその塔をくずしてしまう。しかし細心の注意で、息子がつくったのと寸分たがわぬ塔を造った。しかし「あれは息子が作ったのと同じ塔だ。」は嘘に思える。
- 時計の場合
 - 時計が止まつたので時計店に持っていく。時計店では歯車の鏽を落とすとともにすべての部品を掃除して磨き、組み立て直す。その時、私が「ちょっと待った、これは私の時計ではありません。」と言うとこれはおかしな言い草に思える。
- 最後の審判の場合
 - 最後の審判の日が来て、神があなたの分子を全部元どおりにしたらそれは復活なのか？私の複製は手に入るが、私は復活しないのではないのか？

- 人格説：大切なのは私のものに十分近い人格をもつたものが存在すること。それで充分なのだ。

「人工知能」との関連(ちょっとした言いたい事)

- 外から見て、かなり人と見分けのつかないものが出てきましたね。
 - 囲碁ソフトは全く見分けがつきません。
 - チューリングマシンもかなり見分けがつきません。
 - 外から見て、全く見分けがつかないもの(:=違わない)はおそらく可能。
 - ところで外から見て見分けがつかないって？
- 人工知能の制約の問題
 - データとアルゴリズムであたかも意識があるかのようなものができそうになつてきました。データやアルゴリズムの自動生成も可能そうです。
 - ところでDeep Learningでもビッグデータ(記憶)が必要ですが、記憶は言語とは不可分です。(言語がなければ記憶できない)
言語には制約がある(言語で表彰できないものがある)が、人工知能は言語にかなり制約されるかもしれない。
- 言語の制約の問題
 - 魂のあるなし/死後の世界のあるなし等も、あると言えばある、ないと言えばない...のではないか？
 - 言語というものがなければ「私」も存在しえないので。

リタイア時のマイコミュニティ(棚卸し)



*資産形成コミュニティ？

- 人と人とはおそらく想像以上にかかわっている。(わからないだけで)

【参加者】

益田聰（理工）、篠原泰司（一文）、沖宏志（理工）、露木肇子（法）、梶田あずさ（一文）、山口伸一（理工）、福島碧（社学）、中山隆（理工）、仁多玲子（商）、村山豊（法）前田由紀（一文）、宮田晶子（政経）
(以上 12 名、一部参加の方も含む)

54 ら会イベントで静かな人気の読書会。会を重ねて今回で第 8 回を迎えました。

常連の皆様、お久しぶりの方、そして初参加の方もお 2 人お迎えして、今回も楽しい会になりました。紹介された本は絵本から、同窓の多和田葉子氏の著作、アカデミー賞で話題の村上春樹の『ドライブ・マイ・カー』、江戸末期に生まれた女性イコン画家の生涯を描いた小説、シベリア抑留者のノンフィクション、150 人が 150 人に東京での生活を聞いたインタビュー集、そして読書会で人気の原田マハ氏の小説などなど、いつものように、バラエティに富んでいます。
また、Japan Problem について述べられた本の紹介から、日本の生産性について、リーダーについて、議論が白熱したのも印象的でした。

以下は当日、挙げていただいた本を発表者のお名前とともに紹介いたします。推しの本について、それぞれ長いコメントをいただきており、それをそのまま（文体は常体に統一しました）掲載しております。

このラインナップを見ると、あまりにさまざまで逆につまらないんじゃない？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。いやいや、この雑多な感じが読書会の醍醐味です。お越しいただければ、この面白さがお分かりになると思います。

皆様のご参加をお待ちしております。

1 益田聰さん（理工）

『いのちのまつり「ヌチヌグスージ』 草場一壽 作／平安座資尚・絵（サンマーク出版）

4 歳の孫に命の大切さを伝えたくて、この絵本を手にした。この絵本の目玉、先祖から命は繋がれていることが一目で分かる絵（あつというようなびっくり仕掛け）がいのちの大切さを伝えている。

以前、小学校 3 年生の道徳の副読本として使われていると聞いた。孫には早すぎるかと思っていたが、今回の読書会で、幼稚園で中高生が読み聞かせをしているという話を教えてもらった。

皆さんのお孫さんにおすすめの絵本。

2 篠原泰司さん（一文）

『地球にちりばめられて』 多和田葉子（講談社文庫）

一文出身でドイツのハンブルク在住の小説家多和田葉子さんが 2018 年に出した小説。「世界のどこかにあるはずの自分と同じ母語（日本語）を話す者を探す旅」の物語。メタファーに満ちていて不思議な感

じを味わえる。私の場合、せつない郷愁みたいな感情を感じながら読み終えた。第8章の「Susanoo は語る」は演劇的で特に面白かった。多和田葉子さんは国際的に評価が高く、ノーベル賞候補でもあるらしい。

『エクソフォニー 母語の外に出る旅』 多和田葉子（岩波現代文庫）

エクソフォニーとは母語の外に出た状態。例えば母語の日本語を離れてドイツ語の世界で創作するということではなく、言語と言語の間にあるあわいみたいな場に生きることらしい。世界各地に滞在して感じた作者の気付きや感慨がつづられた隨筆集。示唆に富んだ内容に溢れている。

『女のいない男たち』 村上春樹 文春文庫

2022年アカデミー賞四部門にノミネートされた映画『ドライブマイカー』の原作は、この本の最初の方の部分P19～P70に収録されている短編小説。読んでから観るか観てから読むかの選択で、私は後者を選択。結果としての感想は、どちらが先でもかまわないのではないかと感じた。短編小説では描き切れなかった主題の掘り下げがあり、新たなエピソードもいくつか加えて重層性と厚みのある映画を作り上げているように思う。アカデミー賞を受賞できればいいと思う。

3 沖宏志さん（理工）

『2022年再起動する社会』 伊藤千秋（高陵社書店）

富士通の元副社長で、P C 部隊だった時、上司だった人の書いた本。

コロナ後の社会について述べており、情報 bitが多いわりに、軽くて、アツという間に読める。

Japan Problemについても多々述べている。

- ・電子政府で進んでいる韓国は実は日本のすぐれた実証実験を参考にした。
-やる事がわかっていてもそれを実施できない日本人。
- ・日本のIT産業の労働生産性がアメリカの1/5なのはやらなくてもいい仕事をしているから。
- ・ファイザーは、開発方針に関する意思決定をトップ層からボトム層に移すというカイゼンをやって、ワクチンを開発した。

-米国内の評判が「強欲な会社」から「命を救う会社」に変わった。

しかし、個人的意見としては、日本では「賢い人の上に賢くない人がいる。(Wrong order)」というのがJapan Problemの一番の本質的問題....と思っている。

* 「労働生産性」については、他の方からも意見が出て、議論が沸騰しました。

4 露木肇子さん（法）

『白光』 朝井まかて（文藝春秋）

日本初のイコン画家、山下りんの生涯を描いた小説である。

山下りんは、1857年の江戸末期に茨城県笠間市で生まれ、1939年の昭和初期に同市で81歳で亡くなった。

その美しい宗教画は、函館のハリストス正教会や神田のニコライ堂で見ることができる。

りんは、女性は嫁にいくのが常識という時代に画家を志し、日本画の時代に西洋画を目指し、宗教が未だ弾圧されていた時代にロシア正教に入信し、留学先のロシアの修道院でイコンを強制されると、色彩豊かなイタリア画を望んで抵抗した。1868年の明治維新、1890年の宗教の自由を制限的に認めた明治憲法制定、1904年の日露戦争、1917年のロシア革命という激動の時代にロシア正教信徒は翻弄され、日本で、さらにはロシアでも弾圧されていく。

りんは次々と襲う苦難の中でイコンを描き続けながら、それに込められた意義を次第に理解していく。

小説の最後に書かれたりんの心境は、私達の世代になってようやく共感できるものかもしれない。

なお柚木麻子の「らんたん」も、明治時代にアメリカに留学し、恵泉女学園を創立した河井道を描いたもので迫力あった。津田梅子の新札を契機に、女性の道を切り拓いてきた女性達が、さらにクローズアップされていくことを期待したい。

5 梶田あずさん（一文）

『東京の生活史—— 一五〇人が語り、一五〇人が聞いた 東京の人生』 岸政彦編（筑摩書房）

本の厚さ約 6.5 cm、重さ約 1.4kg、1216 頁、およそ 150 万字。

一般公募による 150 人の聞き手が、それぞれ知り合いの、東京にゆかりのある 150 人にインタビュー。

いまを生きる人びとの膨大な語りを、コラージュのように一冊に集めた本である。

聞き手、語り手のプロフィールなどは一切記されておらず、偶然のように並べられた自分についての 150 の語りからは、その人の人生の断片が生々しく浮かび上がってくる。

私は父母が亡くなつてから、父や母はどんな思いをもつて生きてきたのか、ちっとも知らなかつたなあ、という思いにとらわれたりするのだが、この本は、「語るに足らない人生などない」と言ってる気がする。まだまだ読み始めたばかりのこの本を、一話一話、大切に読んでいきたい。

6 山口伸一さん（理工）

『収容所から来た遺書』 辺見じゅん（文藝春秋）

日本の敗戦が決定した後、突如、不可侵条約を破り参戦したソ連により、中国で武装を解除した日本兵や満鉄の職員は強制的に酷寒のシベリアに労働力として収監された。

本書は満鉄職員だった山本幡男（写真）が収容所で病死し、その遺書を戦友が一字一句覚えて、彼の家族に伝えた実話。

シベリア収容所は政治犯を収監する監獄で、日本兵は寒さと飢え、ソ連兵の恫喝、兵隊同士のいがみ合いなど劣悪な状況に苦しんだ。その中で山本は希望を失わず、戦友達に俳句や演劇などを通して周囲を励ましながら、日本へ帰国することだけを念じていた。が、病に冒され病死する。彼は遺書を家族に残したかったが、日本兵がメモを残すことは許されなかった。そこで、彼を慕う友人や後輩、上司までが遺書を分担し、一言一句間違うことなく覚え、帰国して家族に伝えることを決するのである。ソ連兵の目をかいくぐり、それぞれの方法で暗記した遺書は家族に伝わった。

シベリアでの理不尽な収監に憤慨しながらも、このような状況を受け入れ、その中でよろこびや楽しみを見出し、最後まで帰国を諦めない山本幡男はまさに好漢。もしも同世代で学生時代に知り合えば、一生大切にしたい友人になったに違いない。彼は東京外語出身であるので、接点はなかつたろうが。

日本人として嬉しくも誇らしくも思うが、その一方で、受け入れてばかりで戦おうとしない姿勢には日本人の大人としての美德であるが、弱点を感じてしまう。

今の緊張高まる国際情勢では、ソ連、中国、北朝鮮などの野蛮な国家にはこの態度はまさに思うつぼである。ウクライナや台湾、ウズベキスタン等の国はもちろん他の国からは何もしない楽観主義にしか見えないのでないのではないかと心配になる。耳をすませば解決を諦め、言いなりになりましょうと言うメッセージが聞こえてくるようだ。

山本幡男は友人としては素晴らしいが、現代の政治家としては狡猾さ欠落している。まあ、政治家に限ったことではないが、自分だけのことしか考えない狡猾さを持っていないと現代は生きていけないのでないかと感じてしまう。いじめ問題や過労死、うつ病の増加、フェークニュースやネットの炎上、さらに核保有とミサイル開発など今の状況はラーゲリよりはるかに複雑である。

この複雑な社会をどう生きるべきか山本と話がしたかった。

7 福島碧さん（社学）

『渋沢栄一 上 算盤編』『渋沢栄一 下 論語編』鹿島茂（文春文庫）

第7回の読書会で教えていただいた。商売（仕事）の心得を知りたいと思い、読んだ。感激、感動の連続だった。もっと早く読めばよかったと思う。また後日読み直してみたいと思った数少ない本の一つ。

『新太平記 1～5巻』山岡荘八（山岡荘八歴史文庫）

山岡荘八シリーズの一環で読んだ。徳川家康や明治天皇も、太平記を幼い時に読んで勉強したと知り、読んでみたいと思った。

登場人物の楠木正成の生涯に感動した。“人間には、信念のためにしか生きられない者と、そうでない者の2種類があり、自分の子どもたちがそのいずれであるか見極めて育てるように。”と楠木正成は奥方へ言い伝えて戦場へ旅立った。この言葉は、何度も繰り返し登場する。

『ザリガニの鳴くところ』ディーリア・オーエンズ（早川書房）

以前の読書会でご案内いただき、またお客様に勧められたため読んだ。

途中で苦しくなり、読み続けられず中断したりした。サスペンス&ロマンス小説。

著者は、70才でこの小説を初めて書いたとのこと。このことにも、深い感銘を受けた。

『天、共にあり』中村哲（NHK出版）

『わたしはセロ弾きのゴーシュ』中村哲（NHK出版）

第7回読書会でご案内いただいた本。人間が生きて死ぬことの大切さを教えていただいた。

『楽園のカンヴァス』原田マハ（新潮文庫）

美術館巡りが趣味とお客様に話したところ、是非この本を読んでと薦められた。画家ルソーにまつわるサスペンス&ロマンス小説。面白かった。

『たゆたえども沈まず』原田マハ（幻冬舎文庫）

『ジヴェルニーの食卓』原田マハ（集英社文庫）

『モネのあしあと』原田マハ（幻冬舎文庫）

『ゴッホのあしあと』原田マハ（幻冬舎文庫）

『リボルバー』原田マハ（幻冬舎）

美術好きにはたまらない。フィクションとはいえ、どのようにしてマティスやドガ、ゴッホやモネが絵を描いていたのか、その背景がわかる気がして、とても面白かった。

8 前田由紀さん（一文）

『言の葉の森 日本の恋の歌』チョン・スウン、吉川凪訳（亞紀書房）

韓国の日本語翻訳家である著者が、万葉集や古今和歌集などの和歌を韓国語訳して、日本語現代語訳と対比し、所感を記している。古き時代と現代、そして日本文化と韓国文化が時を超えて、國を超えて重なり合う不思議な文学空間がそこにある。早稲田の大学院での留学した日々も描かれている。人生の華やぎ、切なさ、物悲しさが詰まった本である。

『ライオンのおやつ』小川糸（ポプラ社）

最近は、健康が気になる年代であるが、どんな終末を迎えるか。瀬戸内の島にあるホスピスに訪れた若き主人公が、終末期穩やかな時間を過ごす。「ライオンのおやつ」とは何か、読んでからのお楽しみとしたい。こんな終末を迎えるかと思わせる温かく、優しい時間が流れる。悲壮感より自然にもどっていくような安心感があり、満たされた気分に包まれた。

Don 't Look Up、Netflix

こちらは、地球の終末期を描いた作品。彗星衝突という地球の危機をたまたま察知した冴えない天文学者と助手が、世界中にその事実を伝えようと奔走するが、メディアや國の中枢部に翻弄され、地球を救う機会を逸してしまう。さもありなんと思わせる人間の愚かさを克明に描いている。富裕層は宇宙船で脱出するが、家族と手を繋ぎ地球と運命を共にする庶民のほうが幸せに見える。

9 宮田晶子（政経）

『本日はお日柄もよく』原田マハ（徳間文庫）

近年、あまり小説を読んでいなかったが、読書会で人気の原田マハさんの本を読んでみることにした。原田さんは元キュレーターで、美術がテーマのものから入るのが良いかしらとも思ったが、「本日はお日柄もよく」というタイトルに惹かれてこちらを選んだ。

日本ではあまり馴染みのない職業、スピーチライターのお話。主人公は鎌倉に住んでいて、祖母は俳人でという設定が私にかぶることもあり（私は鎌倉在住、俳人とはとても言えないが、少々俳句をたしなむ）、その点でも親近感があった。

何より、職業柄、わかりやすく多くの人を納得させる文章やタイトルを作りたいと思っているので、言葉の力をテーマにしたこの話はとても興味深かった。ただし、ストーリー展開は予想がつくし、出てくるスピーチについてもいまいちなものもある。

【今回は皆の発表の聞き役として参加された方からも感想をいただいています】

中山 隆さん（理工）

皆様のコメントを興味深く拝聴しておりました。

また、発表対象がテキストベースの紙の本に限定されていなかったところも面白く感じた次第です。

次回 第9回 54 ら読書会

5月27日（金）ホスト 前田由紀さん（一文）

※11月、2月、5月、8月の第4金曜日

19:30～21:00 実施予定

参加者（11名）

沖宏志さん（理工）、茂原さん（一文）、篠原さん（一文）、仁多さん（商）、露木さん（法）、福島さん（社学）、三浦さん（一文）、宮田さん（政経）、村山さん（法）、ラングさん（一文）、前田（一文）

ラング 加代子（一文）**○「4月のある晴れた朝に 100%の女の子に出会うことについて」村上春樹、『カンガルーハイ』（講談社文庫）に収録の短編**

私はハルキストではない。（と再度言おう）しかし、この短編には新鮮な感動を覚えたのだ。不毛の愛、喪失感というものが、メルヘン調のオブラートに包まれて、本当にうまく描いてある。還暦をとうに過ぎた私たちが読んでも、胸がキューンとなるだろう。80 年台の原宿(ホコ天で竹の子族やロカビリー族が群れをなして踊っていた時代)の時代風景も懐かしい。もっとも作品には「原宿」としか出ていない。年代は村上の年齢から勘定し「80 年代の原宿」と勝手に決めつけ、想像を巡らせた。村上は、誰の心の中にもありそうな「ストーリー」を描く名人だと思う。

沖 宏志（理工）**○『終わった人』内館牧子、講談社文庫**

ご存じ定年時の悲哀を書いた本。定年時にはパラダイムシフトが起こる。すなわち **Scarcity of time** の時代から **Scarcity of to do** の時代に変わる。現役時代、仕事が早く、効率のいい人ほど燃費の悪い人に変わる。そして大量の時間リソースをいかに消費するかが課題となる。

○『面白いとは何か？面白く生きるには』森博嗣、ワニブックス

大量の時間リソースを消費できるものとして語学や絵や音楽、碁将棋などが上げられるが、それを自分が面白いと感じなければ始まらない。この本は、そこを追求した本。そして森博嗣はパラダイムシフトに備えて、面白いものを『設計』しておく必要があるよ…と言っているように読めた。

三浦 洋子（一文）**○『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』中村哲、 NHK 出版（2013）**

7年の年月をかけてアフガニスタンで書いた最後の著作。アフガニスタンの旱魃の実態と気候変動の重大さ、取水が人々の生存の術だということ、自然に合わせた技術、自然の恩恵について書かれている。現代文明のあり方を再考させられる本である。

○『カカ・ムラド～ナカムラのおじさん』ガフワラ作、さだまさし他訳、双葉社（2020）

彼の死後、彼の偉業を伝えたいと現地の教育のために書かれた絵本。

○『わたしは「セロ弾きのゴーシュ」 中村哲が本当に伝えたかったこと』中村哲、加藤剛 編集 NHK 出版（2021）

彼との対談を通して、彼の伝えたかったことのまとめ。

仁多 玲子（商）

○『すばらしい人体 あなたの体をめぐる知的冒険』山本健人、ダイヤモンド社（2021）

京都大学医学部を卒業された山本健人氏が著者。一つ一つ、短編で、体の不思議を医者の立場から、やさしく解説されていてすごく読みやすい。普通、医学の本は、硬く読みづらいが、この本に関しては、すぐ入り込める。よかつたら、最近の本なので、皆さんも本屋さんで手にとって、見てください。

茂原 淳一（一文）

○『安曇野』全5巻 白井吉見、筑摩書房

大学3年時、故秋元律郎先生が「夏休み中に安曇野を読んで感激した」と仰せられた。

今秋、長野の中房温泉を訪問時に記憶が蘇り、読み始めた。新宿中村屋の創始者相馬愛蔵を主人公に、明治以降の著者の故郷安曇野出身の多彩な文化人（相馬も含め稻門多し）を描いた大作。

村山 豊（法）

○『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』、加藤陽子、新潮文庫（2018）

2009年単行本朝日出版第9回小林秀雄賞受賞。東京大学文学部教授

昨年の読書会で一文出身の篠原氏が推薦した書籍。たまには読書会で紹介された未読の書籍を読むべきかと思い購入読了。

内容 ①神奈川の名門進学校「私立栄光学園の歴史研究部メンバーへの5日間の特別講義録、②BeforeとAfter 近現代の日本の5戦争の原因および戦争の結果を因果関係的に生徒に問題提起、議論解説、③ タイトルからは「反戦的」「戦争批判論」を想起させるが、純粹歴史科学&ニュートラル＊タイトルはいかにも朝日出版好みだが、ミスリードしており、読書層を限定してしまう。

感想 ①著者は優れた近現代史研究家であるとともに、傑出した教育者と思う。②歴史およびデータから近未来を予測する。私の仕事にとても参考になる。③明治維新、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦まで「大英帝国」にいかに日本が影響され依存していたかを再度認識し、整理できた。

篠原 泰司（一文）

○『DUNE デューン砂の惑星（新訳版）』上中下巻、フランク・ハーバート、ハヤカワ文庫

「デューン」（砂の惑星）監督ドゥニ・ヴィルヌーヴ、フランク・ハーバート原作のSF小説「デューン」（砂の惑星）の再映画化。新宿の映画館の大きなスクリーン（IMAX）で鑑賞したが、壮大な迫力と美しさに大感動した。予想以上の出来栄えに鑑賞しながら涙した。1984年のデビッド・リンチによる「デューン」は大幅な上映時間の短縮によりカットされた部分が多く、デビッ

ト・リンチにとっても不本意だったようだ（結局上映時間は2時間強）。原作の「デューン」の世界を映像にするには2時間強の上映時間ではまったく収まりきらず、今回のドゥニ・ヴィルヌーヴの「デューン」は2時間30分。しかも、パート1のみである（パート2の制作はすでに決まっている）。「デューン」は、私の中では過去のSF小説、SF映画という位置づけだったのだが、こうして1984年以来37年ぶりに映画化されたのにはとても驚いている。原作「デューン」（砂の惑星）の変わらぬ魅力と多くのファンの存在、そしてその描かれた小説のその世界（宇宙？）を満足の行く形で映像化したいという制作者たちが40年近い月日を経ても多く存在するということなのだろう。

1977年に制作中止に追い込まれたホドロフスキイ、1984年のデビット・リンチを受けて今回のドゥニ・ヴィルヌーヴの「デューン」こそ、その決定版になり「2001年宇宙の旅」や「アラビアのロレンス」に肩を並べる傑作となる予感がしている。パート2が楽しみだ。

★読書会に参加された方に応答する形で紹介した本

◇ラングさんに

○『BBRUTUS（ブルータス）2021年10月15日号 No.948 特集 村上春樹 上「読む。」編』
マガジンハウス

p24からの村上春樹の私的読書案内51BOOKGUIDEというコーナーで51冊の本が紹介されている。私も読みたい本が一冊見つかった。

◇村山さんに

○『この国のかたちを見つめ直す』加藤陽子、毎日新聞社

毎日新聞に掲載されたエッセイ、コラム、書評をまとめたもの。日本学術会議の問題についても論じている。私は書評をとても興味深く読んだ。その中では『朝鮮王侯族—帝国日本の準皇族』（新城道彦、中公新書）に興味がわき実際に読了。

◇参加者全員に

○『貧乏国ニッポン ますます転落する国でどう生きるか』加谷珪一、幻冬舎新書（2021）

時間が少し残っていたようなので、最後に紹介した。著者は時々テレビに出演しているが、話の内容が好印象なので著作を読んでみた。現在の日本の経済状況を正確に見通している印象を受けた。

露木 筆子（法）

○『開かせていただき光栄です』（2011）

○『アルモニカ・ディアボリカ』（2013）

○『インタビュー・ウィズ・ザ・プリズナー』（2021）皆川博子、早川書房

作者は、1929年12月生まれ、まもなく92才になる。1997年に出了『死の泉』で幻想的・怪奇的な皆川ワールドに魅せられ、以来はまってきたが、2011年から10年かけたこの3部作は、

作者にとって集大成となる大長編である。

物語は18世紀のロンドンに始まり、独立戦争中のアメリカで終わる。解剖医とその弟子達、盲目の判事と男装の助手が、次々と現われる変死体の謎に挑んでいくミステリーである。時代背景を調べ尽くした歴史小説でもあり、実在の人物も登場する。どんでん返しが続き、最後まで波乱のストーリー展開だが、それより強烈なのは、賄賂だらけの裁判、残虐な刑罰、拷問を受ける囚人、階層や人種による差別や貧困等、腐敗した社会の有り様だ。

法とは、正義とは、人権とは、平等とは何かを、作者から突きつけられた思いがした。

○絵本『にいさん』いせひでこ（伊勢英子）、偕成社

作者の描く絵本はどれも美しいが、ゴッホの人生を弟テオの視点で描いたこの絵本には特に胸を打たれる。それは、テオの言葉に託した、作者のゴッホへの深い憧憬が込められているからだと思う。ひまわりの黄色と星月夜のコバルトブルーを基調とした絵からは、ゴッホの喜びと苦悩、そしてゴッホが暮らした南フランスの情景が伝わってくる。

福島 碧（社学）

○『オーストリア滞在記』中谷美紀、幻冬舎文庫

航空会社勤務の女性から勧められた一冊。コロナ禍をオーストリアでウィーンフィルのビオラ奏者であるご主人様と過ごした中谷美紀さんの日記。コロナ禍でこんなに忙しい人がここにもいた！と驚いた。その日の日記の終わりには、ディナー時のBG Mの紹介があり、こちらも楽しみの1つだった。

○『雄氣堂々』城山三郎、新潮文庫

以前読書会で勧められ、また近く渋沢栄一が1万円札になると知り読む。渋沢栄一代記。渋沢がいなければ今の日本の中産階級はなく、日本も韓国のようにになっていたかもしれないと思うと、渋沢を登用した徳川慶喜ひいては平岡円四郎に感服した。城山三郎は、徳川慶喜について、彼は明治政府に参画したかったといっていたが、私は、山岡荘八が慶喜は明治政府に参加する意思はなかたという方に1票。

○『徳川慶喜全6巻』山岡荘八、山岡荘八歴史文庫、講談社

徳川慶喜一代記。徳川慶喜には、お目にかかりたかった。世の中を遠くまで洞察する力には感服した。何が世の中、及び自身にとって大事なことかをよくわかっていた方。水戸斉昭の存在意義は、徳川慶喜をこの世に送り出したことにあると思う。

○『明治天皇全6巻』山岡荘八、山岡荘八歴史文庫、講談社

明治天皇一代記。だが、明治天皇についてはあまり記載がなく、維新についての記述がほとんどだった。

○『フィンセント・ファン・ゴッホ ひまわり』小林晶子、求龍堂

この夏の SOMPO 美術館の風景画展で購入したもの。ゴッホがなぜひまわりばかり描くようになったのか？弟テオに宛てた書簡からゴッホの肉声が聞こえてくる。ゴッホは、テオには本音で接していたようだ。もっとゴッホのことを知りたくなった。

宮田 晶子（政経）

『渋沢栄一 算盤篇』 鹿島茂、文藝春秋（2011）

大河ドラマや新一万円札の顔としても話題の渋沢栄一の伝記である。渋沢がなぜ日本に資本主義を根付かせ、近代化に大きく貢献することができたのか。これについて博覧強記の鹿島茂先生が、さまざまな資料を大雑把に言えば、フランスのサンシモン主義の影響からそれを解き明かそうという試みなのだが、この視点で語れるのは仏文が専門の鹿島先生ならでは、という気がする。渋沢もすごいけど、鹿島先生の博学にもびっくりだ。

*渋沢の『論語と算盤』にちなみ、「論語篇」もあるが、まだ読めていない。

『Vincent』 Barbara Stock、Selfmadehero（2015）

このロシア語版。ゴッホのお話が出たので、ついでに紹介。イラストのゴッホ伝。絵がとても可愛いかったので、ロシア語も読めないので、エルミタージュ美術館のミュージアムショップで買ってしまった。言葉はわからないけれど、絵を見ていると、ストーリーはだいたい想像できる。

前田 由紀（一文）

○『オマルとハッサン 4歳で難民になったぼくと弟の15年』 ヴィクトリア・ジェスミン、合同出版（2021）

ケニアのダダーブと呼ばれる国連の難民キャンプで暮らすオマルと障害をもつ弟ハッサン兄弟の物語である。二人は、隣国ソマリアで生まれたが、小さい時に内戦で、父親が殺され、母親とも混乱の中生き別れ、たった二人で命絶え絶えこのキャンプにたどり着く。これは、実話に基づいたお話で、難民キャンプでの実際の日常生活が克明に描かれている点がこの本で特筆すべきことである。グラフィックノベルのため分かりやすく、難民の人々を理解するきっかけとなるに違いない本である。

○『後悔しない「親の家」片づけ入門 カツオが磯野家を片づける日』 渡部亜矢、SB 新書

最近、実家の片づけで大変な思いをした。まだの方には、このような本を読んであらかじめ準備を周到にしておくことをお勧めしたい。

*次回の読書会は、2月25日（金）を予定しています。担当は、宮田晶子さんです。

【参加者】

村山豊（法）、篠原泰司（一文）、沖宏志（理工）、鈴木伸治（商）、加藤透（理工）、露木肇子（法）、益田あけみ（理工）、仁多玲子（商）、前田由紀（一文）、宮田晶子（政経）、三浦洋子（一文）、櫻井直子（一文）、益田聰

当日、挙げていただいた本を発表者のお名前とともに紹介いたします。推しの本について、それぞれ長いコメントをいただきしております、それをそのまま（文体だけは常体に統一しました）掲載しております。

1 村山豊さん（法）**『ステルス戦争』 ロバート・スピルディング（経営科学出版）**

「戦わずして勝つ。」有名な孫子の戦略を忠実に継承する中国が展開しているのは砲弾や爆弾を使う20世紀の戦争ではない。ステルス戦争とは「見えない戦争」の意味。

「超限戦」と言われるこの戦略は、以下を具体的戦術例とする。

- ① 政治戦 各国政府要人、経済界・マスコミ等幹部の懐柔、取り込み（脅し、利益供与、買収）、
- ② 情報戦 10万人のサイバー軍による各国政府、重要企業へのハッキング、データ入手、
- ③ 教育戦 大学等教育機関への孔子学院設置等「親中高等教育機関」醸成、留学生派遣
- ④ 宇宙戦 宇宙空間での覇権確立 GPSを破壊されれば米軍は機能停止する。
- ⑤ 経済・技術戦 外国企業の技術を、方法を問わず徹底的に入手、活用する。

著者は米国空軍准将退役後、中国駐在武官、米国国家安全保障会議高官 経済学・数学博士。流ちょうな標準中国語を使う「中国の戦略を知り尽くしたホワイトハウス高官」。

ようやく中国の100年単位の「超限戦」に気づいた米国。日本の政財界は追随できているのだろうか。

2 篠原泰司さん（一文）**『八月のはて』 柳美里（新潮文庫）**

「八月のはて」は「JR 上野駅公園口」で全米図書賞を受賞した柳美里さんの小説で、「新潮」2021年4月号に掲載された柳美里さんのロングインタビュー記事（副題「時の目盛りが壊れた後で」）の中で触れていて、そこで私はこの小説の存在を知った。

もともと2002年4月17日～2004年3月16日に朝日新聞夕刊に連載されていた小説で、最終部分を残して連載は打ち切られた。その後最終部分は「新潮」2004年5月号・7月号に掲載され、小説は無事に完成。そして単行本が2004年8月15日に、文庫本も2007年2月1日に発行された。しかし、その後いつ頃からか絶版状態になり、最近まで文庫本の目録からも外れていた。作家の立ち位置や小説の内容などから様々な事情や問題の存在を考えてしまうのは考えすぎだろうか。

ほとんど絶版状態だったのが、6月の末ごろに文庫版が新装復刊。全米図書館賞受賞の影響はとても大きかったようだ。

新装復刊した文庫版の上巻の帯に東浩紀さんが「マジックリアリズムの大傑作」と書いているように、

まさにマジック（幻想）が物語のリアリズムを何倍にも増幅させているように感じた。読み終えた直後はガルシア・マルケスの「百年の孤独」を読み終えた時のような印象を持った。

1920年～1970年を生きた柳美里さんの祖父の人生と半島の歴史、故郷の蜜陽という町の情景を基調とした物語に、口寄席、阿娘（アラン）伝説、蜜陽アリランなどのイメージに喚起されたような幻想的なもう一つの物語が全編に融合されている。

読み終えた後しばらく時間が経過したが、訪れたこともないのに勝手に想像しながら読んでいた蜜陽の街の情景を、今は思い出すたびに郷愁に近い感情を感じている。いつか、私も蜜陽を実際に訪れ、想像ではない本物の蜜陽を味わいたいと思っている。

3 沖宏志さん（理工）

『ナンバークラブ』（『かぼちゃの馬車』より） 星新一（新潮文庫）

『ライフログの進め』 ゴードン・ベル（ハヤカワ新書 juice）

どちらもビッグデータ/情報の整理というものをテーマにした本。特にナンバークラブは中学生の時に読んで衝撃を受けた。

「ナンバー・クラブは一見なんということのないバーのような場所だが、テーブルの上には小さな装置がある。会員証を差しこんで暗証番号を押すと、有線で繋がっている中央コンピュータが事前に登録してある会員同士の経験を突きあわせ、共通話題をテープに印字してくれる」

Google の野望は、「世界中の情報を整理する。」というものだが、一個人が「自分の人生すべてを整理する」ことが可能になり、それがほんの1チップに収まるような時代が来たような気がする。

そしてこの個人の情報の整理には Web というものが使え、各個人が情報を整理するとクロスリファレンス（情報のつきあわせ）というものが使える。そうすると、人と人とが、想像以上にかかわっているのが明らかになるかもしれない。

*沖さんから、ご自身の読書歴やこれまでの興味などを整理したサイトをご紹介いただき、「情報の整理」についてのお考えを伺いました。単なる本の紹介に留まらないお話で、とても興味深かったです。

4 鈴木伸治さん（商）

『ミドルマーチ』 ジョージ・エリオット（光文社古典新訳文庫）

前回ご紹介したジョージ・エリオットのミドルマーチ全4巻を読了した。

本書は、「地方生活の研究」と副題が付けられているように、家族や結婚、職業、金銭といった私的問題から、政治、社会、宗教、文化、科学、産業など広範囲の問題も扱っている。舞台である19世紀初頭のイギリスの地方都市では、囲い込み法の成立により農地は少数の富裕な地主に集中し、小農民は農地を借りる農業労働者へ転落する一方で、産業革命も終盤となり、工業の進展により農業にも機械が導入されて、農民の多くが都市に出て工場労働者となっている。そして、これら農業労働者や工場労働者の低賃金などへの不満が増大して、社会に不穏な雰囲気がみなぎっており、選挙法の改正が行われたりしていた。合わせて、イギリスでは国教会が公的権力を独占していたため、ローマ・カトリック教徒や非国教徒であるプロテスタントは、文武の公職から排斥されていたが、自由主義の風潮が広まるなか、非国教徒の権利が拡大されることにもなった。

このような時代背景の中、それぞれの立場の人物が描かれている。主な主人公は、ドロシアとリドグ

イドで、若さゆえの夢や理想を抱いて生きるのだが、それぞれ失望や挫折を経験して何らかの妥協を受け入れていくことになる。二人の挫折を経験しながらも、理想を諦めずに行動していく姿に心打たれるものがあった。

最近、イギリスの小説を続けて読んで感じるのは、その時代の経済・社会制度や宗教・文化・風俗を知ることによって、より深く理解し楽しめるのではないかということだ。

『ダロウェイ夫人』 バージニア・ウルフ（光文社古典新訳文庫）

ノルウェー・ブック・クラブ「史上最高の小説ベスト100」から、最近読みついでいるイギリスの女性作家として、バージニア・ウルフの「ダロウェイ夫人」を読み始めている。

読み始めての感想としては、描かれているのが、人物の外的な行動ではなくて、内面的な意識、すなわち私たちが常にしている行動しながら心の中で思っていることを中心に描いているということだ。内容や感想については次回ご紹介させていただきたい。

『新米刑事 モース・オックスフォード事件簿』（テレビドラマ）

最近、BS11で放映されることになったので、是非、ご覧いただきたいと思い、テレビドラマ「新米刑事モース オックスフォード事件簿」をご紹介する。

イギリスの推理小説作家コリン・デクスターが生んだモース警部のシリーズは、私の大好きな推理小説でお勧めなのだが、そのモース警部の新人時代をテレビドラマ化したものが「新米刑事モース オックスフォード事件簿」。以前、NHK BS プレミアムで放映されたものを見て、大変気に入り、DVDでも購入してしまった。是非ご覧いただきたいと思う。

5 加藤透さん（理工）

『深夜特急1—香港、マカオ』『深夜特急2—マレー半島、シンガポール』 沢木耕太郎（新潮文庫）

『12万円で世界を歩く』 下川裕治（朝日文庫）

このところ、外国へ行けなくなって、沢木耕太郎と下川裕治の旅行記を読み直してみた。下川裕治の12万円でどこまで地球を踏査できるか、体を張ってレポートしている内容は、圧巻で、真似の出来ない行動力に嘆息する。沢木耕太郎の著書も、久し振りに読んで、その端正な語り口に触れることが出来たが、今となって再読すると、ルポしている世界が少し小さいような気持ちがするのは、勝手な感想だろうか。

6 露木肇子さん（法）

『神よ、憐れみたまえ』 小池真理子（新潮社）

著者は、1952年生まれ。95年「恋」で直木賞を受賞し、その後も数々の受賞歴のある名うての恋愛小説家である。夢中で読み耽った頃もあったが、ここ20年ほどご無沙汰していた。

新聞書評で主人公百々子が「スカーレット・オハラさながら」とあって、「風と共に去りぬ」ファンとしては見過ごせなくなり、570頁の大作を一気に読破した。百々子の美貌、負けん気の強さ、片思いへの固執、波乱万丈の人生等は確かにスカーレットに似ているが、背景が違うのはもちろん、著者の意図がまるで違う。これは著者が、親の認知症や死、夫の死、火災等様々な苦難を経験し、年を重ねた今書き上げたことによると思う。

題名からは、著者の祈りが伝わってくる。

7 益田あけみさん（理工）

『クワトロ・ラガッティ』 若桑みどり（集英社文庫）

読書会で以前紹介されて、はじめて浜田マハの作品を読んだのが「楽園のキャンバス」。とても面白く、次に読んだのが「風神雷神」。これがまた興味深い話で、天正少年使節に俵屋宗達も同行していたという筋立てで、宗達の情熱や才能を書いたものだった。そして、巻末に この小説は上記から影響を受けて書いたと紹介されており、この本にたどりついた。

天正少年使節の話と思って読み始めたら、直接の使節団の話は全体の 10 分の 1 くらいで、信長から秀吉・家康の時代にいたる（キリスト教弾圧に向かう）さまざまな出来事を、宣教師団側（イエズス会、フランシスコ会）と日本側の資料を比べながら説明されていて、興味深く読み進めることができた。

初めて出会った若桑みどり氏だったが、美術史学者として広く活躍された方のようだが、2007 年に 71 歳で亡くなられていることを知った。この作品は 2003 年に発表され、2004 年に大佛次郎賞を受賞されている。

8 仁多玲子さん（商）

『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』 佐藤愛子（小学館）

今回、私の紹介した本は、佐藤愛子著の「九十八歳。戦いやまず日は暮れず」。

読書会に間に合うように読み切るつもりだったが、いろいろ用事できて、完読できなかったが、途中までは読んだ。

なぜ、この本を選んだかというと、以前この会で、上野千鶴子さんの「在宅ひとり死のススメ」を紹介したが、この本を読んでも、本当に在宅で老後を迎えるか疑問だった。

でも、佐藤愛子さんのこの本を読むと、自分がしっかりとしていれば可能だとわかる。佐藤愛子さんは、ご存じだろうが、1969 年に「戦いすんで日が暮れて」で直木賞を受賞した作家で、今、97 歳、11 月で 98 歳になられる。長生きは、多分、日ごろの鍛錬の成果と思われるが、何をされたかは、そこまでわからない。

でも、言えることは、きちんと生活されて生きてこられたのだと思う。私も、無理な生活はせず、きちんと食事・運動等をして、これから的生活を送りたいと思った次第である。

9 前田由紀さん（一文）

『覚醒するシスターフッド』 マラ・カリー、柚木麻子ほか（河出書房新社）

「シスターフッド」とは、女性同士の連帯を表す言葉。社会での女性ならではの違和感を描くアメリカ、イギリス、カナダ、中国、韓国の海外作家を含む 10 名の作家短編集。MeToo 運動等近年ジェンダー問題に対する機運が世界的に高まっている。セクハラ、外見、結婚、子育て、老後、近未来をテーマに縦横無尽に描かれる女性の生きづらさ。中でも子育てを応援する柚木麻子の『パティオ 8』の胸のすぐどん返しが痛快だ。

『気候崩壊 次世代とともに考える』 宇佐美誠（岩波書店）

「気候変動」では、もはや事態の深刻さが伝わらないということで、英語では、ClimateBreakdown 「気候崩壊」という言葉が使われ始めているという。この本では、著者の中高生への 2 時間の特別授業をもとに、章立てとして 1 時間目に気候変動の深刻さ、2 時間目にグローバル化した問題としての倫理について論じられている。生徒たちからの物怖じしない鋭い質問もこの本の魅力である。

10 宮田晶子（政経）

『一度きりの大泉の話』 萩尾望都（河出書房新社）

『少年の名はジルベール』 竹宮恵子（小学館文庫）

『ポーの一族』などで有名な少女漫画家、萩尾望都は、九州から上京して大泉で『風と木の詩』などで知られる竹宮恵子と同居していた。その住まいは向かいに住んでいた増山法恵に加え、それから山岸涼子や木原敏江など、若手の漫画家たちが集い、「大泉サロン」とも呼ばれていた。しかし、これは 2 年で解散してしまう。その理由を述べたのが本書。解散の時のトラウマで、萩尾は神経性の眼病にも悩まされていていたくらいなのだが、解散の事情についてはずっと沈黙を守ってきた。ずっと話すつもりはなかつたそうだが、竹宮恵子が自伝（『少年の名はジルベール』）を発表したため、そうもいかなくなつて「一度きり」の話を書いた。人間関係にはとても不器用そうな萩尾望都の葛藤がとても切なくなる。もちろん竹宮恵子にも言い分はあるだろうが、ここまで黙ってきたことを話さざるを得なかつた萩尾の気持ちを思うと辛くなる。

『ポーの一族』はとても素敵な漫画だが、時を超えて生き続けなければならないエドガーとアランという存在は時としていたたまれなくなる。そういう気持ちに通じる本だった。

第 5 回 春 の オ ン ラ イ ン 54 ら 読 書 会

2021. 05. 28

参加者：ラング加代子（一文）、加藤透（理工）、益田あけみ（理工）、鈴木伸治（商）、
露木肇子（法）、茂原淳一（一文）、篠原泰司（一文）、鈴木忠善（政経）、福島碧（社学）、
宮田晶子（政経）、仁多玲子（商）、前田由紀（一文）以上 12 名（発表順）

※文章は、常体で統一しています。

① ラング加代子さん（一文）

『カンガルー日和』 村上春樹 著 （講談社文庫）

「しかしカンガルーを見るための朝はようやくめぐってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確信した。」この短編からの引用である。「我々」とは登場人物の夫婦のこと。不可解な夫婦だ！私はハルキストではない。しかし好みではないと思いつつ、今までハルキの作品は結構読んでいる。ドイツには昔読んだ本の一部しか持って来ていないので、この作品も『はじめての文学 村上春樹』という短編の寄せ集めの本で再読した。

私はドイツで日本語を教えているが、秋冬学期の最初の4回をオンラインで持てることになり、生徒集めの意図もあって、こちらでも人気のハルキ作品を読もうと目論んだ。なぜこの作品を選んだのか、一番の理由はその尺の手頃さにあるのだが、この作品の分からなさにもあると思う（彼の作品を評して「日常のファンタジー」という言葉がある）。「日本人の私にも不可解なんだ。ドイツ人に分かってたまるか」とデカイ顔をしたい！というのは冗談で、やはり教鞭をとるからには、作品の分析ができなくてはならないという経緯で、今回の読書会で、ハルキストの方のご意見を伺いたかった。残念ながら、わが文学部の先輩のフォロワーはいらっしゃらなかった。ご参加の皆様、初参加の私がお茶を濁してしまい申し訳ない。まだ時間があるので、日本からハルキ作品を取り寄せ、勉強しなおそうと思う。

② 加藤透さん（理工）

『箱の家に住みたい』 難波和彦、王国社

『新・住宅論』 難波和彦、左右社

1995 年に完成した「箱の家」第 1 号を初めとして、精力的に住宅設計を続けられている難波和彦氏の新著『新・住宅論』のエッセンスを、簡潔に紹介した。対象がデザインであるため、写真や図版を織り込んで紹介したが、効果的であったか少々疑問。難波和彦氏は、そのデザインの思考に、マイケル・ポランニーの「暗黙知の次元」をベースにしているが、理工学の世界で”暗黙知”が適用されている点が意外であるとのご意見を頂いた。私も、意外であり、よい建築は暗黙知から始まり、形式知で定義がなされ、普及するとの難波氏

のこだわりには、もう少しご提言を勉強し、機会があればまた報告したい。バンクシーに続き、今回もデザインの話にさせて頂いたが、次回は、実験的小説などに取り組んでみたい。

③ 益田あけみさん（理工）

ミレニアム1 『ドラゴン・タトゥーの女』 スティーヴ・ラーソン作

作者はスウェーデンの作家で、スウェーデンを舞台にした小説。ミレニアム社の雑誌「ミレニアム」の記者と、個性的な女性調査員が、疑惑の解明に向けて悪や暴力と戦うダイナミックな話で、ベストセラーになった。登場する場所、特に建物や室内の描写が細かく具体的で、空間を言葉で説明していく、そこから想像力を働かせて建物のイメージを組み立てながら、読むのも面白い。例えば、記者がしばらく仕事場として使うゲストハウスの描写を取り上げ、建築計画演習の授業課題に使っている。文章から、建物の間取りやインテリア、周囲の環境を読み取って、形をイメージすることは、空間を把握するトレーニングにもなる。

この作品は、映画やTVドラマなど多く映像化されていて、ひょっとして作者は最初から映像化をねらって、舞台背景の細かい描写を書き込んだのかもしれないと思う。3部作を発表したところで作者が亡くなり、その後、別の作家ダヴィド・ラーゲルクランツが3作発表して、シリーズ6まで出ている。

④ 鈴木伸治さん（商）

『ミドルマーチ』 ジョージ・エリオット、光文社古典新訳文庫

作者ジョージ・エリオットは、女性作家メアリ・アン・エヴァンズのペンネームで、イギリスにおける、ジェーン・オースチン『高慢と偏見』、シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』に続く女性作家である。

私は、ノルウェー・ブック・クラブが世界54か国の著名な作家100名の投票を集計して選定した「史上最高の小説ベスト100」の中から年代順に主なものを読んでおり、『高慢と偏見』、『ジェイン・エア』、『嵐が丘』に続いて読み始めたものである。これら3作品はとても興味深くて面白く、かつ映画やテレビドラマ化もされていて更に深く理解することができる。特に、『高慢と偏見』は原作も大変面白いが、映画のローレンス・オリヴィエ出演「高慢と偏見」とキーラ・ナイトレイ出演「プライドと偏見」、テレビドラマのコリン・ファースト出演「高慢と偏見」（通りから人がいなくなると言われるほど大人気を博す）は是非ご覧になっていただきたいお薦めの作品である。

本書については現在、全4巻の3巻を読んでいるところだが、訳者が「人間の心理や行動、他者との関係などについて、まさに人間研究と呼ぶに相応しい鋭い分析と洞察を含んだ長編小説である」と紹介しているが、まさにその通りの小説だということを紹介させ

ていただく。なお、トルストイ『アンナ・カレーニア』で、アンナがモスクワからサンクトペテルブルグまでの汽車の道中に読んでいたイギリスの小説は『ミドルマーチ』であつたという説もあるそうだ。本書の次には、イギリスの次に続く女性作家で、本書を「大人のために書かれた数少ないイギリス小説のひとつ」と評したヴァージニア・ウルフを読もうと思っている。

⑤ 露木肇子さん（法）

『永遠の森』『不見の月』『歓喜の歌』 愛蔵版惑星シリーズ I II III

著 浩江作 ハヤカワ文庫

『永遠の森』は2000年に発行されたSF短編集で、その華麗なる世界に私はたちまち魅了された。それから約20年を経て2冊の続篇が出て大変嬉しい。

舞台は地球からみて月と反対側に位置する惑星で、そこにはありとあらゆる芸術・音楽・舞台・生物等が集められていて、星まるごと博物館となっている。ここに勤める学芸員や自警団員は、それぞれAIと脳を直結していて、日常的に脳内会話をしている。彼らは、圧倒的な美や、理解し難い芸術や、改造された生物等をめぐって生ずる紛争や犯罪を解決すべく日々奮闘し、AIと共に成長していく。

テーマは美、芸術、そして心である。

次々と繰り出される究極の美しさや、奇想天外なアイデアや、想像を絶する壮大さに驚きながら、芸術とは何か、AIと人の違いは何かを考えるのは至福のひとときだ。

⑥ 茂原淳一さん（一文）

『戦争広告代理店』 高木徹著 講談社 2002年 現在は講談社文庫

最近起きている紛争を報じる際に“民族浄化”という言葉が使われている。この言葉は、旧ユーゴスラビアのボスニア紛争の際にセルビアに敵対するボスニア側が雇ったアメリカのPR会社による造語である。PR会社の巧みなメディア戦略に乗せられてまんまと世界中の報道機関がセルビアを一方的な悪者に仕立て上げて、挙げ句の果てには10年後にコソボ紛争でセルビアがNATOの空爆を受けることになってしまった。この情報操作をNHKの番組で放送したものを見籍化したものが本書である。本来守秘義務のあるPR会社の詳細な内部資料がここまで明らかになったのかは本書を読んで“なるほど”と思っていただきたい。

⑦ 篠原泰司さん（一文）

『女としての天皇』 大澤真幸（ゲスト本郷和人）左右社 2021年2月

日本人はなぜ天皇を棄てなかつたのか。とりわけ武士の支配する世の中において天皇と武士はなぜ共存できたのか。こういった疑問への解答を見つけようとしているのが、この

本である。最初の三分の一は歴史学者の本郷和人との対談。残りの部分が大澤真幸の論考となっている。ラカンの精神分析などが出てきて難解な部分もあるが、武士の起源や折口信夫を引用した天皇の本質としての女性性などの話は、とても興味深く読めた。曖昧なまま存続しつづけるのは、権力構造だけでないということ。実は同じような特徴は日本人の社会と精神にも共通なものではないかという、結論部分に述べられている記述には大いに納得した。

「ニュースウイーク日本版 2021年5月4/11日号（ゴールデンウイーク合併号）」

特集が「いま見るべき韓国ドラマ&映画」だったので購入した。紹介されているドラマ&映画の中で私のお勧めは「マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～（2018）」。3月ごろ、Netflixで視聴。全16話。後半の方は毎回泣きながら見ていた。Amazon Primeでも視聴可能。予告編はこちら。<https://www.youtube.com/watch?v=G9qAPL7v2Z8>

『人新世の「資本論』』集英社新書 斎藤幸平 2020年9月

私が購入した時点で16万部。現在（2021年5月）は30万部を超えたベストセラーになっているらしい。「人新世」（ひとしんせい）とはノーベル化学賞を受賞した科学者が述べた地質学的な新たな時代の呼び名のこと。たとえば洪積世とか沖積世という言葉と同類の言葉である。これはつまり、現代の人間の活動が地層に確認できるほどの痕跡を残すほど巨大で危機的な影響を地球環境に与えつつあるということを意味している。

「地球にやさしい」とか「SDGs」とか「持続可能」、「脱炭素社会」などという言葉をテレビやネットなどで多く見たり聞いたりするようになってきている。しかし、これらの言葉は経済成長を維持しつつの脱炭素の達成を目指すもの。筆者は経済成長と脱炭素の両立は不可能だと主張しており、残念ながら、これには納得せざるをえない。

危機を乗り越えるのには、脱経済成長、つまり資本主義からの脱却が絶対条件なのだが、資本主義を終わらせるのは至難のわざに違いなく、共産主義に移行すればいいというような生易しいものでは絶対にありえない。よって、人類は未来において大幅な人口減少を伴う衰退を経験するか、さもなくば、滅亡の危機に直面せざるをえないのではないか。というのが読み終えての私の感想である。

⑧ 鈴木忠善さん（政経）

『虎蔵の物語：さて幸せは見つかったかな』

私が「パレットクラブスクール」というイラスト教室へ通って学んだテクニックを使って作った絵本である。犬のポチと猫のタマちゃんの禁断の恋から生まれた虎蔵が幸せを探しに旅に出る物語。

※この作品は、Amazon の kindle 版で購読可能。他にも、Amazon で TAD SUZUKI 名で検索されると鈴木さんの作品が掲載されている。多言語での翻訳版もあり。

⑨ 福島碧さん（社学）

『今日の風何色？』『のぶカンタービレ！』辻井いつ子著

「高校生の時辻井伸行さんのショパンを聞いて涙が止まらなかった」と言う私のお店のお客様が勧めてくれた本。読みやすくて、一気に読めた。もともと私は辻井伸行さんのピアノの大ファンで、お店の BGM も全て彼のピアノ曲。その中のショパンのノクターン 2 番を聴くと、いつも辻井さんもひょっとしてショパンの生家ワルシャワ近郊のジェラゾヴァ・ヴォラへ行ったことがあるのでは？という思いが強くなった。それを探して読み進んでいくと「のぶカンタービレ！」にあった！やはり辻井伸行さん親子は、ジェラゾヴァ・ヴォラを訪ねていた！この本は、辻井伸行さんがアメリカのクライバーンで優勝して世の中へ出る 2 年前に書かれたものである。私が読むより、これから子育てをする人、また子育て中の人には是非読んでいただきたい。読み終わった本は、お店のライブラリーへ置いてある。

『柳生宗矩 1~4 卷』『柳生石舟斎』山岡莊八著

山岡莊八シリーズの一環で読む。男の美学ないし人としての美学 “自分のために生きるな” “金のために生きるな” 著者はこの美学を伝えるため、何冊も本を書いたのでは？と考えてしまった。人の生き方を変えてしまう本である。柳生宗矩は、男として大変魅力的であった。また、人は、1 人では物事をなしえないことを、指南役、柳生宗矩を通じて学ばせていただいた。（マゴにも “指南役” をつけることを考えるようになった。笑）柳生石舟斎の身のひき方を考えるに、私も若い人に譲らないといけないと思った。

⑩ 宮田晶子さん（政経）

『ミシンの見る夢』ビアンカ・ヒツツオルノ／河出書房新社

舞台は 19 世紀末、階級社会のイタリア。主人公はお金持ちのお屋敷に通って針仕事を請け負うお針子さんである。さまざまなお屋敷に通ううちに見聞きしたエピソード 6 つと、そしてその後のお話を語るエピローグという構成。お金持ちの結構エグいエピソードもあり、語りのうまさで引き込まれるが、この主人公は下層階級であるが、向上心もあり、自

立心もあり、おばあさんから受け継いだ知恵もあって、だからこそその得難い出会いもあって、そういうことは生きていく上でとても大切なのだと改めて感じた。まだ孫はないが、女の子の孫でもできたら読ませたい。

⑪ 仁多玲子さん（商）

今回の読書会は、聞き役にまわった。皆さんの紹介する本は、それぞれ個性的で、魅力的であった。日頃、私は、あまりこういうお話を聞く機会がないので、読書会は、とても楽しい時間である。これからも、話を聞くだけでも、許していただけるなら、参加させていただきたい。ちょっとお話をした雑誌とは、「週間現代」の2021年5月22・29日号。体に悪いパンが、実名で紹介されている。よかったら、立ち読みをお勧めしたい。

⑫ 前田由紀（一文）

『考えるとはどういうことか』梶谷真司、幻冬舎新書

哲学対話は、著名な哲学者の学説を学ぶアカデミックな哲学と異なり、自発的な問い合わせ意見を交わし、対話によって一緒に問題を探求していく。中3生が、この本に触発されて、哲学対話のイベントをしたいと企画書をもってきたので、最近学校図書館で実施した。「娯楽は、社会に貢献するか」という命題だったが、他者の思いもよらない視点に触れられたことは、新鮮な驚きだった。哲学は、何の役にも立たないが、自由な空間であるという著者の主張を実感した。

次回 夏の54ら読書会

8月27日（金）ホスト 宮田晶子さん（政経）

※11月、2月、5月、8月の第4金曜日

19:30～21:00 実施予定

[目次に戻る](#)

第4回 冬の54ら読書会報告

(発表順、敬称略)

2021年2月26日（金）実施

今回は前回8名からほぼ倍増の15名に参加いただき、11名からお勧めの本の紹介がありました。スパイ小説から、韓国ドラマの公式ガイドブックとして発売された絵本、全米で500万部売れたミステリ小説（でも只のミステリではない）、世界中の注目を集めるバンクシーの画集、「伝説の企業家」西和彦氏の半生（反省）記、などなど、これまで以上に多岐にわたる本が登場しました。本に対する皆さんのコメントからも話が広がり、充実した、楽しい時間が持てました。

（宮田）

茂原（一文）

●KGBの男／ベン・マッキンタイア／中央公論新社

現在も英国の保護下で暮らしている元ソ連の幹部スパイ（かつ英國に寝返った二重スパイ）の実話です。もたらされた最大の成果はフルシチョフの勘違いを米英に伝えて核戦争を防いだことですが、それよりもスパイの道徳的葛藤や何十年もの間いつでも脱出できる準備をしている様子が興味深い。実際の写真もある。

●死に山／ドニー・アイカー／中央公論新社

50年前ウラル山脈で大学生の登山隊が真冬に遭難した。その状況はテントから遠く離れたところで靴も履かず、頭蓋骨骨折や舌がないものもいた。原因については今まで様々な憶測がなされてきたが、著者のアメリカ人ジャーナリストは現地調査を踏まえて大胆な推測をする。

篠原（一文）

●無能の人・日の戯れ／つげ義春／新潮文庫

『ねじ式』と『紅い花』しか知らなかったつげ義春。私は高尚なシュールレアリズム風な絵を描く漫画家だとずっとと思っていた。しかし、こんなに面白い漫画を描いていたとは・・・。

巻末の解説で吉本隆明が書いているように、「高みに登ったり張り切ったりすると不安でいたたまれないので、いつもじぶんを最低のところにおいているような性格の主人公」なのだから、お話しも最底辺になる。昭和40～60年ごろか？舞台は昭和。極めて粗末で不潔な場末で、時にはエロく繰り広げられるその物語の風景は、滑稽でユーモラスでもある。飘々とした感じがとても面白い。

●JR上野駅公園口／柳美里／河出書房新社 *2020年暮れに文庫本も出ました

主人公は3.11（東日本大震災）の被災地である南相馬出身のホームレス。フィクション（小説）ではあるがノンフィクションのようなしっかりした取材に基づいた小説である。巻末の解説を書いた原武史の「天皇制の磁力」という言葉が印象的でした。「居場所」と「生きづらさ」、「フクシマ」と「オリンピック」の距離についても考えさせられました。

- (絵本として5冊) 悪夢を食べて育った少年、ゾンビの子、春の日の犬、手とアンコウ、本当の顔を探して／いずれもチョ・ヨン、チャムサン／宝島社
(韓国ドラマ『サイコだけど大丈夫』から)

「サイコだけど大丈夫」はパーソナリティ障害の有名絵本作家の女性と自閉スペクトラム症の兄を持つ保護司の男性のラブロマンス。Netflixで公開されている2020年公開の韓国ドラマです。このドラマはサイコミステリーとサイコサスペンスの要素も多く含みながら展開するのですが、登場人物のトラウマや過去の傷を乗り越えて行く成長ストーリーも大きな柱になっていて、その成長ストーリーを絵本作家のヒロインがドラマの中で絵本にして行くというところが面白さにもなっています。ドラマの中に出てくるその絵本が綺麗で面白そうだったので、ネットで調べてみたところやはり出版されていました。日本語にも翻訳されました。

「サイコでも大丈夫」は「愛の不時着」や「梨泰院クラス」などに次ぐ名作ドラマという評価もあるようで、あの吉本ばななさんもブログに高評価を載せています。1月20日のブログです。

<https://ameblo.jp/yoshimotobanana/entry-12651450802.html>

「サイコでも大丈夫」の予告編 youtube

https://www.youtube.com/watch?v=yI_-HgByEYE

露木（法）

- ザリガニの泣くところ／ディーリア・オーエンズ／早川書房

20世紀後半、ノースカロライナ州の湿地で、幼いカイアはたった一人、自然の中でたくましく生き抜いていく。村人に「湿地の少女」と蔑まれる中、ティト少年に文字を教わったカイアは、恋をしながら、みるみるうちに才能を開花させていく。ところが、湿地で死体が発見されたことで、カイアは疑いをかけられてしまう。

◇DV、虐待、貧困、差別等、社会問題をとり上げながら、湿地の自然を鮮やかに描き、かつ推理小説でもあり恋愛小説でもあるという贅沢な一冊である。法廷シーンも説得力がある。

◇作者が動物学者だからこそ美しい自然描写を映像で見てみたく、映画化が待ち遠しい。

村富（理工）

- 反省記／西和彦／ダイヤモンド社

著者は理工学部機械工学科で我々と同期入学で、教室では何回か会ったことがあります。アスキー社を率いた彼の浮き沈みの激しい人生と、単なる半生記ではなく表題に興味を持って購入しました。率直に彼自身の人生を振り返った内容で良かったです。また、日本の産業文化の在り方、突出した人材の処遇について考えさせられました。

加藤（理工）

- Wall & Piece*／BANKSY（バンクシー画集）

世界的な人気を獲得したバンクシー。そのオリジナルの画集を元に、横たわっているアナーキズムの精神を報告しました。

鈴木（政経）

●樂園のカンヴァス／原田マハ／新潮文庫

アンリ、ルソーの絵の真贋を確かめるというミステリー仕立ての筋書きです。そのキャンバスはピカソが描きかけの絵のまま、ルソーに譲ったというので、もしかしたらピカソの未発表の絵が眠っているかも。という疑惑もあり、なかなか読者を飽きさせません。

仁多（商）

●在宅ひとり死のススメ／上野千鶴子／文春新書

●おひとり様の老後／上野千鶴子／法研

上野千鶴子さんは、現在72歳で、東京大学名誉教授です。上野さんの考え方は、自分の自宅で最期を迎えるのが、それには介護保険の力が不可欠といっています。

私も、上野さんと同じような考え方で、実現できればと、思います。

多分これからも、上野さんは、これに関して、年が上の女性としていろいろ教えていただけると思います。注目していきたいと思います。

福島

●徳川家康（1～26巻）／山岡荘八／講談社（山岡荘八歴史文庫）

第1回読書会で教えていただき読み始め、～26巻まで読み終わるのに約2年かかりました。

以前から、日本の屋台骨を作った人物・徳川家康には興味がありました。書物からは、さまざまなことを学びました。

また、これは著者の山岡荘八氏が40～60歳の時に20年かけて平和を祈りながら新聞連載したもののこと。この著者の生き方にも深い感銘を受けました。

益田（理工）

●天文学者が解説する宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と宇宙の旅／谷口義明／光文社新書

天文学者の立場での「銀河鉄道の夜」を解説しています。

作中の、宇宙がイメージされる言葉を取り上げて、いろいろな角度からの考察をしています。

そこまでこじつける？と思われるものもあるくらいに、幅広い可能性を検討していく、賢治は天才かも、と思えてしまいます。

AINシュタインの話や、原子のエネルギーの話など、数式も出てきますが、苦手な方は「そういう理論があるのね」くらいに読み飛ばしてしまえばよく、宮沢賢治も、宇宙も、より身近になると思います。

前田（文）

●雄氣堂々（上下）／城山三郎／新潮文庫

今年の大河ドラマ「青天を衝け」が始まることから、渋沢栄一の伝記小説『雄氣堂々』を今回再読した。江戸幕府から明治政府への大転換が、あの短期間で成し得たのか不思議でならなかつたが、この本でそこには、熱氣あふれる若者たちの必死の試行錯誤があったことが理解できる。大隈重信も彼の生涯に大きく関わっていることに驚く。

●江戸の読書会／前田勉／平凡社ライブラリー

江戸時代の読書会とは。藩校では、四書五経の書物を講釈する形式であった。会読は「複数が定期的に集まり、1つの書物を討論しながら共同で読み合う読書形式」で、伊藤仁斎の後、荻生徂徠の時代以降さかんになった。徂徠は、会読の参加者を諸君氏の略で尊称「諸君」と呼び、対等の立場であることとし、自由闊達な議論がなされた。このような会読の復活を望みたい。

宮田（政経）

●ヘンな日本美術史／山口晃／祥伝社

日本の伝統的絵画の様式を用いつつ、油絵の技法を使って年鳥瞰図や合戦図などを描かれている山口さんが、鳥獣戯画に始まり、雪舟、洛中洛外図、そして幕末から明治期の河鍋暁斎に至る、日本美術の解説書。こう書くと堅苦しいですが、山口さんの画家としての視点がとても面白い。伝統的な日本画のものの捉え方がよくわかります。そして、西洋画の技法が入ってきたために日本画家はかなり悩み、苦労をしたようなのです。しかし、この本を読むと、「本物」の絵を鑑賞したくなります。やはり実物を見てこそその絵だなあと思います。

広渡（商）

●まいにち小鍋／小田真規子／ダイヤモンド社

皆さんの発表を楽しく聞かせていただきました。本当は今回は聴衆として、お話を聴くだけにしようかと思っていたのですが、1～2人前のヘルシーで手軽な小鍋のレシピ本を見つけたので、持ってきました。「味じまん」で鍋の特集をしたのですが、おすすめです。

本の紹介はしないで、発表者の本の話を聞きたい、と参加された方からも感想をいただいています。

櫻井（一文）

読書会、楽しく拝見しました。

本を紹介してくださった方々が熱く語られて、知らなかった本を興味深く教えていただき、どれも読んでみようかなという気持ちになりました。

みなさんが知らない本を選ぶというハードルがあるような気もしましたが、知っていても熱く語ればいいのかな。

*次回 初夏のオンライン54 ら読書会 是非お気軽に参加ください。

5月28日（金）19：30～21：00 ホスト：前田（一文）

目次に戻る

第3回 秋の54ら読書会報告（発表順） 実施

2020年10月30日（金）

前回5名から新たに3名増えて8名となり、にぎやかな会となりました。宮田さんのダイヤモンド社で編集した経営書や日本学術会議で話題の加藤陽子さん、動画配信サイトでのドラマ、Go To トラベルでの旅行、人気沸騰の「鬼滅の刃」など話題が盛り沢山でした。どちらかと言えば、政治経済の本が多かったですが、毎回紹介される本が多岐にわたり、教わることも多く、今回も楽しい会となりました。
(前田)

宮田（政経）

●『ぜんぶ、すれば』中野善壽／ディスカヴァー・トゥエンティワン

著者は寺田倉庫の前社長で、天王洲をアートの街に変えた人。

「今日がすべて、颯爽と軽やかに、ぜんぶ捨てれば」という中野氏の生き方が綴られています。このように人生を歩むのは難しいけど、物事に対する考え方はとてもためになりました。

●『世界標準の経営理論』入山章栄／ダイヤモンド社

経営理論とはビジネスパーソンの思考の軸として重要、という考えの下、経営理論30について解説。800ページもあるのに、3000円を切っている（税別）という超お買い得本（?!）。

篠原（一文）

今回は、たまたま日本学術会議の任命問題があったので、歴史を中心に2冊+1冊で紹介しました。

●『8・15と3・11 戦後史の死角』笠井潔／NHK出版（NHK出版新書）

東日本大震災（3・11）の後、日本を襲ったあの災厄の意味を考えていた頃に出会った一冊。加藤典洋の「ゴジラ＝戦死者の亡靈」説などを通して戦後の日本の歴史と課題をあぶりだした本。曖昧で漠然としたイメージでしか捉えていなかった明治維新以来の日本近・現代史に眼が開いた感じでした。加藤洋典の『戦後入門』や白井聰の『永続敗戦論』などと問題意識は共通していると思います。

●『それでも日本人は「戦争」を選んだ』加藤陽子／新潮社

日本学術会議の会員に任命されなかつた6名のうちの1人である加藤陽子先生。先生と呼ばせていただいたのは、トークイベントなどに何度も参加して感じる学問的なレベルの高さと透徹した歴史への視点と謙虚さに感銘を覚えるからです。この本は高校生を対象とし

た連続講義を収録したもの。それゆえ、私のような素人にもわかりやすく（しかし内容は深く）書かれていて読みやすい。

●ユリイカ 2009年10月臨時増刊号 総特集=ペ・ドゥナ『空気人形』を生きて
是枝 裕和，山下 敦弘他／青土社

Amazon Prime でたまたま観た韓国ドラマの「威風堂々な彼女」。その主演女優のペ・ドゥナの演技に大変感動してしまいました。ペ・ドゥナは日本の映画にも出演していて、それが「リンダリンダ」と「空気人形」。「空気人形」（2009年）は是枝監督の映画で、ユリイカで特集していたのでamazon で買ってしまいました。ペ・ドゥナの出演している映画は「リンダリンダ」と「空気人形」の他に「グエムル-漢江の怪物-」、「ほえる犬は噛まない」を見たところ。ドラマは「威風堂々な彼女」と「秘密の森」を見て、現在はアメリカドラマの「センス」を少しかじったところ。Netflix で「秘密の森」のシーズン2が配信されているので。もう少ししたら観るつもりです。「秘密の森」は面白いですよ。

梶田（一文）

●『無名』沢木耕太郎／幻冬舎（幻冬舎文庫）

世俗的な成功とは無縁だったというお父さんの死にゆく姿を見つめ、その人生への思いを描いたノンフィクション・エッセイ。「無名の人の無名の人生にも、確かなものがある」という、沢木氏の言葉が胸に沁みる。読書会の日は、ちょうど父の命日。私は、父がどんな思いで生きていたのか、父の人生をほとんど知らない。父も母ももうこの世にはいないまま、父母の人生を抱きしめたい。

茂原（一文）

●「解説『地獄の黙示録』」立花隆／文藝春秋

知の巨人立花隆によるフランシス・コッポラ監督の映画“地獄の黙示録”の解説です。この映画はエンターテイメントとしても大成功しましたが、立花隆は原作となった20世紀初頭に書かれたコンラッドの“闇の奥”（ヨーロッパのアフリカの植民地化）に基づき解説をしています。コッポラはどれだけの人が理解できると思ってこの映画を作ったのでしょうか。私はずっと単なる戦争映画だと思っていた。

●『サンデルの政治哲学』小林正弥／平凡社（平凡社新書）

テレビを見ているとアメリカにはマスクを頑として拒否する人がいて、“なんでここまで意地になるの？”と思ったりするのですが、この本読み直してみて、信念に関わる重大問題なのかなと考えてみました。NHK の“ハーバード白熱教室”で有名になった正義論の解説です。

正義をめぐる3つの立場を一般むけに身近な具体例で説明しています。他者の正義を理解

するのに役立つと思います。もちろん私の独善も。

いずれも絶版。 アマゾンで中古をとても安く買えます。

仁多（商）

●読書会に参加して

今回、オンライン読書会に参加しましたが、特に紹介したい本もないのに、聞き役になりました。参加は前回に続いて2回目です。今回、男の方の紹介された本は、政治とか経済とか固い本ばかりで、ちょっと戸惑いました。前回の時は、美術に関する本が多く、私は絵が好きなので、とても聞いていて楽しかったです。でも、こういう本もあるのだということがわかり、それはそれで面白かったです。女性の紹介した本は、面白そうで、一度読んでみたいと思いました。次回は、来年の2月に開催すること、また聞き役かもしれません、何も用事がなければ参加したいと思います。オンラインで、家でゆっくり参加できるということも、魅力です。

村山（法）

20年前に刊行された二冊の「近未来予測本」を再読し、この20年間を振り返ってみた。

●『やがて中国の崩壊が始まる』ゴードン・チャン／草思社

2000年代に多く刊行された中国崩壊本の一冊。代表的な論文を今一度読み返してみた。我々はどこで間違えたのか？前提条件は何が大きく変化、変質したのか？資本主義的経済の発展には政治的に自由闊達な情報流通と自由な議論が必要不可欠な筈。それのないこの国はどうして一気に世界第二位の経済大国に駆け上がったのか？この論文で決定的に欠けていた視点→20世紀は「石油の時代」 21世紀は「データの時代」 大量のデータを取得、蓄積、加工できる体制が圧倒的な比較優位を生む。

所感：あの国をビッグモンスターにしてしまったのは何か？責任の一端がある米国で進む政権交代とともに考えてみたい。

●『平成三十年』堺屋 太一／朝日新聞社

2000年に書かれた「近未来予測本」。一部の予測は当たっているが、大部分は外れるというリスクを敢然と取って執筆した堺屋氏に敬意を表して再読してみた。

的中した予言：

- ①全体 結局日本は何もしなかった。変われなかった。
- ②個別 スマホの普及 とくにGPSの活用
団地の高齢化、空き家の増加

外れた予測

- ①全体 インフレ、高金利と大幅な円安→実際には長期デフレ

②個別 政府の組織 生産者単位から消費者単位へ

所感： 経済企画庁長官を務めた堺屋氏さえも、デフレが 30 年も続くとは予測せず。私も間違えたのは仕方ないか。

露木（法）

W・サローヤンの本を 2 冊ご紹介します。

●『我が名はアラム』三浦朱門訳／角川書店（角川文庫）

サローヤンはカリフォルニアのアルメニア移民の集落で育った作家である。

本書は作者の子ども時代を彷彿とさせるアルメニア移民の日常を描いたもので、少年アラムのいたずらは痛快であり、とりまく人々を見つめるアラムの視線は鋭いが、やさしい。

●『パパ・ユーアクレイジー』伊丹十三訳／新潮社（新潮文庫）

作家の父と学校嫌いの 10 歳の息子の海辺での生活をつづった作品。

息子と父の果てしなく続く会話は、禅問答のようで、愉快かつ考え深い。

●感想

最近のアゼルバイジャンとアルメニアの武力衝突のニュースを聞き、2019 年夏の旅行を思い出した。隣国のジョージアはワイン発祥の地として有名で、このコーカサス三国にワインづくりを期待して訪れたのだが、期待以上の旅となった。特にアルメニアには強く惹かれた。アルメニア人は、ノアの箱舟伝説のある標高 5137m、円錐形のアララト山を崇めていて、山頂で見つかった箱舟の一部という板片を国宝としている。しかし、トルコから迫害を受け続け、これに対抗するためロシアの支配下に入ったところ、ある日突然、ロシアがトルコにアララト山を割譲してしまった。このため、アルメニア人はすぐ近くにあるアララト山を、眺めることはできても登ることはできなくなってしまった。青く美しいアララト山を見ながら、日本語の上手なガイドさんからこんな話を聞くと、アルメニア人の悲しみがひしひしと伝わってきた。その旅行でサローヤンがアルメニア人と知り、帰って早速、約 50 年ぶりにアラムを読み直した。そして、登場するアルメニア人の故郷への思いがどれほど深いものかを感じることができた。サローヤンの作品は哀愁とユーモアと鋭い批判精神と人間愛と自由な発想にあふれていて、読んでいると、笑いながら胸が痛んだり、うなったりと忙しい。アルメニア人は誇り高く、今回の紛争も解決は難しいのだろうと思う。夏の日の牧歌的な風景を思い出しながら、平和が戻ることをただただ祈るばかりだ。

前田（一文）

●『八咫鳥シリーズ』阿部智里／文藝春秋（文春文庫）

早稲田出身の作家は余多いで、代表作家の村上春樹のライブラリーもキャンパスに出現するらしい。若い作家で言えば、朝井リョウの就活を描いた『何者』も良かったが、今回は、中高生に人気の阿部智里を紹介したい。11 月号の雑誌ダ・ヴィンチにも特集された。ファンタジーは、独自の世界を構築するとき、創造主である神の心持ちになるという。平安朝

風の貴族絵巻は、豪華絢爛。描写は、みやびで美しいが、会話がラノベ調なのが、少々難。

●『博士と狂人　世界最高の辞書 OED の誕生秘話』早川書房（ハヤカワ文庫 NF）

ヒューマントラストシネマ有楽町で、たまたまこの映画を観て、現実にあった史実に驚き、原作を読む。オックスフォード大学英語辞典（OED）の編纂に大きな功績を残した二人の人物の意外な経歴と凄まじい人生。当時の辞典づくりの途方もない艱難辛苦と奥深さは、ひとつひとつの言葉の移ろいやすさ、かけがえのなさを気付かせてくれる。各章冒頭に、キーワードの辞書見出し語が載っているのも、OED の作りがよくわかり、心憎い演出である。

※次回　冬のオンライン 54 ら読書会　是非お気軽にご参加
を！

2月26日（金）19:30～21:00 ホスト：宮田（政経）

第2回54ら読書会(オンライン)報告

2020年8月24日(金) 19:30~21:00

参加者： 篠原（一文）、仁多（商）、茂原（一文）、宮田（政経）、前田（一文）発表順

【紹介本のリスト】

篠原さん

① 『絵を見る技術 名画の構造を読み解く』 秋田麻早子 朝日出版 1800円

「絵の造形を見るポイント」(本書から抜粋)を教えてくれる本。造形としての絵画を観察するポイントと、そのポイントを活用した絵の観察の仕方を実践的に教えてくれます。今までにない本です。こんな本が欲しかった。(笑)これを読んだ人は、すぐにでも美術館に絵を見に行きたくなること間違いなしですよ。発売当初(2019年5月)から注目していましたが、発売以来評価は上々。その高い評価を今も維持して続いているようです。2020年8月現在も新刊話題書のコーナーに平積みしている大型書店もあるようです。

② 『この世界の片隅に』 こうの史代 双葉社 上・中・下 各648円

劇場用アニメが大ヒットしたコミック本ですが、お勧めは2018年にTBSが制作した実写版ドラマです。Amazonprimeで見られます(全7話)。コミック本が基本ですがアニメ映画、実写版ドラマとそれぞれ少しずつ違った内容が盛り込まれていて面白い。それぞれ比較してみるのも楽しいです。私は実写版ドラマ→アニメ映画→コミック本の順で楽しみました。

③ 『キングダム』 原泰久 集英社 現在58巻 各巻540円

終了するのに後10年ぐらいかかりそうな大長編コミック。史記の記述を土台にしているのでしっかりと重厚なストーリー展開です。羌瘣(きょう かい)という女性戦士や河了貂(かりよう てん)という女軍師の存在はとってもキュートです。(笑)
ゲーム・オブ・スローンでもそうでしたが、若き女性戦士の登場人物は物語を大いに盛り上げてくれます。

※この他にも、加藤陽子さんの著作や三国志～軍師連盟～、芸術新潮(2020年8月号)などを雑談風に紹介しました。それらも次回以降にチャンスがあればじっくりと。またよろしくお願いします。

仁多さん

すべて、ガン予防の本。医師の勉強会に定期的に参加している。

① 『そのサラダ油が脳と体を壊してる』 医学博士 山崎哲盛著

② 『50歳から若返るための1分間腸健康法』 東京医科歯科大学名誉教授 藤田紘一著

③ 『隠れ病は腸もれを疑え』 東京医科歯科大学名誉教授 藤田紘一郎著

最新号の週刊朝日 9月4日号「コロナに負けない新習慣 免疫力上げる食べ物、下げる食べ物」でも藤田先生が執筆されている。

茂原さん

① 『消えたベラスケス』 ローラカミング著、柏書房

偶然図書館で見つけた小冊子をきっかけに、18世紀の英国の書店主が偶然手に入れた“ベラスケス”によってその人生が翻弄される。並行して17世紀当時のベラスケス、スペイン国王についてのお話もいっぱい。資料を丹念に探ったノンフィクション。結末はびっくり。

② 『続カラマーザフの兄弟』 龜山郁夫著、河出書房新社

‘海辺のカフカ’が好きで野方に居を構えたという著名なロシア文学者の著者が、未完だったカラマーザフの兄弟を野方に舞台を移して完結させようという大胆な試み。果たして父殺しは誰か？

※本の話をきっかけに楽しい会話が弾みました。オンラインだと遠くの人も気軽に参加できますね。

宮田さん

① 『13歳からのアート思考』 末永幸歩、ダイヤモンド社

アートの見方についての本ですが、作者がどのような思考を辿ってその表現に至ったかを考えることで、作品に対する理解を深めるアプローチが紹介されています。現代美術の鑑賞の仕方がわかつてくるのですが、「作品の根っこにあるものを見てみよう！」というところが、思考法、発想法に役立つ本です。

② 『嫌われる勇気』 岸見一郎&古賀文建、ダイヤモンド社

哲人と青年の対話という形を取りながら、アドラー心理学をわかりやすく解説しています。生きづらさを感じている、特に若い人にはとても救いになる本ではないかと思います。

③ 『海軍主計大尉小泉信吉』 小泉信三、文藝春秋（今は文春文庫）

一人息子の信吉さんの戦死後、小泉信三が思い出などを綴り、私家版として配ったものが死後に公刊され、ベストセラーになったのが本書。淡々とした文章のなかに、信吉さんへの限りない愛情が感じられます。戦地から信吉さんがご家族に宛てた手紙もユーモアに溢れ、とても素敵です。

前田

① 『昭和 16 年夏の敗戦』、猪瀬直樹、中央公論新社（中公文庫）

中央公論新社中高生読書感想文企画があり、中高生 15 名とこの夏一緒に読んだ本。

戦後 75 年、開戦直前の昭和 16 年夏には、戦争必敗を若きエリート集団「総力戦研究所」がシミュレーションしていたという史実をもとに描かれる開戦直前の内実を描く。

② 『2020 年 6 月 30 日にまたここで会おう』瀧本哲史、星海社

NHK クローズアップ現代にも取り上げられた。若い世代に向けて社会変革を呼び掛ける熱いメッセージ。言葉を武器にしてロジックとレトリックを磨けと檄を飛ばす。

☆今回は、アート系の本、戦争に関する本が重なった。少人数だったが、一人一人とじっくりお話する機会となり、様々な本を通じて中身の濃い楽しい会となった。

54 ら読書会は、学校図書館で司書をし、息子が早稲田界隈で古本屋をしている前田（一文）が担当しているが、次回よりビジネス書出版のダイヤモンド社にお勤めの宮田晶子さん（政経）が、読書会の幹事として加わることをご報告申し上げたい。

次回は、秋のオンライン読書会

10 月 30 日（金）19:30～21:00

皆さんのご参加をお待ちしています！

[目次に戻る](#)

第1回 54 ら読書会（2019年10月実施）

紹介本リスト

- 平野啓一郎『私とは何か—「個人」から「分人」へ』（講談社現代新書）
- ピーター・トレメイン『蜘蛛の巣』（創元推理文庫）
- 井沢元彦『逆説の日本史』（小学館文庫）
- 塩野七生『ローマ人の物語』（新潮社）
- 荒谷大輔『資本主義に出口はあるか』（講談社現代新書）
- マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、斎藤幸平
『資本主義の終わりか、人間の終焉か？ 未来への大分岐』（集英社新書）
- 壺屋めり『ルネサンスの世渡り術』（芸術新聞社）
- 窪美澄『ふがいない僕は空を見た』（新潮文庫）
- 東川篤哉『交換殺人には向かない夜』（光文社文庫）
- リービ英雄『英語で読む万葉集』（岩波新書）
- チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房）
- Newsweek（日本語版）『特集：米ジョージタウン大学 世界のエリートが学ぶ至高のリーダー論』

前田由紀（一文）

第1回 54 ら読書会（2019年10月25日 早稲田古書店 あんとれボックスにて実施）

【参加者】 茂原、益田あけみ、宮田、村山、福島、篠原、鈴木、前田 計8名

【紹介本リスト】

茂原さん（一文）

○平野啓一郎『私とは何か—「個人」から「分人」へ』（講談社現代新書）

三島由紀夫の再来と言われた著者ですが、難解そうで敬遠していました。息子の新書を手に取った次第です。自分の一貫性に拘らなくてもいいじゃないか、八方美人結構、責任の半分は相手にある。と思って生きなさい。色とりどりの自分(分人)を認めようという考えは真面目な若者に（そして老人にも）うれしい助言。

宮田さん（政経）

○ピーター・トレメイン『蜘蛛の巣』上下巻（創元推理文庫）

7世紀のアイルランドを舞台に、王国の姫君で法廷弁護士の資格を持ち、裁判官でもある修道女フィデルマが殺人事件の謎を解いていきます。ミステリの面白さとしてはまあ普通かな、と思うのですが、古代のアイルランドが叡智と人間性を備えた社会で、障害者にも優しく、女性の地位も高かったということに驚かされました。

村山さん（法）

○井沢元彦『逆説の日本史』（小学館文庫）

週刊ポスト誌上で実に四半世紀に以上にわたり連載中の、作家井沢元彦氏による歴史ノンフィクション。現在25巻目のテーマは「日英同盟と黄禍論の謎」。著者は早大法学部卒業の二年先輩。「資料偏重主義」「宗教の無視軽視」の歴史学会を痛烈に批判し、法学部らしい「厳格な論理的推論」で大胆に歴史考察。私の人生、仕事にとって「近未来を予測するために歴史を学ぶ」という絶大な影響を受け、「日本でリスク管理が難しい所以」等自分の各種セミナー、ブログ等で引用させていただいている次第です。

福島さん（社学）

○塩野七生『ローマ人の物語』（新潮社）

数年前に子供がスコットランドの大学院へ留学するにあたり、心配なので（どっちが！！）大学院の寮までついて行くに際し、道中や現地で読む本を探しました。『ローマ人の物語』は、全般に面白かったけれど、特にカエサルが登場する8～12巻は、資料の多いこともあってスピードといい迫力といい圧巻!!□でした。その後著者の塩野七生さんのエッセイを読むと、彼女は惚れ込んだカエサルを書くためにこの本を書いたとのこと。（なるほど、我が家の中の子供はこの巻しか読みません。）この本を読んでいる時は、なるほどと頷きつつ、ヨーロッパ中を旅している気分でした。「E U」ができるのにも頷きました。もともとは一つのローマ帝国なのですから。

篠原さん（一文）

○荒谷大輔『資本主義に出口はあるか』（講談社現代新書）

ポスト資本主義に関する一冊。ロックとルソーから社会と歴史を読み解こうという本。新たな視点を与えてくれた本として評価したい一冊です。現在（2021年3月30日）も再読したいと思っている一冊。

○マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、斎藤幸平

『資本主義の終わりか、人間の終焉か？未来への大分岐』（集英社新書）

新進気鋭の経済学者である斎藤幸平氏の対談集。これもポスト資本主義に関する本。対談相手はマイケル・ハート（政治哲学）、マルクス・ガブリエル（哲学）、ポール・メイソン（経済ジャーナリスト）というそうそうたるメンバー。私はマルクス・ガブリエルの名前に惹かれてこの本を買い求めました。斎藤幸平氏に関しては、現在（2021年3月30日）売れている「人新世の「資本論」」が面白そうです。

○壺屋めり『ルネサンスの世渡り術』（芸術新聞社）

ルネサンスの芸術家たちが、パトロンたちと繰り広げた手練手管？を描いた本。著者本人の漫画とイラストも楽しく面白い。著者の壺井めり氏の本名は古川 萌（ふるかわ・もえ）。

イタリア・ルネサンス美術を専門とする美術史家です。

○窪美澄『ふがいない僕は空を見た』（新潮文庫）

R-18 文学賞受賞の作者なので性的描写に期待したが、そんなものをはるかに超えた感動のうちに読み終えた。最後には涙が止まらなかった。生きる勇気をくれる小説です。

鈴木さん（政経）

○東川篤哉『交換殺人には向かない夜』（光文社文庫）

東川篤哉は、テレビドラマになった『謎解きはディナーのあとで』などの作品の作家です。私の読んだ作品では、これがベストでした。交換殺人とネタバレしているのに、読者を惑わす仕掛け満載です。

前田（一文）

○リービ英雄『英語で読む万葉集』（岩波新書）

令和の出典ということで、脚光を浴びている万葉集。この本は、作家のリービ英雄さんが、日本文学を研究していた若い頃に英訳した万葉集の一部とその解説となっている（英訳は、全米図書賞を受賞）。外国語を通してみると、また新たな万葉集の世界を重層的かつ深層的に味わうことができる。彼は、そのことを多言語的高揚感（バイリンガルエキサイ

トメント）と呼んでいる。

○チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房）

韓国30代の女性が、出産のため仕事を辞め1人で子育てすることで、精神の不調をきたしてしまう。そこから、子どものころからの女性だからこそ生きづらさを振り返る。韓国的小説だが、日本でも多くの女性の共感を得た作品である。

○Newsweek（日本語版）「特集：米ジョージタウン大学 世界のエリートが学ぶ至高のリーダー論」2019年6月18日号

「全米最高の教授」の人とされる、ジョージタウン大学のサム・ポトリッキオ教授が説くリーダー論。①毎週3冊の読書。1冊は伝記。1冊は小説や詩。もう1冊は、知らない分野。②できるだけ紙媒体を使うこと。新聞や雑誌、そして書籍。ネットから離れる事は、記憶力や想像力を高める上で有効など参考になることが多かった。